末日の聖徒

The saints of the latter days

第一版 2022/11/20 バージョン

黒木俊宏

この資料は個人の聖典研究の助けとして黒木俊宏が個人的に作成したものであり、
末日聖徒イエス・キリスト教会の公式出版物ではありません。

目次

はじめに 5

祈りの実験 5
聖餐会での思いつき、「末日の聖徒」という題名 5
すべてのレッスンをつなげること 5

天からの教えとその働きの仕組み 7

1 章：末日聖徒という不思議な名前 8

教会歴史上での正式な命名 8
末日の聖徒のイエス・キリストの教会 8
聖徒とは 9
ヨハネの見た 7 つの封印 10
ヨハネ自身が聖徒と呼んだ者たちの中に立った 11
イスラエルの集合と 14 万 4 千人 13

2 章：神様の偉大な計画 14

救いの計画 14
全人類に公平に与えられる機会 15
そのためのシオンの建設 15
主の山へ 16
福千年 17
アブラハムの聖約 18

3 章：大背教 20

書き変えられ失われた聖書 20
消えてしまった聖霊の存在 21
見えないものを信じることができるという確信の喪失 22
大背教時代 22

4 章：回復 26

ジョセフ・スミス 27
モルモン書と聖見者の備え 33
神権の回復 41
教会の設立と組織の回復 46
神殿の建設と神権の鍵の回復 48
教義と聖約の編集 50
高価な真珠 51
教義と原則 59

5 章：約束の地 63

アメリカ大陸という特別な場所 63
ニーファイたちが来るべくしてたどり着いた土地 67
ヤレドの兄弟と封印された記録 70

6 章：祝福文とみたまの賜物 80
みたまの賜物 80
祝福師の祝福 83
指針に従うときに見えて来る自分個人の神様のご計画 84
自分が末日の聖徒に選ばれたことを知る 86
7 章：イエス様はご自分でたどり着かれた 87
忘却の幕 87
もし自分で選んでいたとしたら 93
8 章：イエス様が示された道 96
私達でも達することができる可能性 96
キリストの光と聖霊 97
心の穴とみたまの実 100
キリストの贖いの意味 103
9 章：キリストの教義の意味 107
福音の第一原則と儀式 107
聖典には入り切らない知識と知恵 112
イエス様がくださる生ける水 114
イザヤ書とヨハネの黙示録 117
教訓に教訓 120
10 章：聖徒として新たに生まれ変わる 122
教義と聖約 1 章とイザヤ書 1 章に込められた意味 122
あなたが高慢になるのを見た 123
生まれながらの人を捨てて聖徒となる 124
二種類の試練 125
試練と誘惑 127
8 歳でバプテスマを受ける意味 129
自分の選びに責任を持つ 130
11 章：天が共に働く時 133
４４人の悪霊 133
お祈りの隠された力 136
神様の手は短いのか 138
試練は人が祈るようになるための道 139
試練がある＝まだ学ぶことがある 140
主の力に頼るということ 141
成長のグラフ 142
12 章：奥義を知るということ 145
シオンに住む者 145
私達のまだ知らない奇跡 147
奇跡とは 148

約束の聖なる御霊 150

13 章：最後のパズルを埋める者 151

今、最後のバトンが私達の手に 152
イザヤとヨハネの言葉を直接身を持って理解できるという機会 152
他の支族の名前が示すもの 154

14 章：目的を達するときに私達が見るもの 155

義人の住む街 155
地を動かす杭（ステーク）となる 156
シオンの中に復活する 160

15 章：末日の聖徒 162

十人のおとめ 162
大切なワクワク感 163
モルデカイの言葉 165
キリストの弟子 166
キリストは栄光をまとわれて来られる 167

あとがき 168

この資料は個人の聖典研究の助けとして黒木俊宏が個人的に作成したものであり、
末日聖徒イエス・キリスト教会の公式出版物ではありません。また、この中で使用されている教会指導者の言葉の引用などは、教会から公式に転載の許可を受けているわけでもありません。たとえ製本の形でこの資料を入手された場合でも、基本的にはどなたでもご利用いただけるように無料で配信されている資料ですので、個人の学習の参考程度の範囲内でご利用ください。

はじめに

この資料は著者である黒木俊宏が 26 年間に渡るユタ州オレム市とプロボ市でのインスティチュートのボランティア教師の経験を通して、クラスで教えてきたことのすべてを簡潔に「末日の聖徒」 というテーマにまとめて編集したものです。

祈りの実験

この資料を作ろうとしたきっかけは、2022 年の夏に祈りの実験を始めたときでした（この実験を始めるきっかけとなった「祈りの力」について詳しくは 11 章の「お祈りの隠された力」で説明していますのでそちらを参照のこと）。祈りの答えを真剣に求める内容と回数を増やし、真摯に天とのつながりを求めていくときに、さらなる天からの教えを受けることができるのではないかと考え始めていました。そしてそれを実行に移し、その時すでに数週間が経過していました。

聖餐会での思いつき、「末日の聖徒」という題名

そのような日々を過ごしている中、ある安息日に聖餐会で聖餐を取っている時にふと、「新しい聖典の個人研究用の資料」を作る必要があるのではないかと感じ始めました。しかし、すでに日本語インスティチュートの教師の責任は一年前に解任されているし、今の召しはプライマリーの教師で、しかも英語です。「一体何の資料を作ることができるのだろう？」と不思議に思っていると、心の中に一つの言葉が浮かんで来ました。

「末日の聖徒」

これは 26 年間のインスティチュート教師の経験を通して、最後の方で特に強く感じてきた言葉でした。すべての教えてきたレッスンを通して自分が理解したことは、自分が末日の聖徒であるという事実に自分が想像する以上の意味があるということです。私達は生涯をかけてその謎を解いていかなければならないと強く感じていたので、その言葉が心に浮かんだときに、その名前を冠する研究資料を書くことがとてもしっくりとくる感じがしたのです。

すべてのレッスンをつなげること

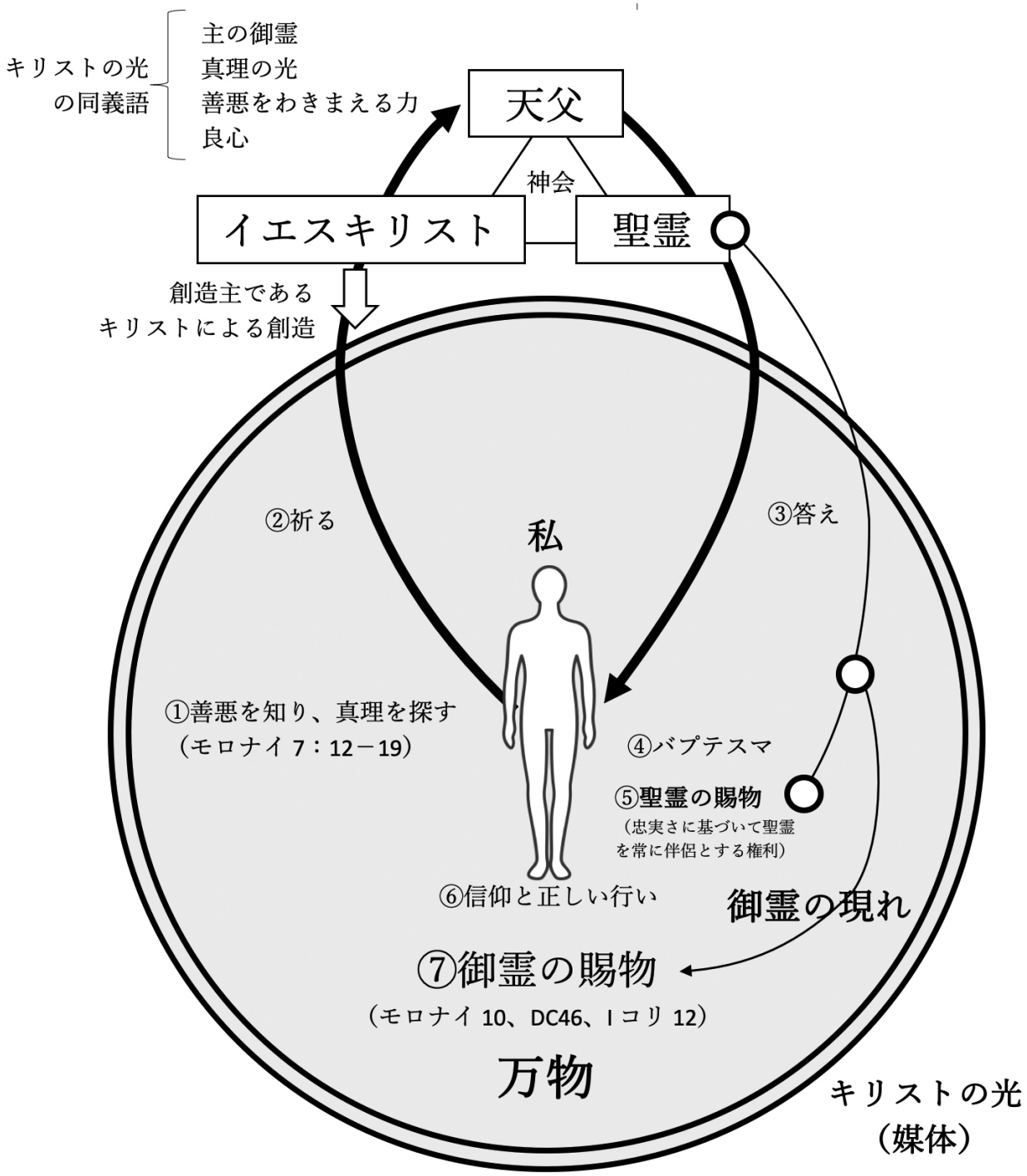
家に戻った後、ではその「末日の聖徒」なる資料に書く内容はどのようなものになるだろうと思いを馳せている時に、インスティチュートの録音音声を聞かれた方々からいくつかのコメントで「聞くだけでなく、読めるものが欲しい」と求められていたのを思い

出しました。私もいくつかのレッスン音声を文字に変えて掲載していましたが、それは単にレッスンの音声を文字化しただけであって、全体をまとめているわけではありませんでした。もし、「末日の聖徒」という題材の元に今までのすべてのレッスンをつなげることが可能であれば、それを読む人には福音がひとつながりであることがわかりやすく理解できるのではないかと思い始めました。

すべての教義、原則、教え、啓示、予言はこの神権時代のある目的のために一つにつながっていく。そんなことを理解できるような資料があれば、かつてクラスの生徒であった兄弟姉妹のこれからの聖典の個人学習と人生そのものの助けになるのではないかと思い、この資料を作成することにしました。

この資料を読んで、研究される方がご自分の聖典学習においてイエス・キリストの御名による聖霊の助けを受けて、天のお父様からのさらなる光の知識を得られることを心から願います。

天からの教えとその働きの仕組み



1章：末日聖徒という不思議な名前

私達の教会の名前は末日聖徒イエス・キリスト教会というあまり呼びなれない名前で呼ばれています。実はこの名前にこそ私達教会員の目的、そして託された使命が隠されているのです。この名前について考え始める時、私達が学ぶ福音のすべてが一つにつながっていくことを理解できるようになるでしょう。

教会歴史上での正式な命名

モルモン書が翻訳されて教会が設立されてから8年後の4月26日、ミズーリ州ファーウエストで預言者ジョセフ・スミスは特別な啓示を受けました。教義と聖約115章に記録されているその啓示には主ご自身がこの教会を「**末日聖徒イエス・キリスト教会**」と呼ぶように命じられたことが書いてあります[1]。それまで教会は「キリスト教会」「イエス・キリスト教会」あるいは「神の教会」などいろいろな名前で呼ばれていました。第3ニーファイ書で主イエス・キリストはニーファイ人を訪れて、主ご自身が設立された教会はキリストの教会という名前で呼ばれるべきであると教えられました[2]。そのため、教会は長い間それに近い名前で呼ばれ続けていたのだと思います。1834年の5月には長老たちの大会で教会の名前を「末日聖徒教会」と呼ぼうという話が持ち上がりました[3]。しかし、その4年後にこの啓示が与えられた時からそれ以降、この教会は「**末日聖徒イエス・キリスト教会**」という名前で呼ばれるようになりました。

末日の聖徒のイエス・キリストの教会

歴史が示すように、当時の教会員たちはモルモン書で言われているように、この主の教会を主のお名前で呼びたかったし、同時に自分たちの使命を理解していて、末日聖徒という名前でも呼びたかったということがわかります。しかし主はそのどちらともをその名前から理解できるように特別な名前を与えられました。日本語では「末日聖徒イエス・キリスト教会」と言いますが、英語の正式名称は

The Church **of** Jesus Christ **of** Latter-day Saints

直訳すれば「末日（の）聖徒のイエス・キリストの教会」となります。

---

[1] 教義と聖約115：4
[2] 第3ニーファイ27章参照
[3] 教会歴史2：62-63参照

言い換えれば、このイエス・キリストの教会は末日に来る聖徒たちのための特別な教会という意味です。いったい、何が特別なのでしょうか？そして「**末日の聖徒**」という言葉にはどんな意味があるのでしょうか？私達教会員にはその理由を知る必要があります。

聖徒とは

一般的なキリスト教では「聖徒」という言葉が「ある一定の徳に達することができた信者」あるいは「殉教者」というような意味で使われています。聖書の中でも英語の「Saints（聖徒）」という言葉は「信者」「聖者」「聖なる者」という日本語に訳されたりもしています。しかし、私達の教会の名前の一部として使われている「聖徒」という言葉には特別な意味があります。パウロの書簡には「聖徒」という言葉がたくさん出てきます。これは当時のクリスチャンと呼ばれた最初のキリストの信者たちのことを指しています。つまり当時の**純粋なキリストのしもべたち**は自分たちが主に仕える者として世の人々と区別するために、自分たちを「**聖徒**」と呼んでいたのでしょう。おそらくそのことを踏まえて、預言者たちはこの時よりも更に後の時代にも出てくるであろう純粋なキリストのしもべたちのことを「聖徒」と呼んで予言を残しました。この「聖徒」という言葉が顕著に現れてくる予言の箇所が旧約聖書ではダニエル書７章、新約聖書ではヨハネの黙示録です。

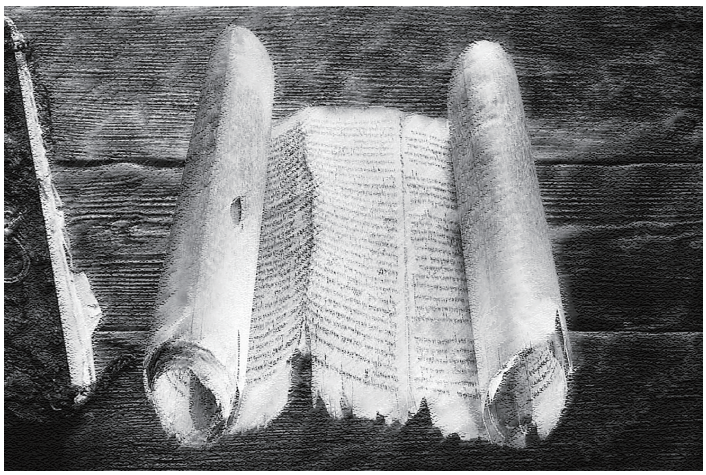


図1　古代の預言書

ダニエルもヨハネも同じ内容、すなわち末日に起こることを書いています。彼らはこの世の終わり、つまりこの末日を示現を通して見ました。そしてその中に神のために働く純粋なキリストのしもべたちがいるのを見たのです。

「わたしは、そこに立っている者のひとりに近寄って、このすべての事の真意を尋ねた。するとその者は、わたしにこの事の解き明かしを告げ知らせた。『この四つの大きな獣は、地に起らんとする四人の王である。しかしついには、いと高き者の**聖徒**が国を受け、永遠にその国を保って、世々かぎりなく続く』。・・・わたしが見ていると、この角は**聖徒**と戦って、彼らに勝ったが、 ついに日の老いたる者がきて、いと高

き者の聖徒のために審判をおこなった。そしてその時がきて、この**聖徒たち**は国を受けた。」（ダニエル７：16-18，21-22）

「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける**聖徒**の忍耐がある」（黙示録 14：12）

ヨハネの見た７つの封印

聖徒とは「**純粋なキリストのしもべ、すなわちイエス・キリストの贖いと復活の後に信者となったグループであり、正しい、キリストからの直接の教えを持っている人たち**」のことです。ダニエルやヨハネの予言とパウロの書簡をあわせて読むと、総合的に人類の歴史の中には「聖徒」と呼ばれるグループが２回登場するのがわかります。一つはキリストの昇天直後のイエス・キリストの十二使徒によって導かれていた信者たちです。しかしやがて十二使徒のほとんどが殉教し、正しい教えがこの世から失われていくことによって、大背教時代が訪れ、最初の聖徒たちの存在は消えていってしまいます。

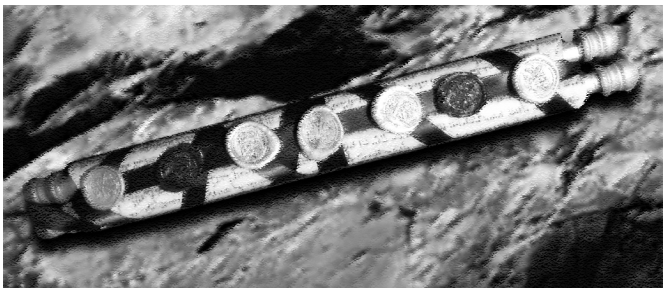


図2　7 つの封印の巻物

ではもう一つのグループの聖徒たちとはいったい、誰のことなのでしょうか？その答えの鍵はヨハネが黙示録の中で教えてくれました。ヨハネが見た驚くべき示現の中で彼が最初に目にしたものは天のお父様の右手にあった７つの封印で封じられていた巻物です。ジョセフ・スミスは啓示を通して、この７つの封印が人間の７千年間の歴史であることを理解しました。

「問い。それを封じている七つの封印によって，わたしたちは何を理解すべきか。
　答え。わたしたちは次のように理解すべきである。すなわち，最初の封印には最初の千年のことが載っており，また第二の封印には第二の千年のこと，というようにして第七に至る。」（教義と聖約 77：7）

黙示録の中で主の王国、すなわちシオンを確立するために働く聖徒たちが登場してくるのは第 6 の封印の終わりから第 7 の封印の初めにかけてです。聖書の記述から私達はアダムが作られたのが紀元前約 4000 年であることを知っていますので、7000 年の歴史はだいたい紀元前 4000 年～紀元 3000 年であることがわかります。そしてその第 7 の封印の初めにあたるのがちょうど今、私達がいる時代（西暦 2000 年あたり）ということになり、ヨハネはそこに「聖徒」がいるのを見たと言っているのです。

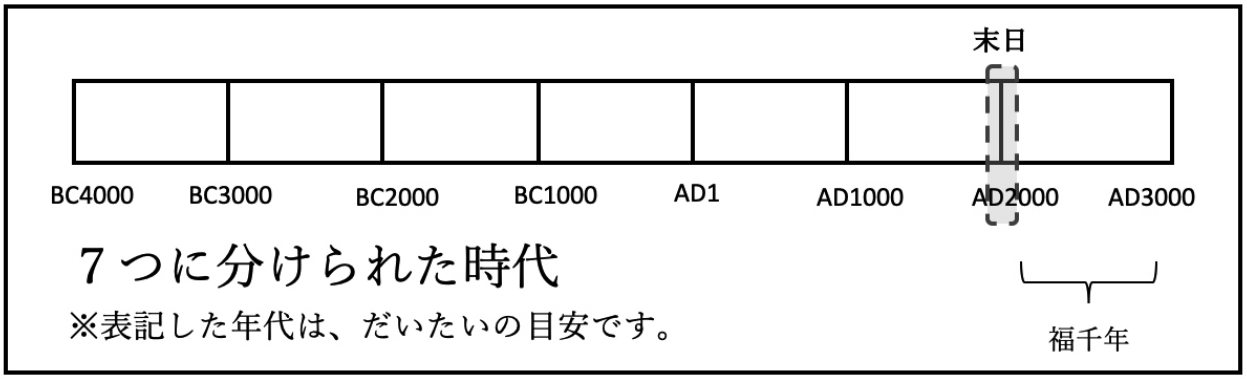


図3　7つに分けられた時代

ヨハネ自身が聖徒と呼んだ者たちの中に立った

ヨハネの記述はそれだけでは終わりません。その表記の中でこんな不思議なことを見たと書いています。

「この後、わたしは四人の御使が地の四すみに立っているのを見た。彼らは地の四方の風をひき止めて、地にも海にもすべての木にも、吹きつけないようにしていた。 また、もうひとりの御使が、生ける神の印を持って、日の出る方から上って来るのを見た。彼は地と海とをそこなう権威を授かっている四人の御使にむかって、大声で叫んで言った、『わたしたちの神の僕らの額に、わたしたちが印をおしてしまうまでは、地と海と木とをそこなってはならない』。わたしは印をおされた者の数を聞いたが、イスラエルの子らのすべての部族のうち、印をおされた者は十四万四千人であった。」（黙示録 7：1-4）

あたかも世界の終わりが来ないように必死に世界を支えている 4 人の御使いに向かって、東の地からやってきたある特別な別の御使いが「まだ終わらせてはいけない」と叫ぶシーンです。この特別な御使いは神の印、すなわち神から与えられた権威権能を持ってイスラエルの部族をこれから集めるのだと宣言します。実はこの特別なシーンこそが、ヨハネが示現の中で最後の時に働く自分自身の姿を見ているところです。ジョセフ・スミスは教義と聖約の 77 章の啓示を通して、この御使いがヨハネ自身であることと、与えられた権威（生ける神の印）がイスラエルの部族を治めるための権能であることを教えられました。

「問い。黙示録第七章二節の，東から上って来る天使によって，わたしたちは何を理解すべきか。

答え。わたしたちは次のように理解すべきである。すなわち，東から上って来る天使は，イスラエルの十二の部族を治めるために生ける神の印を与えられている者である。それゆえ，彼は永遠の福音を持っている四人の天使に叫んで，『わたしたちの神の僕たちの額に，わたしたちが印を押してしまうまでは，地も，海も，木も損なってはならない』と言う。また，もしあなたがたがそれを受け入れることを望めば，この人こそ，**イスラエルの部族を集め，万事を元どおりにするために来ることになっているエライアス**である」（教義と聖約 77：9）

「問い。黙示録第十章に述べられている，**ヨハネ**が食べた小さな巻物によって，わたしたちは何を理解すべきか。

答え。わたしたちは次のように理解すべきである。すなわち，それは彼が**イスラエルのもろもろの部族を集める**という使命であり，定めであった。見よ，この人こそ，書き記されているように，必ず来て**万事を元どおりにするエライアス**である。」（教義と聖約 77：14）

もちろん教義と聖約 77 章の 9 節と 14 節のエライアスは別人であることも考えられますが、エライアスという言葉は複数の人間を指しますからヨハネもまたその一人であるということは当然考えることができます。

黙示録を詳しく読んでいくと、イスラエルの部族を集めるエライアスと、主をお迎えするためにシオンの建設のために働く聖徒たちが、福千年が始まる直前に共に働くことがわかります。つまり、ヨハネがもしそのエライアスであれば、福千年が始まる直前の末日に、その時に存在している神の聖徒たちと共に働いているということになります。そしてどのようにして天と共に働くのかを黙示録を通してその聖徒たちに教えているのです[4]。

ところで私達は教義と聖約 7 章によってヨハネが死を味わうことがなく、今この瞬間も生きて神の業のために働いていることを知っています。ということは、もし今がヨハネの言う末日であれば、彼は私達と共に働いているはずです。そのことを確信付ける一つの出来事が教会の歴史にはメルキゼデク神権の回復として記録されています。1829 年 5 月 15 日にバプテスマのヨハネからアロン神権を受けたジョセフ・スミスとオリバー・カウドリは、その何日か後にペテロ、ヤコブ、ヨハネの 3 人からメルキゼデク神権を授かりました。ペテロとヤコブは復活体として現れましたが、ヨハネは変貌して今も生き続けている体を持って、2000 年近くも前に与えられた使命を果たすためにやってきたということになります。つまり、黙示者であるヨハネがこの教会の設立を助けたというこの事実から、彼が黙示録の示現で見た彼自身が共に働く末日の「聖徒」たちがい

[4] 別資料「ヨハネの黙示録の読み方の解説」参照

る組織があるとすれば、それはこの**末日聖徒イエス・キリスト教会**以外には考えられないということになります。

イスラエルの集合と 14 万 4 千人

そのヨハネは黙示録の中で不思議な話を残しています。先程の黙示録 7 章 4 節で彼は神の印を押される者たちの数が 14 万 4 千人であることを聞いています。そしてその直後に数え切れないほどの白い衣を着た人たちが出てくるのを見ました。天使はヨハネにその人達があらゆる艱難をくぐってきた人たちで、キリストが彼らの牧者となって勝利をもたらすことを教えてくれました。そして黙示録の 14 章で、今度はヨハネが先程の 14 万 4 千人の人たちを実際に見るシーンがやってきます。そしてそこにイエス・キリストも共におられるのを見ます。ジョセフ・スミスは教義と聖約 77 章で受けた啓示の中でこの人達が何者であるかを知らされています。

「問い。イスラエルの全部族から十四万四千人，すなわち各部族から一万二千人ずつ印を押すことによって，わたしたちは何を理解すべきか。
　答え。わたしたちは次のように理解すべきである。すなわち，印を押される者たちは，永遠の福音をつかさどるために神の聖なる位に聖任される**大祭司**である。彼らは，長子の教会に来たいと望むすべての者を導くために，地のもろもろの国民を治める力を与えられている天使たちによって，あらゆる国民，部族，国語の民，民族の中から聖任される者である。」（教義と聖約 77：11）

現在の私達のワードにも大祭司は存在していますが、その殆どはエフライム、マナセ、あるいはヨセフの血統であるはずです。これは旧約時代の最後の族長がエフライムであったために、回復の業も神権の族長であるエフライムの血統から始められる必要があったからです。そのために多くの教会員はバプテスマを受ける時にエフライムの血統に養子縁組され、もし先祖がイスラエルの血族である場合にはその中からこれらの血統が宣言されました[5]。

現在世界中の教会の会員数は 1600 万人を超えました。ですからおそらく出そうと思えばエフライム、マナセからそれぞれ、あるいはヨセフの家として 1 万 2 千人の大祭司を選出することは可能でしょう。しかし、他の部族はといえばとてもその数の大祭司を出せるまでには至っていないと思われます。これを集める仕事こそ、ヨハネという人物に与えられた「**イスラエルの集合**」という使命であって、その最終的な総仕上げのために彼と共に働くのが「末日の聖徒」と呼ばれる私達なのです。

[5] 別資料「ヨハネの黙示録の読み方の解説」参照

2 章：神様の偉大な計画

私達は初めて宣教師と出会う時、あるいは子供の頃に教会の初等協会プライマリーにおいて「救いの計画」を学びます。この救いの計画はとても単純で論理的なので、初めてキリストの名前を聞く人でも次第に理解していくことができます。しかし、だからこそ教会に何年もいながらそれ以上のことを知ろうという努力をしないと、その計画がどこか遠くで行われていて、自分はその流れに漂っている木の葉の一つにしか過ぎないような錯覚に陥ってしまいます。救いの計画は、いや、救いの計画こそ私達が不思議な方法で導かれ、今現在私達が末日の聖徒の一人となっているその根本的理由なのです。

図4　「救いの計画」を教える宣教師

救いの計画

教会員に「救いの計画を知っているか」と問えば、おそらく 100%の人が「知っている」と答えるでしょう。でもそれは半分正解で、半分間違いです。例えば、「数学を知っているか」と聞けば大抵の人は学校で数学を学んだことがあるでしょうから「まあ、知ってるけど」と答えると思います。しかしそれは数学のすべてを知っているという意味ではありません。高等数学は大変奥深いもので、どこまでも学ぶことができるものだからです。これと同じように、救いの計画は全人類の全宇宙の計画です。ですからその詳細に至るまで、人間がこの不完全な肉体において全てを知ることは困難です。しかし、その人がいるレベルにおいて救いの計画に関する**天のお父様の御心**を知ることは可能です。

数学に一年生のレベルや二年生のレベルがあるように、救いの計画にもその人の理解の段階においてレベルが存在します。アメリカの大学では、一年生のレベルを 100 番代と言って 101（ワン・オー・ワン）というクラスから始めて、102，103 と進み、二年生になれば 201（ツー・オー・ワン）のクラスからというふうに進みます。数学に Math 101、Math 201 というクラスがあるように、わたしたちが宣教師から教えてもらえる救いの計画は「救いの計画 101」にしかすぎません。その先には救いの計画 201、救いの計画 301、救いの計画 401 というようにどこまでも私達が学び続けることができるクラス（教え）が存在しているのです。

全人類に公平に与えられる機会

救いの計画のもっとも素晴らしい部分の一つは「**すべての人に公平に救いの機会が与えられる**」ということです。この**公平**という言葉がそのまま私達の神様の性質を表し、同時に自分にも救いの可能性が与えられるという希望をもたらしてくれます。救いの計画のさらにその奥を学び続ける時、その理解はどんどん強くなっていくことでしょう。

「すべての人に公平に」という言葉は同時に私達に「諦めずに進みなさい」という励ましを与えてくれます。ですからその「公平に」という言葉を裏付ける確証を得る時、私達はさらに強く、そして恐れずに進んでいけるようになります。まずはその確証を得るための基本的な救いの計画が、どのようにすべての人に公平に働くのかというロジックについて説明していきましょう。

そのためのシオンの建設

いかに救いの計画がすべての人に公平にと説明したところで、多くの人はある疑問を抱くのではないかと思われます。「でも救いの計画を知らないまま亡くなった人の数のほうが多いのではないだろうか」と。その通りだと思います。実際、この計画を知らずにこの世を去った人々の方が断然大多数です。私達は教会の教えから神殿で死者のための儀式を行います。これは救いの計画を知らずに亡くなった人たちが、霊界において救いの計画を学んで亡くなった人たちから宣教師のように教えを学ぶことができることを知っているからです。

この霊界における伝道システムは救いの計画の一環としてイエス様が亡くなって復活するまでの期間に設定されました。

「見よ，主は義人の中から軍勢を組織し，力と権能をまとった使者たちを任じて，暗闇の中にいる者たち，すなわちすべての人の霊のもとへ行って福音の光を伝えるように彼らに命じられた。このようにして，福音が死者に宣べ伝えられたのである。」（教義と聖約 138：30）

そして霊界において救いの計画を知り、神の御元に戻りたいと思う人にはバプテスマを受けるチャンスが与えられます。しかし、肉体のない彼らにはこの地上でバプテスやその他の儀式を受けることができません。そのため私達が神聖な神殿において彼らの代わりに儀式を受けるのです。

このことは現世に生きる私達にも祝福をもたらしました。人は復活後どのようにして天使の前を通って神の御元へたどり着くのか、それを私達は聖なる神の神殿においてエンダウメントという形で学ぶことができます。これは一生に一度の機会です。しかし、一度だけですべてを理解することはとてもむずかしいのですが、前述のように死者の代理として何度でも何人分でも儀式を繰り返し受けることができるので、その内容を覚え、更にそこから多くのことを学び続けることが可能になります。

そのために私達は系図を探求し続け、一人でも多くの人にこの救いの機会をもたらそうと努力します。しかし、ご存知の通り、神殿で死者の救いの儀式が行われるには、しっかりとした死者の情報が必要になります。ところが、今までこの地上で生を受けた人たちの中で現在その記録が残っている人は恐ろしいほどわずかな数にしかなりません。あまりにも多すぎる数の人達の記録が、すでに地上からは失われているのです。このことが現時点では「公平」と呼ぶには非常に現実とはかけ離れた事実となっています。その問題を解決するために私達末日の聖徒に与えられている最も重要な使命が「**シオンの建設**」です。

主の山へ

預言者ジョセフ・スミスはこう宣言しています。「わたしたちはシオンを築き上げることを**最大の目標としなければなりません**[6]」。つまり私達「末日の聖徒」に託された最大の使命は「シオンを築き上げること」にほかなりません。前述のヨハネに託された「イスラエルの集合」はその過程の一つになります。預言者イザヤと預言者ミカはその過程の様子を一つの詩に書き記しました。

「終りの日に次のことが起る。主の家の山は、もろもろの山のかしらとして堅く立ち、もろもろの峰よりも高くそびえ、すべて国はこれに流れてき、 多くの民は来て言う、『さあ、**われわれは主の山に登り、ヤコブの神の家へ行こう**。彼はその道をわれわれに教えられる、われわれはその道に歩もう』と。律法はシオンから出、主の言葉はエルサレムから出るからである。」（イザヤ 2：2-3）

この予言は福音の回復からシオンができるまでの様子を一気に表したものとも考えられます。終わりの日に回復された主の教会である山は、他のキリスト教やいかなる宗教よりも高くそびえ立ち、やがてそこに登る人々は神の宮である神殿において永遠の生命に関わる教えを学びます。そしてシオンと新エルサレムができる福千年の時代へと突入していきます。

---

[6] 『歴代大管長の教え―ジョセフ・スミス』186

しかし不思議なのは私達は救いの計画を学ぶ過程において、霊界から復活した後は「最後の裁き」があると教えられていることです。にもかかわらず実際には地球上のイベントとしてはその復活と裁きの間になぜか福千年という途方も無い千年という長い時間がわざわざ最後の裁き前に準備されているのです。この時間は一体何のためにあるのでしょうか。

そこで先程の「公平」という話に戻ります。シオンとは場所をあらわし、人間がキリストと共に住むことができる特別な場所を指します。そしてその時間を表す言葉が「福千年」です。かつてジョセフ・スミスは私達に与えられた「イスラエルの集合」の目的について明確に教えてくれました。

「神の民が……集められたのはどのような目的のためだったのでしょうか。……第一の目的は，主のために宮を建て，それによって，**主がその民に主の宮の儀式と主の王国の栄光を明らかにし，救いの道を教えることがおできになるようにすること**でした。[7]」

つまり、今現在生きている人に限らず、過去や未来に至るすべての人についてこの約束が果たされてこそ、神様の御心がかなうということになります。完全な公平を生み出すために準備された「最後の裁き」の前の特別な 1000 年の準備期間こそが、その目的を果たすべく用意された「福千年」なのです。

福千年

主イエス・キリストがすべての悪を討ち滅ぼし、勝利を宣言されたときにシオンが設立されて、サタンが縛られ、福千年が始まります。イエス様が私達と共に住まわれて特別な時代に入りますが、私達の生活はそのまま続きます。もちろん色々なことが変わります。教義と聖約 101 章にはその一部の例が書かれています。その中で私達は神殿を建て続け、今まで儀式を受けることなく亡くなった方々のための膨大な数の儀式を夜と昼の区別のなくなった福千年の間に行っていきます。

このときに今までの時代とは顕著に異なることが起きます。それは福千年と同時に始まる「**第一の復活**」です。正式な第一の復活はイエス様の復活の直後から始まります。

「また墓が開け、**眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った**。 そして**イエスの復活ののち**、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現れた。 」（マタイ 27：52-53）

---

[7] 『歴代大管長の教え―ジョセフ・スミス』416－417

「するとイエスは彼らに，『**多くの聖徒がよみがえって多くの者に現れ**，彼らに仕えたことを書き記していないのはどうしてか』と言われた。そこでニーファイは，このことがまだ書き記されていないのを思い出した。そして，イエスがそれを書き記すように命じられたので，イエスが命じられたとおりにそのことが書き記された。」（3ニーファイ 23：11-13）

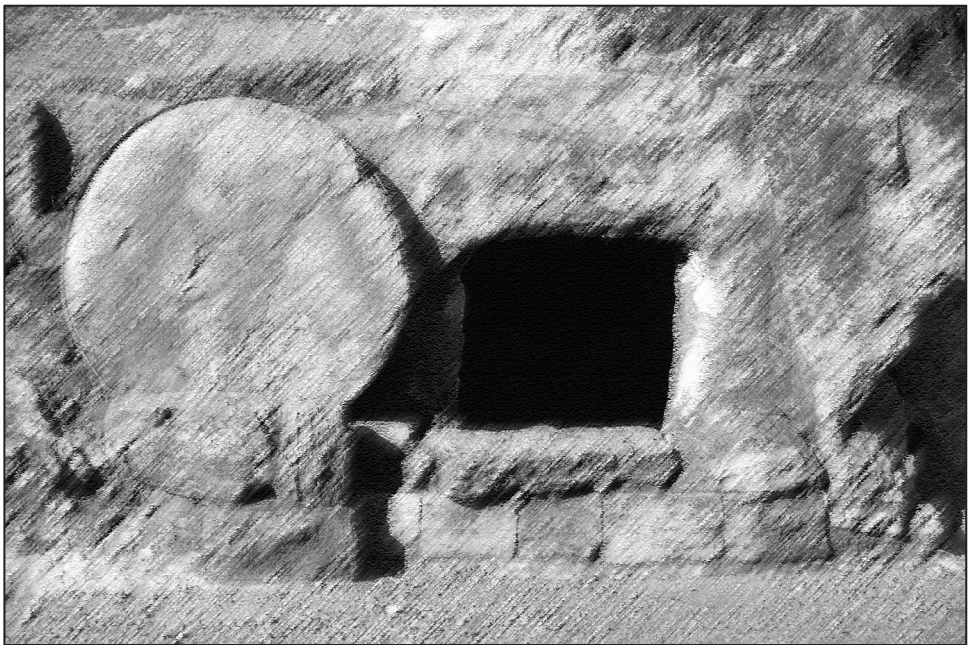


図5　古代の墓

このように一部の人はイエス・キリストの復活後、第一の復活の最初の稲穂としてよみがえりましたが、多くの人にとっての第一の復活の朝は福千年と同時に始まります。前述で私達は過去の人達の記録を持っていないと話しましたが、これら復活してくる義人たちは自分たちが生きていた頃の家族や周りの人々の情報を持ったままよみがえってくるでしょう。私達は彼らの情報をもとに神殿の儀式を進め、そしてそのことによってさらに復活してくる人々からも情報を集め、アダムに至るまでのすべての人々の儀式を最後の裁きが来る前までに終了させ、すべての人に彼らが自ら望むのであれば、文字通り「公平」に神の御心である神殿においての学びの儀式を受けられることができるようになります。

アブラハムの聖約

多くの教会員が「イスラエルの集合」という言葉を聞くときに、「世界のどこかにいるイスラエルの子孫たちが集まってくるのだ」と考えることでしょう。しかしそれはあくまでも私達が行動を起こすためのテーマ、名称であって、実際には「義人の集合」、別

の言い方をすれば「全世界の集合」になります。なぜ「イスラエルの集合」が「全世界の集合」となるのか。その答えはアブラハムが神と交わした約束、「**アブラハムの聖約**」の中に残されています。アブラハムは真の神様の存在を理解した時、心からその神に一生を捧げて仕えることを決心しました。それはちょうど世界中が誤った教義の中にあって真理を唯一人求めたジョセフ・スミスのような状況でした。

神はアブラハムがもし一生をかけて自分に仕えると約束するのであれば、アブラハムととその子孫に永遠の生命につながる道を授け、彼らが最後まで忠実であれば永遠の命を授けることを約束されました。しかし約束はそれだけにとどまらず、さらにこのように言われたのです。

「わたしはあなたを大いなる国民とし，あなたを計り知れないほど祝福し，あなたの名をすべての国民の間で大いなるものとしよう。あなたはあなたの後の子孫にとって祝福となり，彼らはすべての国民にこの務めと神権を携えて行くであろう。わたしはあなたの名によって彼らを祝福しよう。**この福音を受け入れるすべての者はあなたの名によって呼ばれ，あなたの子孫と見なされ**，立ち上がってあなたを父としてたたえるであろう。」（アブラハム 2：9-10）

神殿のバプテスマフォントは 12 頭の雄牛の像によって支えられていることは神殿の写真を見たことがあるか、あるいは神殿に入ったことがあれば誰もが気づくことです。この 12 頭の雄牛はイスラエルの 12 氏族を表し、これはアブラハムの聖約によってすべての人、すなわちアブラハムの子孫としてその血が一滴も混ざっていない完全な異邦人であったとしても、福音を受け入れ真の神に立ち帰ろうと決心した者は、バプテスマを受ける時にアブラハムの子孫としてイスラエルの 12 氏族のいずれかに養子縁組されることを表しています。

ですから世界中の誰もがアブラハムの子孫となるチャンスを持っているので、「イスラエルの集合」と言っても「世界中の義人の集合」という意味になるのです。

3 章：大背教

長い 6 千年にも及ぶこれまでの人類の歴史の中で、なぜ回復やイスラエルの集合が末日の聖徒たちに託されたのかというと、それは神の計画を滅ぼし、人間の真の幸福を奪おうとする「敵」の存在が大きく関わっているからです。その存在はサタンや悪魔と呼ばれ、彼に従って私達を惑わそうとする者たちは悪霊と呼ばれます。

書き変えられ失われた聖書

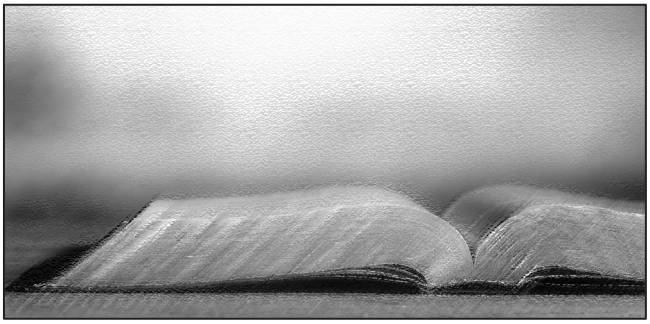


図6 わかりやすくて貴い部分が失われた聖書

私達が現在手にしている救いの計画に関するもっとも古い記録は旧約聖書の「創世記」と呼ばれる記録です。この記録はモーセがミデアンの地で受けた示現を書き記したものです。ところが現在私達が手にする創世記の中に「サタン」や「悪魔」という言葉は一切出てきません。では元々書かれてなかったのでしょうか。それは全く違います。モーセが自分自身で書き残した本来の記録には、神に敵対する者としてサタンや悪魔という言葉がたくさん書かれていて、私達に向けてもそのような存在に注意するようにという警告が書かれていました。なぜそれがわかるのかというと、ジョセフ・スミスが旧約聖書の創世記の翻訳として残したモーセ書にその痕跡が残されているからです。とくに創世記の一番初めの部分、いわば創世記 0 章（本来の創世記 1 章）はまるごと現在の創世記から消えてしまっていることが、モーセ書 1 章を通して理解することができます。そこにはサタンが私達人間に真実が伝わることを妨げようとしてモーセをだまそうと試みたことが書かれています。

「さて，モーセがこれらの言葉を語ったとき，見よ，サタンが来て，彼を誘惑して言った。『人の子モーセよ，わたしを拝みなさい。』そこで，モーセはサタンを見て言った。『おまえはだれだ。見よ，わたしは，神の独り子にかたどられている神の子だ・・・**サタンよ，立ち去れ**。』」（モーセ 1：12-18）

モーセはこの出来事を旧約聖書時代の最初の記録として書き残しました。そして私達には敵が確かにいるという情報と、それに対抗するための方法を書き残してくれたのです。しかし、人類の歴史の中で、それは悪しき心を持つ者たちの手によって書き変えられ、失われていきました。こうして失われた情報はサタンや悪霊の情報だけにとどまらず、神の計画や大切な真理にまでおよびました。ニーファイはこの事実を「ニーファイ

の小版」の上に書き残し、後にそれを読むであろう人たちに向けて、ユダヤ人から出てくる「聖書」と呼ばれる記録の中から貴くてわかりやすい部分が取られてしまうのだということを第一ニーファイ書の 13 章で 9 回にも渡って警告しています。

「したがってあなたには，あの書物があの大きな忌まわしい教会の手を経て出て来てからは，神の小羊の書物から**分わかりやすくて貴い**多くの部分が**取り去られている**ことが分かる。・・・まことにサタンがその人々を大いに支配する力を持つほどになるのが見える。それは，神の小羊にある明瞭さによって人の子らに理解しやすかった，**分かりやすくて貴い**多くの部分が，その書物から**取り去られてしまった**ため，すなわち小羊の福音からこれらのことがとり去られてしまったためである。」（1 ニーファイ 13：28-29）

消えてしまった聖霊の存在

ニーファイが警告している聖書から消えてしまった「分かりやすくて貴い」部分の最も大切なものの一つに「**聖霊**」という言葉があります。実は現在私達が持つ旧約聖書には「聖霊」という言葉は一度も出てきません。あれ程大きな神様に関するの記録の中に「聖霊」という言葉がただの一度も出てこないのです。では旧約時代にはまだ聖霊は存在していなかったのでしょうか。その答えもジョセフ・スミスが翻訳したモーセ書の中に書いてありました。

アダムが理由も知らず神に命じられたとおりに犠牲を捧げていたある日、天使が訪れてアダムにその犠牲を捧げる理由が、罪の許しを与えるために将来犠牲となられる救い主イエス・キリストの雛形であることを説明した時のことです。

「その日，御父と御子のことを証する**聖霊が**アダムに降り・・・」（モーセ 5：9）

アダムは天使の言われた言葉を聖霊の力によって、心で理解することができました。つまり**聖霊は人類の最初からわたしたちと共におられたのです**。

聖霊は救いの計画と天のお父様の御心とを私達に伝えてくださる特別な存在です。サタンはその特別な存在が人間に、特に最後の時にヨハネと共に働く「聖徒」と呼ばれる人達に知られることを恐れました。救いの計画が実行されるとき、自分が滅びてしまうことをサタンは知っているからです。そこで彼とその仲間は人を誘惑し、旧約聖書から「聖霊」という言葉を抜き取ってしまいました。その結果として、聖霊は突如、新約聖書にイエス・キリストと共に登場します。この事がイエス・キリストと聖霊と神様は同じ人物なのではないかという三位一体説の一つの元凶となり、真実が曲げられてしまう原因になりました。

見えないものを信じることができるという確信の喪失

すでに旧約の時代から、救いの計画の本質を教えてくれるはずの聖霊の存在の意義が間違って教えられるようになった時、人々は論理的に、そして心で福音の本質を理解することができなくなりました。もとより通信技術や印刷技術がなかった時代、人々は聖典さえ日々自由に読むことができず、教会の指導者からの教えを頼りに信仰生活を送っていました。しかしその指導者さえ、聖霊の存在説明が失われた世界の中では、福音の理解に迷い、自分の力と知識にだけ頼って聖文を理解したと誤信し始めるようになり、人々に誤った教義を教え始めたのです。やがて人々は見えない神を信じるという望みを持てなくなって、目に見えるもの、たとえば偶像などに信頼を寄せるようになりました。

大背教時代

旧約聖書の予言から多くの真実が失われていった人類の歴史のちょうど中間点あたりで、一つの予言が成就します。それはイエス・キリストが肉体をもってこの世に来られるという予言でした。

イエス様がこの地上に来られた時、人々に約 3 年の間教えを施されましたが、教えられた内容はとても簡単な内容でした。「信仰を持って、悔い改め、バプテスマを受けて、聖霊を受けなさい。そして自分のことを思うように他の人に親切にしなさい。」イエス様はなぜ、もっと深く失われた真理について、この時に教えてくださらなかったのでしょうか？

その理由の一つは当時の人々の理解度の低さにあります。イエス様がこの世に来られた時よりもはるか昔、モーセは自分が示現で見た神の栄光の素晴らしさを自分の民にも知ってもらおうとして努力し、人々に福音の教義と原則を説いて導きましたが 400 年以上もエジプトで奴隷の生活を送っていた人々には「自ら考える」という行動が取れなくなっており、神様の御心を簡単には受け入れられなくなっていました。

「さて，このことを，モーセは荒れ野の中でイスラエルの子らに分かりやすく教え，その民が神の顔を見ることができるように，彼らを聖めようと熱心に努めた。しかし，彼らは心をかたくなにし，神の臨在に堪えることができなかった。そのため，主の怒りは彼らに向かって燃え，主は激しく怒って・・・**彼らの中からモーセを取り去り，また聖なる神権も取り去った**。」（教義と聖約 84：23-25）

主はモーセと共にこの世からメルキゼデク神権を取り去られてしまわれ、その代わり自ら考える練習の材料、あるいは訓練器具として「形で学ぶ」アロン神権を残され、それに関する儀式と掟を「モーセの律法」として定めて、イスラエルの民に学ぶように命じられました。しかし、聖霊に頼ってこれらの律法と学びを理解することを忘れた人たちの間では、やがてこの律法は曲解されイエス様が来られる頃には練習どころか、それよりも高い律法を受けられないモラルの低い状態に陥っていました。

もとより、イエス様がこの地上に来られたときの最大の目的は「教えること」ではなく、人々の罪を背負うこと、すなわち贖いの業を行って私達の「**救い主となられること**」でした。救い主になるためにはこの世において死を経験し、そこから立ち返る復活という業を実行しなければなりません。ですからこの時、この世においてその実行のために不完全な肉体を受けられたイエス様がすべての人に神の計画を教えることはできなかったのです。そのため「教えること」は天のお父様が救いの計画として準備された**聖霊**に託されました。ですから、イエス様は最後の晩餐のあと、弟子たちに向かってこのような言葉を残してそのことを説明されたのです。

「しかし、わたしは**ほんとうのこと**をあなたがたに言うが、**わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ**。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに**助け主**（※慰め主【英語】）はこないであろう。もし行けば、それ（※彼【英語】）をあなたがたにつかわそう。
わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今はそれに堪えられない。けれども**真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれる**であろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう。」（ヨハネ 16：7，12-13）

イエス様はこの世に二度来られます。イエス様はユダヤ人を叱責されたときに聖書に書かれている予言についてこう述べられました。

「あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。」（ヨハネ 5：39）

つまり、聖書の予言はご自分すなわちイエス・キリストについて書かれていると教えられました。この聖書の予言にはこのイエス様がこの地上に生まれたときのことばかりではなく、末日の最後にも私達の主、私達の王としてもう一度やってこられるということが多くの箇所で予言されています。イエス様は地上におられたときに、まだ多くの人々の心がかたくなで、真の福音を受け入れられる状態にないことをお嘆きになりました。

そして当時の人に向かって教えるときには、聖霊の教えを受け入れる準備ができている人にだけ理解できるような教え方をされました。

「それから、弟子たちがイエスに近寄ってきて言った、『なぜ、彼らに譬でお話しになるのですか』。そこでイエスは答えて言われた、『あなたがたには、**天国の奥義を知ること**が許されているが、彼らには許されていない。・・・しかし、あなたがたの目は見ており、耳は聞いているから、さいわいである。』」（マタイ 13：10-11，16）

しかし、主は受け入れられる人は少なく、せっかく新しく明らかにされた真理もご自分の使徒たちの殺害と共に、再び闇の中に葬られていくことをご存知でした。そのため、その後に教会の大管長に召されるペテロに向かって予め次のように示唆されました。

「『よくよくあなたに言っておく。あなたが若かった時には、自分で帯をしめて、思いのままに歩きまわっていた。しかし年をとってからは、自分の手をのばすことになろう。そして、**ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所へ連れて行くであろう**』。これは、ペテロが**どんな死に方で、神の栄光をあらわすか**を示すために、お話しになったのである。こう話してから、『わたしに従ってきなさい』と言われた。」（ヨハネ 21：18-19）

イエス様の昇天後、悪しき人々は神の教会の使徒を殺害し、せっかくこの世に再度もたらせられたメルキゼデク神権を真の教えと一緒に自らの手で滅ぼしていったのです。神権と、真の教えが奪われた長い長いこの暗黒の時代を私達は「大背教」と呼びます。

イエス様はこの大背教が起こることを最初からご存知で、そのために一人だけ死ぬことのなかった使徒のひとりであるヨハネと、メルキゼデク神権を携えて別の土地に移されたニーファイとその子孫に、この世においての真の福音の保存を託されました。ヨハネとニーファイは神の力によって同じ示現を見て、ヨハネはその詳細が抜き取られないように難しい言葉で「黙示録」という書物を世界中の人が知るように書き残し、ニーファイはヨハネという人物が書いたものに自分が見たものことが書いてあるというヒントを残しました[8]。その記録はアメリカ大陸の現在のニューヨーク州、オンタリオ郡、マンチェスターにある小高い丘に、モロナイという人物によって「金版」と呼ばれるものと共に土の中に埋められました。

主イエス・キリストは予言の通りにもう一度来られます。しかし前回のように不完全な弱い人間の肉体ではなく、復活を遂げた完全な肉体において神の栄光をまとわれて、すべての悪を焼き尽くしてこの地上に神の国「シオン」をもたらし、「福千年」を宣言するために来られます。その時、その下準備をして主の再降臨の準備を整える者たちこそ

[8] 1 ニーファイ 14：27 参照

が、末日の聖徒と呼ばれる者達になります。しかし前述の通り、聖徒とは「純粋なキリストのしもべ、すなわちイエス・キリストの贖いと復活の後に信者となったグループで、**正しい、キリストからの直接の教えを持っている人たち**」ですから、この土の中に埋められた真実の福音は時を越えて、この聖徒たちに渡される必要がありました。

4 章：回復

預言者イザヤは人類の長い歴史を示現の中で見て、末日に不思議なことが起こることをその予言の中にいくつも書き残しました。

「主は　旗　をあげて遠くから一つの国民を招き、地の果から彼らを呼ばれる。見よ、彼らは走って、すみやかに来る。」（イザヤ 5：26）

「その日、エッサイの根が立って、もろもろの民の　旗　となり、もろもろの国びとはこれに尋ね求め、その置かれる所に栄光がある。・・・主は国々のために　旗　をあげて、イスラエルの追いやられた者を集め、ユダの散らされた者を地の四方から集められる。」（イザヤ 11：10，12）

「あなたがたは木のない山に　旗　を立て、声をあげて彼らを招き、手を振って彼らを貴族の門に、はいらせよ。わたしはわが怒りのさばきを行うために聖別した者どもに命じ、わが勇士、わが勝ち誇る者どもを招いた。聞け、多くの民のような騒ぎ声が山々に聞える。聞け、もろもろの国々、寄りつどえるもろもろの国民のざわめく声が聞える。これは万軍の主が戦いのために軍勢を集められるのだ。」（イザヤ 13：2-4）

「すべて世におるもの、地に住むものよ、山の上に　旗　の立つときは見よ、ラッパの鳴りひびくときは聞け。・・・その時、川々の分れる国のたけ高く、膚のなめらかな民、遠くの者にも近くの者にも恐れられる民、力強く、戦いに勝つ民から万軍の主にささげる贈り物を携えて、万軍の主のみ名のある所、シオンの山に来る。」（イザヤ 18：3，7）

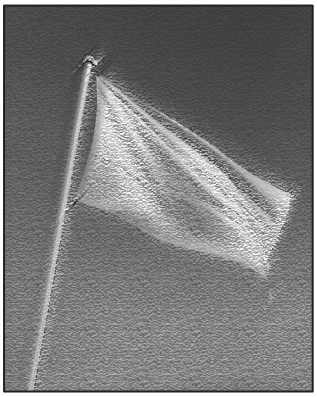


図7　たなびく旗

当時、戦いなどで遠くにいる兵士たちに合図をおくるためには、太鼓や角笛などが使われていましたが、「旗」もその道具の一つでした。様々な色や形の旗がなびく時、兵士たちはその意味を悟って次の行動へと動き出したのです。イザヤはこのたとえを使って末日に起こることを予言として書き残しています。最後の最後、すべての悪が完全に滅ぼされる直前、すなわちイエス・キリストが勝利の栄光をまとって再度来られる直前、その出来事の最初のきっかけとなる特別な「旗」が立てられると書いたのです。イザヤが見たこの旗とは一体何のことで

しょうか。それは末日における回復の旗、「ジョセフ・スミス」のことです[9]。

ジョセフ・スミス

1805 年 12 月 23 日、アメリカのバーモント州ウィンザー郡シャロンという小さな田舎町に一人の男の子が生まれます。何人もいたスミス家の子供の中で父親はその生まれたばかりの男児に自分と同じ「ジョセフ」という名前をつけました。ジョセフの先祖はイギリスから夢を求めてこのアメリカの地に渡り住み、さらに大いなる夢を「開拓」に寄せて、東海岸から次第に大陸の奥へと移り住むように移動していきました。やがて、ジョセフとその家族はあの**モロナイが金版を埋めた丘の近くの場所**へまるで引き寄せられるように移り住みます。

図8　ジョセフが見つけた不思議な石

ジョセフは子供の時から大変真面目で神を畏れる人物でした。そのため家族からの信頼も厚く、文字が読めるようになると、家にあった聖書を一生懸命読むようになりました。ある時、ジョセフはふとしたことから不思議な石を見つけます。不思議な石というのは見かけはただの石ですが、ジョセフがその石を持って考え事をすると何かがわかるという特別な石でした。特に人が無くした物のありかをすぐに見つけることができたそうです。それは不思議な才能として村人に知れ渡り、村人が物を無くす時にジョセフを訪ねてくるので、ジョセフはその石を使って無くした場所を探し当てたという記録がいくつか残っています。しかしそれは当時の人にとって、さほど特筆すべきことでもなかったようです。開拓時代のアメリカには、不思議なことに各町や村にそのような石を持った者が何人かいて、ジョセフと同じように探しものを見つけることをしていたからです。あたかもそれは当時の人たちにとっては「才能」の一つであったようです。

そんなジョセフが 14 歳になった頃、彼らが住んでいたマンチェスターの村で騒動が起こります。しかしこれはこの村だけで起こったことではなく、当時「アメリカ」と呼ばれ始めた開拓の町や村で次々に起こったキリスト教の伝道における「第二次覚醒」と呼ばれるものでした。宗教の自由を求めてアメリカに渡った各キリスト教宗派が、合衆国

[9] イザヤの言う「旗」は回復全体を指すこともあるので、必ずしも旗＝ジョセフ・スミスと限るわけではありません。

憲法によって宗教の自由を獲得し、しばらくは落ち着いていたのですが、西へ西へと開拓が広がっていくに連れて、宗派を持たないキリスト教の信者たちが多く開拓地にいることに気づいたのです。彼らはこれらの人々を「迷える子羊たち」と考え、自分たちの教えを各町や村を回って教えることこそが使命であると考え、この動きが一大センセーションとも呼べるイベントになりました。そして最初に起こったのが「第一次覚醒」であり、ジョセフの村にやってきたのは第二期である「第二次覚醒」だったのです。ジョセフはこう記録しています。

「マンチェスターに移り住んでから二年目のあるとき，わたしたちが住んでいた地域に宗教に関する異常な騒ぎがあった。それはメソジスト教徒から始まったが，間もなく広くその地域内のすべての教派に及んだ。実に，その地方全体がそれに影響されたようであった。そして，大勢の群衆が様々な教派に加わり，それが人々の間にただならぬ騒ぎと分裂を引き起した。『見よ，ここだ』と叫ぶ人がいれば，『見よ，そこだ』と叫ぶ人もいた。ある人はメソジスト派の教えを，ある人は長老派の教えを，またある人はバプテスト派の教えを擁護して論争していた。」（ジョセフ歴史 1：5）

ジョセフもまたそのただならぬ騒ぎに興奮し、自分もキリストの教会に所属したいと考え始めるようになりました。その頃彼は、神様はたったお一人だからその中の一つが正しいのだろうと漠然と考えていたようです。しかし、各教派の改宗者が増えるに連れて、互いに自分の教派だけが正しいと罵り合うようになった時、わずか 14 歳の少年であったジョセフの心は痛みました。「どれか一つが正しいのだろうけれど、どの教会が真実なのかがわからない」。彼の心に次第に「知りたい」という気持ちが膨らみ始めました。

ジョセフはその答えを神ご自身がご存知であるとは思っていましたが、あえて、神様に直接聞くことを恐れました。人はだれでも多かれ少なかれ罪人です。そんな罪人の一人である自分が、罪のない聖い存在であられる神に直接尋ねることなどできるわけがないと自然に考えていたようです。当時は「聖霊」の存在や働きについて、正しい理解のない教義が普通であったため、そのような宗教社会の中でジョセフがそう思ったとしてもそれは自然の成り行きだったのでしょう。

しかし、どうにかして真の教会を見つけ出したいと考えたジョセフは自分の家にある神様の知識の唯一の源である聖書を読み続けていました。そして新約聖書のヤコブの手紙の 1 章 5 節にさしかかったときのことです。

「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」（ヤコブの手紙 1：5）

この聖句を読んだ時に「心に一筋の光がさした。[10]」と感じたそうです。今まで自分には神様に直接尋ねる資格がないと決めつけていた心の障害物が、一気に消えていくのを感じ、「わたしはついに**神に願い求め**ようと決意[11]」しました。

その頃のジョセフの一日の仕事の大部分は、家のすぐそばにある森の中で木を切ることでした。かなり背の高い木々は、その時の早春の光をある程度遮って、静かな環境を整えてくれていました。その頃の木を切る作業はジョセフ一人にまかされていたので、ジョセフは日中、その木を切る場所には誰も来ないことを知っていました。その日、彼は自分の斧を前日に置いておいた場所に行って[12]、ひざまづいて必ず神様が自分の願いを聞いてくださると信じて祈りはじめました。

ところがすぐに今まで経験したこともないような暗黒の力が彼を襲います。それは破壊者であるサタンの攻撃でした。末日に来る聖徒たちの最初の旗印となるジョセフ・スミスの信仰心を滅ぼさなければ、神の最後の計画は実行へと移されます。それを知っていたサタンが[13]物理的な攻撃を仕掛けてきたのです。ところがジョセフは神に呼び求めようとすることを諦めませんでした。

突如として自分の真上に一筋の光が現れ、ゆっくりと自分の方に降りてくるのが見えました。同時に彼はあの闇の力から解放されたことを知りました。光が自分のところまで降りてきた時、その中に空中に立ってこの世の何よりもまばゆく輝く一人のお方を見ました。やがて、もうひとりの方が現れ[14]、一人の方が、もうひとりを指して「これはわたしの愛する子である。彼に聞きなさい。[15]」と言われたのです。

これがジョセフ・スミスの「最初の示現」です。この中でジョセフは真実の教会はもうこの世には存在していないことを知りました。更にたくさんの教えを受け、その光が去った時、ジョセフは力を失ってしばらく倒れていました。この驚くべき出来事は物語以上の内容を含んでいます。この出来ごとは数々の予言と一致しており、この出来事を出発点にして教会の歴史も予言の通りに進んでいきます。何よりも人類の歴史の中で、こ

---

[10] 1840 年オルソン・プラットによるジョセフ・スミスの記録
[11] ジョセフ歴史 1：13
[12] 1843 年デビッド・ワイトの記録
[13] 私達はこのように来る時に忘却の幕を通ってきますが、サタンと悪例達はそのまま落とされたので前世の記憶があるようです。マタイ 8：29 参照
[14] 1835 年ジョセフ・スミスの記録
[15] ジョセフ歴史 1：17

の世界で天のお父様の存在を直接見て語り合ったのはジョセフだけ[16]で、このことが長年世界を支配していた三位一体説を打ち破って真の教義を復活させるきっかけとなりました。

図9　聖なる森

この最初の示現でジョセフはしばらくの間、辛抱強く待つようにと命じられます[17]。そうすればすべての真実が彼に明らかにされるであろうと告げられました。

ジョセフ・スミスがこの示現を受けたタイミングは完璧でした。別の言い方をすれば、世界の歴史がまるでこの示現に合わせて動いていたとも思えるほどです。なぜジョセフはこの日、この場所で、この示現を受けることができたのでしょうか？　アメリカ大陸が発見されていなければ、当然ジョセフはこの日この場所にはいませんでした。合衆国の憲法が成立していなければ、この時点で宗教の自由は保証されていませんでした。逆にアメリカ大陸がまだ発見されて日が浅くなければ、開拓の進みがこの地域辺りまでではなく、スミス家は他の場所に居たかもしれません。あるいはそれよりも前に宗教改革がヨーロッパで起っていなければ、ジョセフは聖書を読むどころか手に入れることもできませんでしたし、第二次宗教覚醒どころか第一次覚醒すら起こってなかったでしょ

[16] 天のお父様を示現を通して見た人はたくさんいます。殉教のときのステパノなどはそのひとつの例で示現を通して天父の御座を見ました。多くの預言者たちも示現を通して天父の御座を見ています。末日聖徒の初期の教会員たちもジョセフとともに同じような示現を見たという記録もあります。しかしこれらの人々はこの地上において直接語り合ったのではなく、あくまでも示現の中の別空間で見えたという形です。この地球上において天父とまみえた人物は他にアダムとエバがいますが、彼らが天父と語り合えたのはあくまでもエデンの園の中であり、禁断の実を食べて追い出された後には見られなくなっています。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長はモーセに語られた人物が天父ではなくイエス・キリストであることを説明されたときにこう付け加えられています「御父は堕落以後、直接人と接せられることはなかったし、御子を紹介し、御子について証するとき以外は**御姿を現されたことはなかった**。」（救いの教義 1 巻 27-28）

[17] 1842 年オルソン・ハイドによるジョセフ・スミスの記録

う。そうなればジョセフがキリスト教に対して疑問を持つこともなかったのです。それらすべてが偶然重なってこの日、この場所にジョセフはいたのでしょうか？決して偶然ではありません。この出来事が神様のご計画であったことは聖典からも理解することができます。

まず人類の歴史の中で、誰にも知られることもなくこの地球上にアメリカ大陸という大陸が準備されます。人類はつい 500 年ほど前までそのことを知りませんでした。6000 年もの歴史があったにも関わらずです。神は最初にノアの子孫であるヤレドの民をこの地に連れてこられ、さらにイスラエル全部族が失われる前に、ニーファイやミュレクの民を連れてこられました。このことについてイエス様はこう言われています。

「わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。」（ヨハネ 10：16）

イエス様はこの言葉の意味を当時のユダヤ人には「天父の特別な命令によって」知らせることができなかったと第三ニーファイ書で教えられています。

「このことを，エルサレムにいるあなたがたの同胞に告げるように，父は一度もわたしに命じられなかった。父が，その地から導びきだされたイスラエルの家のほかの部族について，彼らに告げるようにわたしに命じられたことも，これまでに一度もない。彼らに告げるようにと，父がわたしに命じられたことはただ，『わたしにはまた，この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らもわたしの声に聞き従うであろう。そして，ついに一つの群れ，一人の羊飼いとなるであろう』ということだけである。」（3 ニーファイ 15：14-17）

またニーファイの弟であるヤコブはその民に向かっていろいろな場所へ散らされたイスラエル人たちがいて、自分たちもまたその一部としてアメリカ大陸へ来た者たちであることを預言者ゼノスのオリーブの枝の例えで説明しました。

「わたしはこれらの若枝を，果樹園のいちばん低い場所で，わたしが良いと思う所に置こう。**それがどこか，あなたは知らなくてよい。**」（ヤコブ 5：13）

人類は知りませんでした。神様がアメリカ大陸という特別な場所を密かに準備され、そこに知恵ある人々と神権を備え、サタンの攻撃の結果としておこる大背教によって失われるであろうキリストの真の福音を誰にも知られずにその深い御心によってこの地にとどまらせたのです。そして末日の最後のご計画の始まりとして、この地が存在することを世界中の人に知らせる業が始まりました。

「それで眺めると，異邦人の中に一人の男が見え，その男は大海によってわたしの兄たちの子孫から隔てられていた。すると**神の御霊が降ってこの男に働きかけ**，この男が大海を渡って，約束の地にいるわたしの兄たちの子孫のところへ行くのが見えた。そして，神の御霊がほかの異邦人にも働きかけ，彼らが囚われの身の上から逃れて大海を渡って行くのが見えた。」（1 ニーファイ 13：12-13）

コロンブスや清教徒、その他多くの人が突然導かれてやって来て、今まで隠されていたアメリカという土地が世界中の人に知られるようになりました。

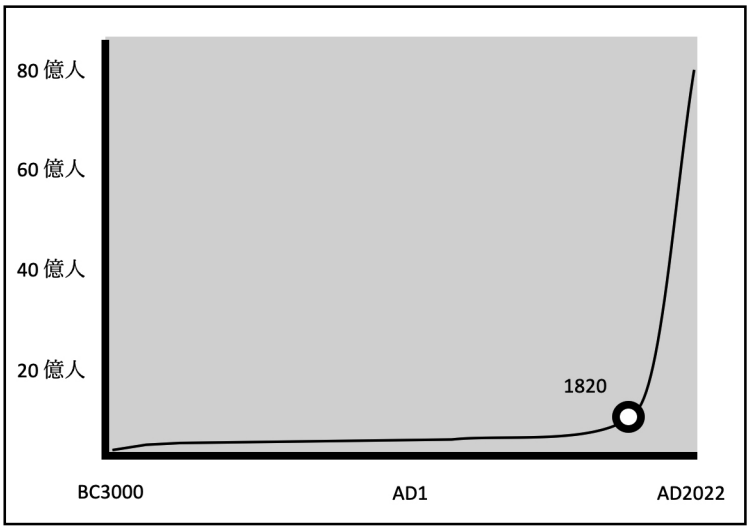


図 10　世界人口の変化

わずか 250 年ほどの間に合衆国が独立し、宗教の自由を保証する憲法が完成しました。この大陸の発見と同時に世界は急激に進歩して、人口は爆発的に増え 1800-1900 年に至ってはそれまで 2－3 億人程度だった世界の人口の増加が科学と医学の発展にともなって一気に加速し、今では 80 億人を超え、さらに 100 億人に達するのではないかと言われています。この神の子供達が一気にこの地上に降りてきて増え始めるきっかけとなったその増加カーブの只中の 1820 年に、ジョセフは神の末日のご計画の最初として示現を受けました。しかもイギリスの先祖からの移住と引っ越しにつぐ引っ越しを重ねて、とうとう彼の家族がモロナイが金版を埋めたあの丘の近くに移り住んだ時に・・・。

イザヤはこの最初の示現でジョセフがどの教会にも入ってはならないと言われたのを先見し、その予言の中でこう綴っています。

「主は言われた、『この民は口をもってわたしに近づき、くちびるをもってわたしを敬うけれども、その心はわたしから遠く離れ、彼らのわたしをかしこみ恐れるのは、そらで覚えた人の戒めによるのである。 それゆえ、見よ、わたしはこの民に、**再び驚くべきわざを行う、それは不思議な驚くべきわざである**。彼らのうちの賢い人の知恵は滅び、さとい人の知識は隠される』。」（イザヤ 29：13-14）

モルモン書と聖見者の備え

最初の示現からしばらくの間、ジョセフは言いつけられたとおりに辛抱強く神様から再び教えを受けられることを待ち続けました。祈っていなかったわけではありません。それどころか天のお父様にまみえることができた今、前よりも深く強い確信を持って祈り続けていたと思います。しかし、あれから天からの訪れを受けることはありませんでした。ジョセフが示現を受けたと言ったことで、宗教指導者たちからは敵対視され、周りの大人達からはからかわれ、嘲られていました。

そんな耐え難い日々を耐え抜き続けて、神様の約束を信じつつ祈り続けていた 1823 年 9 月 21 日の夜、彼は寝室で自分の弱さを神に赦してもらえるように心から祈っていました。そのときに一人の天使が現れます。彼の名前はモロナイでした。

その夜から遡ること約 1400 年前、モロナイはその近くの小高い丘の中腹に立っていました。彼はその場所に穴を掘り、石で壁を作り、セメントで固めました。先祖から伝わる様々な道具をその石の箱に入れ、最後にニーファイが自らの手で書き残した小版と、父モルモンが命をかけて書き残したニーファイ人の記録である金版。そして自分がまとめて封じた版[18]を一つにしたものを取り出しました。モロナイは自分の部族、すなわちニーファイ人の、そしてキリストを信じるキリストの弟子の最後の一人でした。最後の戦争で敗北してから約 35 年間[19]、彼は敵の捜索をくぐり抜け、この記録を守って隠すためにこの日まで生き抜いて来ました。そしてようやくその記録を隠すにふさわしい場所を見つけ、埋める準備をしていたのです。彼は知っていました、この記録は必ず将来もう一度この世に現れて、特別な人々に伝えられることを。彼はこう書き残しています。

「見よ，わたしはあなたがたがここにいるかのように語っているが，あなたがたはまだこの世にいない。しかし見よ，**イエス・キリストがわたしにあなたがたを見せてくださったので**，わたしはあなたがた・・・を知っている。」（モルモン 8：35）

末日に神のための戦う人たちに向けて、彼は警告と祝福の言葉を書き残し、その版を石の箱に置きました。おそらくひざまづいて祈り、天の父にその版が必ずもう一度地から出てくるように願い、祈ったと思います。石で蓋をして、土をかぶせ、彼はその場を去りました。イザヤはモロナイよりもはるか昔にこの世にいた人間ですが、この埋められた版が必ずもう一度世の中に出てくることについてこう予言しました。

---

[18] エテル 4：1－7 参照

[19] モルモン 6：5 およびモロナイ 10：1 参照

「その時あなたは深い地の中から物言い、低いちりの中から言葉を出す。あなたの声は亡霊の声のように地から出、あなたの言葉はちりの中から、さえずるようである。」（イザヤ 29：4）

モロナイは死に、やがて他の人と同じようにその霊は霊界にありました。ところが、まだ福千年が始まっていないにも関わらず、彼は復活しました。そして特別な召しを与えられました。それは言わば、「末日の預言者の養育係」とも言える召しでした。自分のこの地上での死から 1400 年がたったある日、彼に言葉が告げられます。おそらくこのような言葉だったのではないでしょうか、「時が来たので、末日の預言者ジョセフ・スミスの元へ行きなさい」と。

モロナイが言われたとおりにその場所に行くと、そこには自分の弱さのために必死に祈る 17 歳の青年の姿を見ます。純粋さと信仰の強さは見て取れますが、「預言者」と呼ぶにはなんとも弱々しく、若く、頼りなく見えたかもしれません。モロナイは声をかけました。彼はジョセフが末日の預言者としての責任を予任されていることをおそらく知っていたでしょう。しかし不完全な肉体を受けて、全てを忘れているジョセフには一から教える必要がありました。まだこの時、真理は地上に回復されていなかったのです。

モロナイは自分自身では生きている間に読んだはずのない聖書を引用して[20]ジョセフに説明を始めました。この時はまだ金版は翻訳されておらず、ジョセフが唯一知っている神の言葉は聖書の言葉だけだったからです。モロナイはただ単に自分が埋めた記録を探し出して翻訳して欲しいと願っていたのではありません。もともとなぜ親子でその記録を作り始めたのかという理由が、シオン設立という最後の計画の仕上げのために末日に来る聖徒たちに、ユダヤ人から出る聖書を信じさせ[21]、彼らに与えられたこの世での偉大で崇高な使命を思い出させることでした。ですからモロナイはジョセフに神の壮大なご計画の最終場面の業の、最初の始まりとして金版を掘り出すことを説明したのです。

しかし、その内容はジョセフが期待していたものとはおそらくかけ離れたものだったと思います。ジョセフはずっと神様が「真理」を教えてくれるのだろうと、ただそれだけを期待していたのではないでしょうか。ところが突然自分が知らない、聖書にも出てこないモロナイという人物があらわれ、自分に真理を教えてくれるどころか、自分がその真理の回復の担い手にならなければならないという重大な責任の話をしてきたのです。おそらく若いジョセフにはどこから理解していけばよいかわからないほどの情報量だったと思います。

---

[20] モロナイが読むことができたであろう真鍮板にはイザヤの言葉は確実に記録されていました。ニーファイがエルサレムを出た時代から考えるとヨエルの言葉も書いてあったかもしれません。しかし、その後に登場したと考えられるマラキの言葉は記録されていなかったと思われます。教義と聖約 2 章参照

[21] モルモン 7：9 参照

それでもモロナイは若いジョセフのために情報量を絞って話をしていました。すべてを忘れ不完全な肉体を受けている状態のジョセフには一度にすべてを理解することができないことを彼は知っていました。モロナイは一旦休憩を挟んでその夜に 3 度、そして次の日にもう一度来て説明を繰り返し、更にその都度情報量を少しずつ増やしてジョセフに教え続けました。

それでもジョセフが理解できたのはとりあえず、示された場所に行ってその金版なるものを手に入れることだと理解したようです。しかし、やはりすべてを理解することはできておらず、金版を目の前にしてサタンの誘惑にかられ、金銭的価値の方へと心が惹かれてしまいました。モロナイはそのことを見抜き、ジョセフにその場で版を渡すことを諦めました。しかし、ここから彼の養育係としての責任が始まります。

4 年に渡って一年に一度、彼はその場所でジョセフを教え続けました。こうして肉体的、精神的、そして霊的にジョセフは預言者として備えられていったのです。モロナイは養育係であり、同時にジョセフに寄り添ってサポートする天の側の使いでした。実際にモロナイはジョセフの生涯を通して何度もジョセフに現れています。おそらくジョセフに最も現れた回数の多い天からの使者は、このモロナイだったのではないかと思われます。

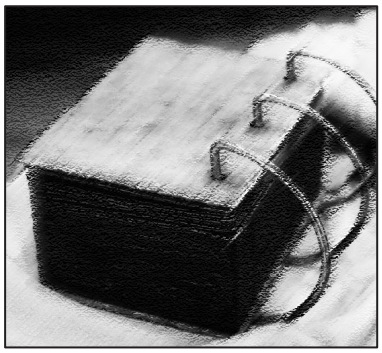


図 11　金版

最初の訪問から 4 年経った 1827 年 9 月 22 日、モロナイはついに金版をジョセフに手渡します。ジョセフはモロナイからその記録を命がけで守るよう命じられました。その言葉の通り、サタンの攻撃は執拗に人々の心を惑わしてジョセフを襲わせ、その記録を破壊しようと試みられました。しかしジョセフはモロナイに約束したとおり、命がけでその記録を守ります。その努力が認められ、金版は守られ、やっと翻訳の手はずが整えられました。

ジョセフは最初に金版を見たときからおそらくは気がついていたと思われますが、その金版に刻まれた文字は彼が目にしたことのない、異国の、そして古代の文字でした。彼がその内容を現代の人々に伝えるためにはまず翻訳をする必要がありました。当時世界を賑わせていた古代文字の代表はエジプトのヒエログリフでした。1799 年ナポレオンのエジプト遠征で偶然見つけられたロゼッタストーンにはヒエログリフとともに、デモティック（エジプト民衆文字）、そしてギリシャ語が同じ内容で書かれており、ここからシャンポリオンをはじめとする学者たちの言語解析が始まったのです。ロゼッタストーンの内容を解き、そこにある文字のみの解読には約 20 年を要したとされています。

さらにそこから人が完全にすべての古代エジプト文字を読めるようになるまで30年を要しました。つまり、ジョセフが金版を受け取ったのはそのさなかで、まだ古代エジプト文字でさえ完全に読める人は存在していなかったのです。

最初に翻訳の作業を始めたジョセフとマーティン・ハリスはその金版の文字が当時世界を騒がせていたエジプト文字に似ていると感じたのかもしれません。しかし、実際にその文字が改変されたエジプト文字であることは知るよしもありませんでした[22]。ジョセフは手探りで作業を始めました。何から手をつけていったらよいかわからなかった彼は、とりあえずいくつかの文字を紙に書き写し、モロナイから受け取ったウリムとトンミムを使ってなにか分かるかやってみました。すると、次第にそこに書いてある内容が分かるようになってきました。そして自分が理解したその翻訳内容を紙に書きとって、とにかく少しでも多くの文字の理解に努めました。

ジョセフを手伝っていたマーティンはスミス家の近所に住んでいた大農場主で大変裕福な人でした。彼は神への信仰も篤く、この業が神から来ている可能性があるのではないかと少しずつ考えはじめていました。初めは興味本位だったのかもしれません。誰も見たことも聞いたこともない話ですから当然のことです。マーティンは金版を見ることを許されていませんでしたが、ジョセフが書き取った文字の写しとその翻訳が自分の信仰の確証になるに違いないと感じていました。彼はその2つを手にして、ニューヨークで古代文字に詳しい学者たちに意見を求めに行きました。

中でもコロンビアカレッジ（現コロンビア大学）で古典を教えていたチャールズ・アンソン教授は当時シャンポリオンによるロゼッタストーンの解読にも興味を持ち、いろいろな資料を取り寄せていました。まだ完全なエジプト語の翻訳ができない時代にあったにもかかわらず、マーティンはその文字をアンソン教授に見せ、ジョセフの翻訳と一致するかを訪ねました。教授はおそらくは一文字ずつそれまでのロゼッタストーンの解析結果と照らし合わせ、その文字を追っていったものと考えられます。彼の出した答えは「その翻訳は概ね正しい」でした。そして証明書を作ってマーティンにわたしてくれたのです。

マーティンが感謝を述べてその場を立ち去ろうとした時、教授は「ところでその青年はどうやってその版を手に入れたのか」とたずねました。マーティンが正直に天使が教えてくれたと答えると、「ちょっとその証明書を見せてくれ」と言って受け取り、粉々にやぶいて「今どき天使の働きなどない」と言って、その版を持ってくれば自分が翻訳してあげようと提案しました。しかしマーティンは「版の一部は封じられているので見せ

[22] モルモン9：32－34参照

ることができない」と言うと、教授は「わたしは封じられているものを読むことはできない」と言いました。

当時の人々にとって聖書は現代のわたしたちが考えるよりも、もっと神聖で真剣に学ぶものであったと思われます。何よりそれだけが唯一地上に残された神の言葉だったわけですから。マーティンもおそらくは聖文にとても精通していました。アンソン教授との話が終わったその帰り道、あるいは家に着いてから、彼はある一つの聖句に思いを巡らせていたようです。

「それゆえ、このすべての幻は、あなたがたには封じた書物の言葉のようになり、人々はこれを読むことのできる者にわたして、『これを読んでください』と言えば、『これは封じてあるから読むことができない』と彼は言う。 またその書物を読むことのできない者にわたして、『これを読んでください』と言えば、『読むことはできない』と彼は言う。」（イザヤ 29：11-12）

マーティンはジョセフが金版を受け取って翻訳作業を始めた時、その業に圧倒されて自分が学校にも行っておらず、学問がなく、翻訳する者としてふさわしくないのではないかと悩んでいることを知っていたようです。たった今アンソン教授と交わした会話がそっくりそのままイザヤ書の予言に載っていたことに気がついたマーティンは「これを読むことのできる者」が学識ある教授たちであって、「その書物を読むことのできない者[23]」こそジョセフ・スミスであると悟ったようです。その後に続くイザヤの言葉は「見よ、わたしはこの民に、再び驚くべきわざを行う、それは不思議な驚くべきわざである」でした。マーティンはジョセフを励まし、たとえ学問がなくてもジョセフこそが神から選ばれた預言者であると説明し、二人はイザヤの言葉を信じて、翻訳の作業を続けました。

最初のリーハイ書と呼ばれた 116 ページの翻訳原稿は実に 6 ヶ月もの時間を要して書き上げられました。しかしそれはマーティンの不忠実さから失われてしまい、おそらくは敵の手に渡ってしまったと思われます[24]。半年もの時間をかけて必死に翻訳した原稿が無くなったことはジョセフにとって大変大きなショックでした。しかもそのことによって金版はモロナイによって取り上げられ、翻訳の賜物も失われてしまいました。ジョセフとマーティンはこれまでの人生でなかったほど悲しみ、悔い改めを強いられます。

サタンにとっては大勝利とも思えたこの出来事ですが、神様のご計画はサタンの計略のはるか上にあります。アダムとエバがサタンに惑わされて背きを犯し、エデンの園を追

[23] 2 ニーファイ 27：19 参照
[24] 教義と聖約 10 章参照

われて死ぬ体になった時、それはサタンが計画した作戦が勝利したとも思える瞬間でした。おそらくサタン自身もそう思っていたでしょう。しかしモーセ書には次のような言葉が残されています。

「そこで，サタンは（すでに多くのものを引き寄せて自分に従わせていたので）蛇の心の中に思いを入れ，エバもだまそうとした。**彼は神の思いを知らなかったので**，世を滅ぼそうとしたのである。」（モーセ 4：6）

サタンは神様の御心とその偉大なご計画を知らなかったので、皮肉なことに逆に神様のお手伝いをしてしまったのです。これによって人類は生じ始め、すべての者がこの世に来ることができるようになりました。これと同じようにリーハイ書が失われた今、サタンは作戦通りに神の計画が無に帰したと思っていたと思われます。しかし、**彼は神の思いを知らなかったので**、この時に再び神様のご計画のお手伝いをしてしまったのです。ニーファイは大版を作ったのにも関わらず、なぜわざわざ歴史的には同じ部分である小版をも作ったのか、自分自身でその理由を完結に記録しています。

「さて，主はある**賢明な目的のために**，わたしにこの版を造るように命じられたが，その目的はわたしには分からない。しかし，主は初めからすべてのことを御存じである。したがって，人の子らの中で御自身のすべての業を成就するために，ある方法を備えておられる。それは見よ，主は御自分のすべての言葉を成就する一切の権威を持っておられるからである。まことにそのとおりである。アーメン。」（1 ニーファイ 9：5-6）

またその大版を短くまとめて金版を作ったにも関わらず、モルモンは小版を見つけた時、なぜかそれを金版に付けたという説明も書き残しています。

「わたしは，**ある賢明な目的のために**このようにする。わたしの内にある主の御霊の働きによって，わたしにそのようなささやきがあるからである。わたしはすべてのことを知っているわけではないが，主は将来起ることをすべて御存じである。したがって主は，御自分の御心どおりに行うように，わたしに働きかけられるのである。」（モルモンの言葉 1：7）

そして主はジョセフが 116 ページが失われたことについて心から悔い改めた時に、このような言葉をかけられました。

「しかし見よ，ここに**知恵**がある。わたしがあなたに知恵を示し，あなたが何をなすべきか，これらのことについて戒めをあなたに与えるので，あなたは翻訳の業を完了するまでそれを世に示してはならない。・・・さて，まことに，わたしはあなたに言う。あなたが書き取った，あなたの手を離れてしまった事柄についての話が，ニーファイの

版（小版）に刻まれている。さて，ニーファイの版に刻まれている話は，わたしがこの話によって人々に知らせたいと自らの知恵により望んでいる事柄に関して，**もっと詳細なもの**である。それゆえ，あなたはベニヤミン王の治世に至るまで，すなわち，あなたが翻訳して所持している部分に至るまで，ニーファイの版に刻まれている記録を翻訳しなければならない。そして見よ，あなたはこれをニーファイの記録として出版しなければならない。このようにして，わたしは，わたしの言葉を書き変えた者たちを辱めよう。
わたしは彼らがわたしの業を損うのを許さない。まことに，**わたしの知恵が悪魔の狡猾さに勝っていることを彼らに示そう**。見よ，彼らはただ一部分，すなわち，ニーファイの記録の要約を持っているにすぎない。
見よ，ニーファイの版には，**わたしの福音についてもっと深い見方を与える多くの事柄が刻まれている**。それゆえ，あなたがこのニーファイの刻まれた記録の最初の部分を翻訳して，この書に加えることは，わたしの知恵にかなっている。」（教義と聖約 10：34，38-45）

こうして皮肉なことにサタンの無駄な手伝いによって、私達は単なる歴史の記録ではなく、もっと詳細な主の福音について、もっと深い見方を与える第一ニーファイ書からオムナイ書までを手に入れることができたのです。

ジョセフにとってこの苦い経験は非常に大きな訓練となりました。再び金版を受け取り、翻訳を再開した彼はオリバー・カウドリの到着と共に一気にわずか 3 ヶ月ですべての残りの 500 ページの翻訳を完成したのです。それは最初の 116 ページと比べると、実に 10 倍近くのスピードでした。急激に早くなったわけではありません。徐々にスピードが増して行ったのです。それはまさに彼に与えられた御霊の賜物が成長していった様子を表しています。

初め彼はどうやって翻訳をしたらよいかわからず、モロナイが渡してくれたウリムとトンミム（2 つの宝石が金属のつるにはめられたもの、別名：解訳器）を使って少しずつ文字の意味を理解していったようです。一つ一つの文字に対してそれを行うわけですから、最初はとても時間がかかったのです。しかし次第にジョセフはその感覚が自分が親しみ慣れていたあの物を探すときに使う石に似ていることに気が付きました。そしてその石を使い始めると驚くほど使いやすく、文字の意味をどんどん理解できることがわかったのです。前述の通り、このような石は当時アメリカのあちこちに存在しており、多くの人がもの探しや占いのたぐいに使っていたようです。しかしジョセフはただ一人、**その石の本来の目的である「翻訳」という能力にたどり着きました**。

しかし、それらはただの道具にしかすぎませんでした。子供が初めて自転車に乗る時、転ばないように補助輪をつけることを思い出してください。それによって子供は転ばず

に自転車に乗る訓練を始めることができます。しかし、本来子供は自転車に乗る力を**初めから持っています**。そして慣れればやがて補助輪なしでも自転車に乗れるようになります。ジョセフ・スミスには「聖見者」としての御霊の賜物が与えられていました。エジプトに売られたヨセフは後年、この「聖見者」について一つの予言を残しています。

「ヨセフはまことに証して言った。『主なるわたしの神は，**一人の聖見者を立てられる**。それは，わたしの腰から出た者のためのえり抜きの聖見者である。』まことに，ヨセフはまた言った。『主はわたしにこう言われた。「わたしはあなたの腰から出た者の中から，一人のえり抜きの聖見者を立てよう。彼はあなたの腰から出た者の中で大いに尊ばれるであろう。わたしはその聖見者に，彼の同胞であるあなたの腰から出た者のために一つの業を行うように命じよう。**その業は，彼らにとって大いに価値のあるものであり，わたしがあなたの先祖と交した聖約をあなたの腰から出た者に知らせるものである。**」』」（2ニーファイ3：6-7）

エジプトに売られたヨセフは遠い末日に自分と同じ名前の聖見者が現れることを見ました。ヨセフ自身、夢を解き明かす聖見者だったからです。そしてその末日の聖見者こそジョセフ・スミスだったのです。ウリムとトンミムも、あの石も、聖見者を育てるための訓練道具、つまり自転車の補助輪のようなものでした。それらを使い慣れていく間に、最初から彼に与えられていた聖見者としての御霊の賜物が次第に磨かれていったようです。それを示すいくつかの記録が残っています。彼がウリムとトンミムや石を使って翻訳をしている間に、次第に金版を見ることが必要なくなり、金版の翻訳を終える頃には石も使わずに金版は布に包まれた状態で、**何も見ることなく**翻訳ができるようになっていたそうです。

「ジョセフは他にも聖見者の石を複数持っていました。しかし，十二使徒定員会会員であり後に教会歴史家となったオーソン・プラット長老（1811－1881年）が語ったところによれば，ジョセフの霊的理解力は，このときまでに成熟の域に達していました。ブリガム・ヤング大管長や他の多くの中央幹部が出席した1874年6月28日の集会で，プラット長老は，会衆に，ジョセフ・スミスが『新約聖書を翻訳していた』ときに自分は『何度もその場に立ち会った』と告げました。その翻訳の過程で解訳のための道具が用いられるのを見なかったため，プラット長老は，どうしてジョセフが『モルモン書の翻訳のときのようにウリムとトンミムを使わない』のかいぶかしく思いました。
プラット長老が翻訳する預言者を見ていると，『ジョセフはまるで彼の思いを読み取ったかのようで，顔を上げ，主がウリムとトンミムを与えられたのはまだ霊感の霊について経験が浅かったためであって，**今ではその御霊の働きを理解できるまでに成長したためその道具の助けを借りる必要がなくなった**と説明しました。』」（リアホナ2015年10月号「聖見者ジョセフ」）

私達はモルモン書（金版）の翻訳をジョセフ・スミスの人生の中の一番大きな仕事と考えるのが普通ですが、実際には彼の行った数々の業から考察すると、モルモン書の翻訳もまた彼を聖見者として訓練するための必須課程だったようです。彼は最初に「**預言者**」として召され、モロナイや数々の天使たちによって鍛えられ、多くの啓示を受けれるようになりました。それは教会の設立には欠かせないものであり、神と人の間に立つ人間の役目としての御霊の賜物だったと思われます。しかし、同時にエジプトに売られたヨセフが言ったように、彼は「**聖見者**」としても鍛えられます。すでに失われた使徒ヨハネの記録である教義と聖約 7 章、オリジナルの原稿がとうの昔に無くなっている旧約及び新約聖書の翻訳、それに伴うモーセ書の復活、そして 4000 年も前に書かれてその中の図形のみがわずかに伝承で伝わって残されたアブラハム書。これら全ては聖見者でなければ回復させることができない神の業でした。それはまさしく、ヨセフが語った「**その業は，彼らにとって大いに価値のあるものであり，わたしがあなたの先祖と交した聖約をあなたの腰から出た者に知らせる**」ための業だったのです。

これらのすべてが末日の聖徒には必要でした。真の福音の理解、イザヤ書やヨハネの黙示録の理解、自分たちがこの末日という特別な時に地上に生まれてきたという記憶の取り戻し、これら全てにジョセフが預言者であり、聖見者であるという事実がどうしても必要だったのです。ジョセフが殉教した時、このことを理解していたジョン・テイラー長老はジョセフのことをこう書き残しました。

「主の預言者であり聖見者であるジョセフ・スミスは，**ただイエスは別として，この世に生を受けた他のいかなる人よりも，この世の人々の救いのために多くのことを成し遂げた。**」（教義と聖約 135：3）

モルモンとモロナイ親子が命をかけて過去の義人たちの願いをつないだバトンは、このような始まり方でジョセフ・スミスのそれこそ命がけの努力を通し、末日の聖徒たちへとつながっていくことができるようになったのです。

神権の回復

ジョセフとオリバーがサスケハナ川の近くの妻エマ・スミスの両親の家で翻訳の作業を続けていた時、ふと一つのことに気がつきます。「権能を持つ者によるバプテスマ」、この言葉に触れた時、まず自分たちがそのようなバプテスマを受けていないことに気がつき、そしてかつてこの世には「神の権能」なるものが存在していたのだと理解します。

当然、自分たちもそのような神に認められるバプテスマを受けなければならないと考えたことでしょう。そして同時にいったいこの世のどこにそのような権能を持つ者がいるのかと不安になったかもしれません。最初の示現において、神は「どの教会も正しくない」と言われたわけですから。不安にかられながらも彼らには一つの確信がありました。それは神は尋ねれば答えてくださるという確信です。ジョセフもオリバー[25]もその経験がすでにあったので、二人は家を出てすぐそばの森の中へと入っていきました。新緑と穏やかな陽光の 1829 年 5 月 15 日、彼らはひざまづくことができる場所を見つけ祈り始めます。

「これは望んで間もなく実現した。憐れみに富んでおられ，へりくだった者の絶え間ない祈りにいつも快くこたえてくださる主は，わたしたちが人々の住いから離れて熱烈に主に呼び求めたところ，わたしたちに御心を示してくださった。突如，永遠のただ中から来たかのように，贖い主の声がわたしたちに平安を告げられた。それと同時に，とばりが分けられ，神の天使が栄光をまとって降って来て，わたしたちが切に待ちこがれていた知らせを告げ，悔い改めの福音の鍵を渡してくださったのである。何という喜びであろう。何という驚異であろう。何という驚きであろう。」（ジョセフ歴史-オリバー・カウドリの手記）

図 12　サスケハナ川

降りて来られた天使は復活したバプテスマのヨハネでした。おそらくこの人が来ることは絶対必要だったと思われます。バプテスマのヨハネは最後のアロン神権者ではありません。彼の後も、神殿で儀式を行うレビ族は存在していたからです。しかし歴史上、絶対的にアロン神権を持っていたと世界中の誰もが認める人物はこの人しかいないのです。イエス・キリストにバプテスマを施した人物。ふさわしい権能をもっていなかったはずがありません。彼が来ることによって末日に再びアロンの神権、すなわち小神権が世に認められる形で[26]地上にもたらされることになりました。ヨハネは自分の使命と責任について説明し、次のように告げました。

「このときわたしたちを訪れて，わたしたちにこの神権を授けてくださった使者は，自分の名はヨハネといい，『新約聖書』の中でバプテスマのヨハネと呼ばれている者で，自分はメルキゼデクの神権の鍵を持つペテロとヤコブとヨハネの指示の下に働いていると言われた。また，**ふさわしいときにメルキゼデクの神権もわたしたちに授けられ**，

[25] 教義と聖約 6：22 参照
[26] 人が信じる信じないは別としての意味

わたしは教会の第一の長老と呼ばれ，彼（オリバー・カウドリ）は第二の長老と呼ばれる，と言われた」（ジョセフ歴史 1：72）

神権は一つしか存在しません。それはただ唯一の神の権能だからです。しかし、人の霊的な成長の段階に合わせて神様はこの神権を 2 種類、言い換えれば 2 段階にしてくださいました。アロン神権は別名「準備の神権」そのあとに来る大神権であるメルキゼデク神権の儀式のための備えとなります。私達のすべての霊的な救いに関する儀式はメルキゼデク神権によって完結されます。バプテスマのヨハネからアロン神権を受け、互いにバプテスマを施しあった二人は数日後、ペテロ、ヤコブ、そして前に述べた通り、変貌して 1800 年も前から死を味わうことがなく、末日の最後に聖徒たちと共にイスラエルを集めるという責任を受けたヨハネがやってきて、彼らによってメルキゼデク神権を授けられました。

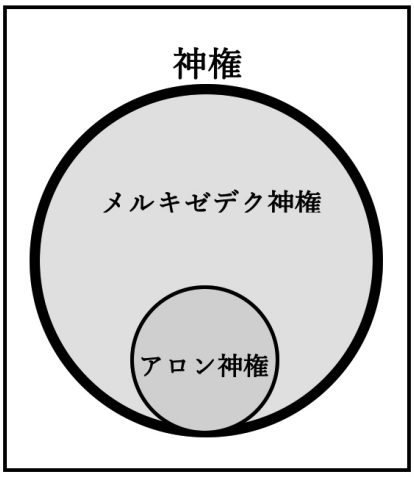


図 13　2 種類の神権

教会員の中では神権のことを「男性だけが持つことのできる特別な神様の力」と考えている人が少なからずいると思います。言葉や実際の儀式などを見るとそう思ってしまうのもしかたのないことです。でも神権の本質は神様の子どもたちに対する愛です。神権とは世界を創造し、維持する力。創造だけではなく、維持する力ですから今、この瞬間も私達は神権の維持力に包まれた世界の中で生かされています。万物が法則を持って動くのも、私達の肉体が小さな元素の集合によって組織されているにも関わらず、バラバラに分解しないのもこの神権の力によって維持されているからです。小さな元素も、太陽を回る惑星も、神権の法則に従って動いています。このことをモルモンは次のように説明しました。

「おお，人の子らは何と無力なことか。まことに，地のちりよりも劣っている。見よ，地のちりは，わたしたちの大いなる**永遠の神の命令に応じて**あちらこちらに動いて分かれる。まことに見よ，神の声によって丘と山は揺れ動き，震える。・・・見よ，これは事実である。確かに動いているのは大地であり，太陽ではないからである。」（ヒラマン 12：7-9，15）

神権の力は私達が想像するよりも遥かに偉大で、遥かに力強いものです。また神と共に永遠から永遠に渡って存在しつづけており、止まることも無くなることもありません。パウロも人間に与えられるこの偉大な神権の存在を次のように説明しました。

「彼（※メルキゼデク神権）には父がなく、母がなく、系図がなく、生涯の初めもなく、生命の終りもなく、神の子のようであって、いつまでも祭司なのである。」（ヘブル 7：3）

私達が、この世において神権を受けてその儀式に携われるのは神の子どもたちを学びの学校であるこの地上へと連れてきて、それを再び神様の元へと戻すための目的があるからです。私達はそのことを「救い」と呼びます。この救いに関しては男性も女性も同じように働きます。どちらの力が欠けても救いはもたらされません。男性＝神権ではありません。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は，次のように述べておられます。

「姉妹たちには神権が与えられておらず，神権が姉妹たちに授けられていないとはいえ，主が姉妹たちに権能を与えておられないという意味ではありません。……わたしたちの救いに関連があって絶対に必要な特定の事柄を教会内で行うために，男性あるいは，姉妹に与えられている権能があります。姉妹たちが主の宮で行う業などがそれです。彼女たちには幾つかの大いなるすばらしい事柄を行う権能が与えられています。それは主にとって神聖であり，神権を持っている男性によって与えられる祝福と同様に完全に拘束力を持っています。」（ジョセフ・フィールディング・スミス，“Relief Society—an Aid to the Priesthood,” Relief Society Magazine, 1959 年 1 月号，4）

この世で私達が神様から授かった神権を使って行う儀式には大きく 2 つの目的があります。一つは救いに必要不可欠な儀式を行うこと。そしてもう一つは私達が成長できるように助けを与えることです。救いに必要な儀式にはバプテスマや、聖霊の賜物の按手、神殿の儀式などが含まれます。一方私達が成長できるように助けを与える儀式は本来私達が完璧であっていつも神様の戒めに従って強く生きることができれば必要のないものなのかもしれませんが、実際にはそうわけにはいきません。バプテスマの誓いを簡単に忘れ、すぐにサタンの誘惑に惑わされます。自分の失敗のために落ち込み、病気や怪我、思わぬ不幸で心を痛め、涙を流します。人生の中で新しい道を歩もうとする時には心に助けを必要とします。本来であれば、天のお父様やイエス様が来て私達を助け慰めたいと思っておられると思いますが、そんなことをすれば私達に信仰の必要がなくなり、せっかく準備してくださった、地球という学校も意味をなくしてしまいます。

ですからその代わりに神権者に代行を頼み、彼らに弱り、泣いていて、慰めや励ましを必要とする神の子どもたちに「成長できるように助けを与える儀式」を行うように神権の儀式が準備されているのです。神権者は神様の信頼を受けて神様の代行としてこれらの儀式を行うわけですから神様の御心を理解して働く必要があります。

「それゆえ，今や人は皆，自分の義務を学び，任命されている職務をまったく勤勉に遂行するようにしなさい。怠惰な者は，その職にいるにふさわしい者と見なされない。また，自分の義務を学ばず，認められるに足る者であることを示さない者は，その職にいるにふさわしい者と見なされない。まことにそのとおりである。アーメン。」（教義と聖約 107：99-100）

儀式だけではありません。教会でも家庭でも神権による管理のすべてを同じ気持ちで行い、決して自分の思いではなく、神様の思いを考えて**愛**によって行動する必要があります。

「わたしたちは悲しむべき経験によって学んだ。すなわち，ほとんどすべての人は，少しばかりの権能を得たと思うや，すぐに不義な支配を始めようとする性質と傾向がある。それゆえに，召される者は多いが，選ばれる者は少ないのである。いかなる力も影響力も，神権によって維持することはできない，あるいは維持すべきではない。ただ，説得により，寛容により，温厚と柔和により，また**偽りのない愛により**，優しさと純粋な知識による。これらは，偽善もなく，偽りもなしに，心を大いに広げる。」（教義と聖約 121：39-42）

末日の聖徒たちにはこの神権が与えられることがどうしても必要でした。それは単に救いのための儀式を受けるだけでなく、神様の代わりとなって互いに助け合うことを学ぶ必要があったからです。聖徒が築こうとするシオンと言う場所は復活した地球、つまり日の栄光の王国に似ており、そこに入れるものはそういう律法（人を愛する）を守れる者だけが入れる場所だからです。

「日の栄えの王国の律法に従えない者は，日の栄えの栄光に堪えられないからである。」（教義と聖約 88：22）

このことはイエス様がこの世におられたときにも教えられています。ある律法学者がイエス様を試そうとして、どの戒めが一番大切なのかとたずねた時に返事はこうでした。

「イエスは言われた、『「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」。 これがいちばん大切な、第一のいましめである。 第二もこれと同様である、「**自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ**」。 これらの二つのいましめに、**律法全体と預言者とが、かかっている**』。」（マタイ 22：37-40）

神様を愛することとまるで同じように隣人を愛することは、日の光栄の王国に入れるようになるための訓練です。ですからイエス様はこのことに「律法全体と預言者とが、かかっている」とおっしゃられました。また、最後の晩餐のあと、弟子たちを離れる最後のときに、この世の肉体での最後のメッセージとして次の戒めを与えられました。

「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、**互に愛し合いなさい**。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」（ヨハネ 13：34）

律法や預言者の言葉は人を愛することの大切さを教え、神権はそれを実際に行うための訓練に必要なものとなりました。男性でも女性でも、神権を持っていても持っていなくても、神権の管理の元に神様がその子どもたちを愛しておられる気持ちを持ってその業に仕える時に、私達は訓練され、その愛の律法を守ることが習慣化されて、やがて日の光栄に入るのにふさわしい者へと成長することができるようになります。

この末日において、人類の成長のためアダムに最初に与えられた神権が再びもたらされたことには大きな意味があります。この地上において、これが最後の神権時代だからです。現世と試しの期間において、この後に来る神権時代はありません。人類が最後の最後に頑張ることができる時は、もうこの時代をおいて他にないのです。この聖なる神権がジョセフ・スミスを通して末日の聖徒たちに託された時、最後の仕上げをするために必要な権威がいよいよ整いました。

教会の設立と組織の回復

金版が翻訳されて新たにモルモン書として出版され、完全な福音の回復が始まり、アダムから伝わる神権が与えられて神様の業を実行できる権威が授けられた時、**末日の聖徒が働く場所**として重要な「**教会**」の回復が必要になってきました。例えば信者の数が家族単位ほどしかなかったニーファイたちはある意味教会には集っていませんでした。わざわざ教会を組織しなくても家族全員が教会員であり、主の日に礼拝行事を行うことは自然の習慣だったからです。しかし、ニーファイ人の人数が増えてきた時に、神様の命令に従いたくないというグループ増えてきたので、信者が一つとなって働くための組織、教会が必要になってきました。モルモン書には最初に作られた教会の記録がこう書いてあります。

「そしてそれ以後，彼らは神の教会，すなわちキリストの教会と呼ばれた。また，神の力と権能によってバプテスマを受けた人々はだれでも，神の教会に加えられた・・・モーサヤ王はゼラヘムラの全地に教会を設立することをアルマに許し，またそれぞれの教会をつかさどる祭司と教師を聖任する力を彼に授けた。」（モーサヤ 18：17；25:19）

イエス様もイスラエルと、アメリカの地で教会を設立されました。末日の聖徒に与えられた使命はイスラエルの集合によるシオンの設立ですので、ジョセフとその友人とその家族だけの集まりだけで良いというわけにはいきません。当然世界中を巻き込んでの神様の業になりますから、世界中で働く末日の聖徒のための基本的な活動の場となる「教

会」が必要になります。しかも、過去にイエス様が組織されたものと全く同じ物を回復する必要があります。

「わたしたちは，初期の教会にあったと同一の組織，すなわち，使徒，預言者，牧者（※ビショップ），教師，祝福師などがあることを信じる。」（信仰箇条 1:6）

イエス様はニーファイ人を訪れた時に、もし将来この地にやってくる**異邦人（末日の聖徒）**が悔い改め、神の道を歩むのであれば教会を作るのを許されると教えられました。

「しかし，彼らが悔改めてわたしの言葉に聞き従い，心をかたくなにしなければ，わたしは彼らの中に**わたしの教会を設けよう**。彼らは聖約を交わし，わたしがこの地を彼らの受け継として与えた，このヤコブの残りの者の中に数えられるであろう。」（3 ニーファイ 21：22、教義と聖約 10：53 も参照のこと）

末日聖徒イエス・キリスト教会はニューヨークの法律に基づき、6 人の署名によって 1830 年 4 月の 6 日にデビッド・ホイットマーの父であるピーター・ホイットマーの家で組織されました。

初期の教会と同じ組織で設立されたこの末日聖徒イエス・キリスト教会は、預言者である大管長によって導かれます。しかし、大管長が組織の長ではありません。私達が頭に置くべきお方はイエス・キリストです。教会の長であるそのお方をお迎えするためにシオンを作るということが、この教会の目的になります。今の段階では私達はまだシオンを作っていないため、主をお迎えすることができません。そのため大管長である預言者が、神権の鍵をイエス様からお借りしている状態になります。大管長が授かった神権の鍵は、すべての使徒にも同様に与えられています。しかし、それを行使できるのは大管長だけです。やがて末日の聖徒の使命が達せられて、イスラエルが集合し、イエス様をお迎えする時に、代表となる神権者たちがアダム・オンダイ・アーマンの谷に集められ、アダムの指示のもとですべての神権の鍵がその場に来られるイエス様に返還されます[27]。

[27] ジョセフ・フィールディング・スミス「完成への道」P228

図14　アダムオンダイアーマンの谷

神殿の建設と神権の鍵の回復

教会という組織が産声を上げたことによって、秩序のもとでより多くの人が教会員として入会できるようになりました。人々は機会あるごとにこの教会とモルモン書、そして預言者ジョセフ・スミスを紹介し始めて、少しずつあちらこちらで教会に入会する人が増え始めました。しかし、改宗者の住む地域の幅があまりにも広く、通信手段もまだなく、印刷できている資料と呼べるのはモルモン書だけでしたので、ジョセフが近くに住んでいない場所の教会では混乱が起こりました。それは今の私達からすると想像し難い事ですが、当時の教会の会員は100%が数年以内に改宗した人たちばかりであり、情報の乏しい中、なんとか新しい教会のために動こうとしても、出てくるアイデアは改宗前の宗教の影響を拭いきれないものばかりだったからです。

ここで神様は一つの啓示を与えられます。それはカートランドへの「集合」でした。なぜニューヨークで始まった教会が遠く離れたオハイオ州のカートランドまで移動する必要があったのでしょうか。いくつかの理由が考えられますが、ここでは4つほど紹介したいと思います。一つは前述のように混乱に陥った教会を距離的に一つのところに集めて、正しい教えを全員に共通して持たせるためでしょう。もう一つの理由は、将来シオンができる場所へ距離的に近づくこと。教会員は後からこの事を知ることになるのですが、これは教会歴史を見ても徐々に教会がシオンの場所へ近づいていったことがわかります。

3番目の理由は働き人を集めることです。ジョセフに与えられた使命はシオンの建設です。ですから教義と聖約には何度も「シオンのために」という言葉が出てきます。そしてそのために、神様の契約の民を集める必要がありました。これが「イスラエルの集合」です。しかし一体誰がこのイスラエルの民を集めるというのでしょうか。この目的を果たすためには、まず初めにそのために働く人達が必要になります。まだ神権の業に

おける「イスラエルの集合の鍵」を受け取っていなかった教会は、この頃一つの場所に集まって、「最初の働き人を集めるための伝道」を行っていたのです。

そして4つ目の理由は先程の「鍵」を受け取ることでした。その冬、困難の中、神様の指示通りに多くの人がカートランドへ移り住みました。主はその地において一つの啓示を与えられます。

「あなたがた自らを組織しなさい。すべての必要なものを用意しなさい。そして，一つの家，すなわち祈りの家，断食の家，信仰の家，学びの家，栄光の家，秩序の家，神の家を建てなさい。」（教義と聖約88：119）

この「神の家」がこの末日聖徒イエスキリスト教会の歴史における最初の神殿となりました。カートランド神殿の造りは現在の神殿にあるようなバプテスマフォントやエンダウメントの部屋などはありませんでした。まだそれが示される前の段階だったからです。このカートランド神殿の最大の目的は、できたばかりの教会の活動に必要な**神権の鍵**を与えることでした。なぜ、すべての鍵を神権の授与と同時に与えなかったのかと不思議に思う方もいるかも知れませんが、実はこの現代においても私達は全ての神権の鍵を渡されているわけではないのです。この世を離れても私達は神権を持ち続けます。そしてその先にも儀式や昇栄に至るまでの業が存在し、そのそれぞれに必要な神権の鍵があります。このように神権の鍵とはその時々の段階に応じて与えられていくものだからです。

たとえば、バプテスマのヨハネがアロン神権を授けたときには、バプテスマを施しても良いという鍵が与えられました[28]。ペテロ、ヤコブ、ヨハネがメルキゼデク神権を授けたときにはおそらく聖霊の賜物の按手と、教会の組織運営に関する鍵を与えたのだと思います。そして教会が設立され、最初の働き人たちが集められた今、次の段階の業のための鍵が準備されました。

カートランド神権の献堂式のさなか、その出来事は起こりました。復活したモーセ、エリヤそしてエライアスが現れ、モーセがまず「**イスラエルの集合の鍵**」を授けてくれました。これにより、教会は世界中に出ていって福音を述べ伝え、人々を集めることができるようになりました。次にエライアスが現れ、「**アブラハムの福音の鍵**」を渡します。これによって父祖アブラハムが学んだすべての福音が私達に実行されることになりました。教会で学ぶすべて、先祖から子孫へと続く繋がり、引き継がれる聖約、神殿で学ぶことのできるすべてが神権という「経路」を通して私達に与えられるようになり

[28] 教義と聖約13：1参照

ました。最後にエリヤが現れて「**結び固めの鍵**」を渡してくれました。私達家族として結び固められ、先祖や子孫とも結び固められるようになったのです[29]。

教義と聖約の編集

今や神権も神権の鍵も渡された末日の聖徒たちは、いよいよ幅広く世界に向けての活動を開始する準備が整いました。しかし、自動車を手に入れても運転の仕方や規則を学ばなければ自由に動かすことができないように、当時の聖徒たちには知識が不足していました。一度にすべてを教えられても学ぶことはできなかったでしょう。そこで神様は少しづつ、機会を捉えて、啓示という形で預言者を通して教え続けられました。その数は膨大で、多くのものは手書きで記録されていました。手書きの記録が増えてきた時、その神様からの啓示をぜひ読ませてほしいという人たちも増え始め、人から人への手書きの複製が増えてきたのです。ところが、伝言ゲームのように書き写されるごとに少しずつ誤記入などが生じて、本来の啓示の内容が変わってしまうというような問題も生じ始めました。

指導者たちはこの事を憂慮し、それまでに与えられた啓示を一冊の本にして出版しようというプロジェクトが始まりました。この本は「戒めの書」として準備が着々と整っていきましたが、最後の出版となった時に町が暴徒によって襲われ、印刷所は破壊されました。奇跡的に被害をまぬがれた複数の重要な原稿が、再度編集されて 1835 年に最初の「**教義と聖約**」として発行されました。教義と聖約は他の聖典と異なり、末日の預言者に与えられた啓示を集めたものですから、この 1835 年以降もページや章が付け加えられており、ある意味、今でもまだ完成していない本であるとも言えます。

教義と聖約の出版にあたってはイエス様ご自身が、まえがきとあとがきを与えてくださいました。まえがきが今の教義と聖約の第１章。あとがきが第１３３章になります。教義と聖約の第１章には末日の聖徒に向けて、警告が与えられています。

「また，悔い改めない者は，すでに受けている光さえ取り去られる。わたしの御霊はいつでも人を励ますわけではないからである，と万軍の主は言う。これらの戒めを調べなさい。これらは真実であり，確かであって，これらの中にある預言と約束はすべて成就するからである。」（教義と聖約 1：33，37）

これから教義と聖約を学ぶものに対しての警告ですから、それは末日の聖徒に対する警告です。教義と聖約の第１章はイザヤ書の第１章に大変似通っています。どちらも悔い

[29] 教義と聖約 110 章参照

改め、心を清くすることによって聖霊による教えを受けられるようにするための警告です。

「謙遜であれば，強くされ，高い所から祝福を受け，また折々知識を与えられるようにするためである。」（教義と聖約 1：28）

私達はこの警告通りに悔い改めて清くなり、心を謙遜にして、聖典を祈りとともに研究すれば、さらに大いなることを知ることができるようになります。

高価な真珠

ジョセフは常に神様と共にいるために一生涯の間努力を続けました。そのため教義と聖約に残された啓示の他にも数々の教えや知恵、そして知識をいただき、その多くが今日の私達の役に立っています。教義と聖約のほとんどはジョセフが受けた神様からの啓示ですが、その他にも多くのものをジョセフは機会があるごとに受け、それを教会の指導者たちが機関誌や新聞などを通して発表していました。しかしその殆どは一度だけの発表であって、当時、カートランドやノーブーにいた人たちだけがリアルタイムで見ることができたものだったのです。その中にはたいへん貴くて重要な資料となるものも多く含まれていましたが、迫害につぐ迫害、ノーブーから聖徒たちが追われる段階では、かなりの資料が失われかけていました。

聖徒たちがソルトレークシティに到着し、開拓を始め、やがて生活が落ち着き、伝道活動が世界に向けて再び行われ始めた頃、当時十二使徒で英国伝道部の会長でもあったフランクリン・D・リチャーズ長老がこれらの失われかけていた資料を集め、「**高価な真珠**」と題して、伝道のために、そして教会員の学習のために発行し広く用いられるようになりました。そして 1880 年に大管長会の提議によって「**高価な真珠」は教会の標準聖典の一つとなった**のです。

「高価な真珠」は他の聖典に比べて短く、内容も様々であるため、標準聖典の一つでありながら日曜学校などでそれだけを学ぶことはありません。どちらかといえば参考資料というような感じで使われたりしますが、その内容に真剣に取り組めば、そこには驚くべき知恵と知識が隠されていることがわかります。「高価な真珠」はその名の通り「高価な真珠」であり、なぜ主がモルモン書や教義と聖約の他に、このような別の聖典を与えてくださったのかを理解する時、私達はまた一つ真の末日の聖徒に近づくことができるようになります。

高価な真珠は 5 つの資料から構成されています。

モーセ書
アブラハム書
ジョセフ・スミス－マタイ
ジョセフ・スミス－歴史
信仰箇条

それぞれの書の説明は高価な真珠の序文に書いてあるとおりですが、これらの資料がどのように私達に益を与えてくれるのかを理解することが重要です。いろいろな目的が考えられますが、ここではその一つを紹介しておきます。

「モーセ書」と「ジョセフ・スミス－マタイ」はジョセフ・スミスが行った新約聖書と旧約聖書の翻訳からの抜粋です。しかし、この部分だけが特に抜き出されて、別の聖典として掲載されたことには意味があります。モーセ書は現在の創世記から失われた部分を数多く回復しており、中でも貴重な資料として世の中から消されたはずの「過去にシオンがこの地球上に設立されたことがあった」という情報が掲載されています。これがなければヨハネの黙示録の次の部分を読み解くことは誰にもできなかったでしょう。

「**女**は**男の子**を産んだが、彼は鉄のつえをもってすべての国民を治めるべき者である。この子は、神のみもとに、その御座のところに、**引き上げられた**。」（黙示録 12：5）

ジョセフがモーセの書を翻訳するまでは、この黙示録の文章を理解できる者は誰もいませんでした。ジョセフは黙示録の翻訳も行っており、その中でこの文章に出てくる「女」と「子供」の意味を説明しています。彼の説明によれば「女」は神の教会で「子供」は神の王国、すなわち**シオン**です。黙示録の聖句の中では生まれたばかりの神の国シオンは神の御元に引き上げられたことになっています。モーセ書にはエノクが生涯をかけて人々に悔い改めを述べ伝え、ついにシオンを築き上げ、そしてそのシオンが天に取り上げられたことが書かれています。

「エノクは，義をもって神の民に教えを説き続けた。そして，その生涯に，彼は一つの町を建て，それは聖なる都，すなわちシオンと呼ばれた・・・ さて，主はエノクに，地に住むすべての者を見せられた。彼はまことに，時がたって**シオンが天に取り上げられるのを見た**。」（モーセ 7：19，20）

このことが知らされるのは私達末日の聖徒にとって、とても重要なことでした。ともすれば私達は聖書に書いてあることがどこか遠い異国のおとぎ話のように思えてしまい、神様の約束も自分たちとは関わりのないことのように感じてしまうことさえあります。しかし神様はジョセフを召した最初から、私達末日の聖徒が働く最大の目的は「シオ

ン」を築くことであると啓示を通して何度も語られてきました。この時点ではまだシオンを築くことがまるでおとぎ話のように思えていた教会員が多くいたことでしょう。しかし、ジョセフがこの部分を翻訳して説明してくれた時、聖徒たちはあることを理解します。「**自分たちと同じ人間が、前に一度シオンをつくったことがある**」。この事実はシオンの可能性を一気に現実化したと思われます。同じ人間が前に同じこの地上にシオンをつくったのであるなら、私達にもできないことではない。しかもその事実に加えて主は次のように言われました。

「**わたしは自分の懐にエノクのシオンを受け入れた者である**。また，まことにわたしは言うが，わたしの名を信じたすべての者を受け入れた者である。わたしはキリストであり，わたし自身の名によって，またわたしが流した血によって，父の前で彼らのために弁護をしてきた。」（教義と聖約 38:4）

この言葉がどれだけ当時の聖徒たちを勇気づけたことでしょう。人間がシオンを作ることができることが証明されただけではなく、この教会の頭である御方こそが、そのシオンを受け入れたそのご本人であると啓示を通して言われたのです。人々は「シオンの大義」のために動き始めました。

「ジョセフ・スミスーマタイ」にはイエス様が弟子たちに末日に起こることについて説明され、その状況と、それが起こる時に私達が気をつけるべきことを警告されています。しかし、それはその時の十二使徒たちに説明された言葉ですが、当然彼らはヨハネを除いては末日まで生きていませんでした。ですからこの言葉は直接末日に生きる私達に与えられた言葉として、高価な真珠に抜粋されました。この中でイエス様は末日に生きる者たちに、何度も「だまされないように、まどわされないようにしなさい」と警告されています。これは私達にとってとても重要なメッセージで、末日の聖徒たちを見た使徒ヨハネも同様に黙示録を通してメッセージを送っています。

「地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、その名を世の初めからしるされていない者はみな、この獣を拝むであろう。**耳のある者は、聞くがよい。**とりこになるべき者は、とりこになっていく。つるぎで殺す者は、自らもつるぎで殺されねばならない。**ここに、聖徒たちの忍耐と信仰とがある。**」（黙示録 13：8-10）

ここでヨハネは、たとえ聖徒であってもサタンの誘惑にとらわれるものは囚われていくと説明し、それを回避するための秘策として「耳のあるものは聞くがよい」というイエス様が地上におられた時によく用いられたフレーズを引用して使っています。しかし、興味深いことに、イエス様が使われた言葉は英語で「ears」と複数形になっています。それは人には 2 つの耳があるからです。ところがヨハネはこれを**「an ear」と書いて「一つの耳」で聞くがよい**と説明しています。この「an ear」という言葉は全聖典を通

して 9 回しか出てきません。そのうちの 8 回はヨハネ自身が黙示録で、最初の 7 回は 7 つの教会に宛てた手紙の中でこれから黙示録を読む人に向けて、まるでヒントを与えるように、どのような心構えで読むべきかを説明する時に用いており、残りの 1 回を黙示録中最も重要で、黙示録全体のカイアズマのど真ん中に当たる 13 章のさらにちょうど真ん中でこの言葉を使っています。ヨハネが書いた記録が末日の聖徒に向けてのメッセージであり、イエス様のメッセージと同様の意味があるとするのであれば、私達に対するサタンの攻撃で私達が最も気をつけなければならないことは「高慢」であり、偽物の情報によって惑わされてしまうことです。

モロナイは私達のことを見たことがあると説明した後にこう付け加えています。

「**わたしは，あなたがたが心を高慢にして歩くことを知っている**。心を高慢にして高ぶることをしない者はわずかしかいない。高慢な者は，非常に華やかな衣服を着て，ねたみや争い，悪意，迫害，またあらゆる罪悪に染まる。また，**あなたがたの教会，まことにすべての教会は，あなたがたの心が高慢なために汚れたものになってしまった**。」（モルモン 8：36）

これが末日の聖徒に対するもっとも効果的なサタンの攻撃です。主は啓示の中でこのことに触れ何度も私達に忠告されています。

「見よ，まことに，あなたがたに言う。**あなたがたの中に**偽善者がおり，彼らはある人々を欺いてきた。このことが敵対する者に力を与えてきた。しかし見よ，このような者たちは救い出されるであろう（※知らずに騙された人たちの意味）。しかし，偽善者たちは，生きるも死ぬも，わたしが望むとおりに見破られ，絶たれるであろう。そして，わたしの教会から絶たれる者は災いである。彼らは世に打ち負かされるからである。」（教義と聖約 50:7-8）

「それゆえ，欺かれないように気をつけなさい。そして，欺かれないために熱心に最善の賜物を求め，それらが何のために与えられているのかを常に覚えておきなさい。」（教義と聖約 46:8）

ニーファイはこの問題を回避するための唯一の方法を、イザヤの言葉を説明するのと同時に私達に教えています。

「見よ，主なる神はこう言われる。『わたしはここにも少し，そこにも少しと，教えに教え，訓戒に訓戒を加えて，それを人の子らに与えよう。わたしの訓戒を聴き，わたしの勧めに**耳を貸す者**は，知恵を得るので幸いである。わたしは受け入れる者にさらに多く与え，「もう十分である」と言う者からは，彼らが持っているものさえも取り上げる。』」（2 ニーファイ 28:30）

さきほど「an ear」という言葉が全聖典を通して 9 回出てくると説明しました。そしてそのうちの 8 回が黙示録に出てくることも説明しました。残りの 1 回はヨハネと同じものを見たニーファイがここで使っているのです。イザヤが書いた神様がどのようにして私達に教えてくださるのかという内容を説明した時に、「わたしの勧めに耳を貸す者は」と書いた時、彼は「an ear」すなわち一つの耳でと書いたのです。そして「an ear」すなわち一つの耳で聞くということがどういう意味であるのかを続けて説明しています。

「人に頼る者，すなわち肉を自分の腕とする者はのろわれる。すなわち，**聖霊の力によって与えられる訓戒**ではなく，人の訓戒に耳を傾ける者はのろわれる。」（2 ニーファイ 28:31）

「an ear」すなわち一つの耳で聞くことができるものとは、心によって理解できる**聖霊の言葉**です。人は自分の知恵により頼み、神様から聞こうとしなくなった途端、その高慢によってできた心のすきまにサタンによる偽情報が入ってきます。あたかもそれが真実のように思えて、それを教会員が教会員の間で広めようとします。これがモルモンとモロナイが末日の聖徒が陥ることを最も恐れた「**内部崩壊**」です。

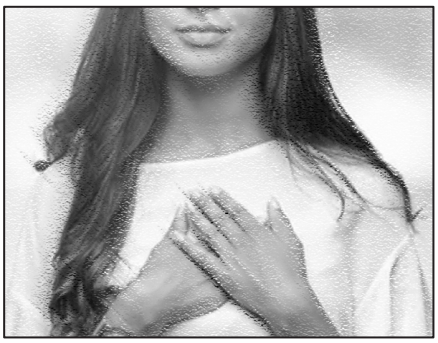


図 15　一つの耳で

モルモンとモロナイは自分たちの民がレーマン人によって滅ぼされたのではなく、結局は「内部崩壊」によって滅びたことを知っていました。

「おお，麗しい者たちよ，あなたがたはどうして**主の道から離れてしまったのか**。おお，麗しい者たちよ，あなたがたは両腕を広げて立ってあなたがたを受け入れようとしておられた，あの**イエスをどうして拒んだのか**。見よ，あなたがたはそのようにしなければ，倒れなかったであろうに。しかし見よ，あなたがたはもう倒れてしまい，わたしはあなたがたを失ったことを嘆き悲しんでいる。」（モルモン 6：17-18）

私達は常に自分を自分の思いと行動を吟味する必要があります。そうしなければ知らず知らずの内にサタンに惑わされ、自分はさも真理を広げていると思いながら、偽善者となって教会の中で聖徒を惑わす者になってしまうのです。ではどうすればその状況を打破することができるのでしょうか。そのヒントは教義と聖約に書かれています。

「これらすべての賜物は，**神の子たちを益するために**神から来る。」（教義と聖約 46:26）

私達が言葉にして伝えたり、行動として他の人に影響を及ぼすことが、自分の思いではなく、神様から聖霊を通して出たものであるならば、その事は**結果として人を益します**。もし私達の行いや言葉の結果が人を神に近づけないものであれば、私達は偽善者、偽教師、偽キリストとなっている可能性があります。**聖霊**を通して学ぶ教えは**必ず人と自分を神に近づけるのです**。

「それゆえ，**真理の御霊によって**御言葉を受ける者は，真理の御霊によって宣べられるままにそれを受けるということを，あなたがたが理解して知ることができないのはなぜか。それゆえ，**説く者と受ける者が互いに理解し合い，両者ともに教化されて，ともに喜ぶ**のである。また，人を教化しないものは，神から出てはおらず，暗闇である。神から出ているものは光である。光を受け，神のうちにいつもいる者は，さらに光を受ける。そして，その光はますます輝きを増してついには真昼となる。」（教義と聖約 50：21-24）

そのため私達が聖霊からの教えを受ける訓練を受けることは何よりも重要です。私達はバプテスマを受けた時に「**聖霊の賜物**」を受けます。これは言ってみれば常に聖霊を伴侶とすることができる資格です。しかし、聖霊から教えを学ぶには段階に段階、訓練に訓練を重ねる必要があります。そこまで到達しなければ聖霊から教えを受けられないという意味ではありません。前にも説明したように救いの計画には 101，201，301・・・とはるかに高いところまでレベルがあるのです。そのレベルごとに聖霊を通して私達は教えられます。祈りを通してモルモン書が真実であるかどうかを知ることができるというモロナイの約束[30]は、その最初の入口です。

イエス様は末日の聖徒がその訓練を受けて成長し、前世で自分に与えられた使命を思い出せるように訓練する道具を備えてくださいました。それがイザヤ書であり、ヨハネの黙示録であり、そして「**アブラハム書**」です。

モルモン書を除いては、アブラハム書ほど教会に反対する人たちの格好の的になっている聖典はありません。ジョセフの殉教によってアブラハム書の出版は中途半端に終っており、なおかつ、ジョセフが翻訳の元にしたとされているミイラに付いていた死者の書には現在私達が持つアブラハム書の一文さえ書かれていないことが、古代エジプト語を読める人たちによって証明されています。またこのミイラに付いていた巻物をジョセフが部屋にこもって初めて翻訳を試みた時、その中に「アブラハムが記したものが含まれていることを発見した」と発表しました。ところがその断片は 1966 年にニューヨークのメトロポリタン美術館で発見され、分析の結果、およそ紀元前 100 年から紀元 100 年ほどの間のものであることが判明したのです。このことから、ミイラに付いていた「死

[30] モロナイ 10：4-5

者の書」と呼ばれるエジプト特有の宗教記録が紀元前 2000 年位に生きていたアブラハムの書き残したものであるはずがないということで、ジョセフと教会は世界中から批判を浴びることとなりました。

しかしジョセフは「死者の書」そのものがアブラハムが書いたものとは言わず、「アブラハムが記したものが含まれている」と言ったのです。それはどういう意味でしょうか。この時のジョセフの状態は、モルモン書の翻訳を終え、教義と聖約を世に出し、新約聖書と旧約聖書の両方の翻訳をほぼ終えていた、言わば「**出来上がった聖見者**」となった状態でした。その意味が理解できる時に、私達はその謎を解き明かすことができ、その謎の解き明かしから更にその向こうにある末日の聖徒として、自分の存在する意味を理解し始めることができます。

教義と聖約 7 章では使徒ヨハネが生きているのか、それとも死んでしまったのかという疑問について主にお伺いをたてた時に、まだ出来上がった聖見者ではなかったジョセフは「補助輪」の役目を果たすウリムとトンミムを使う必要がありました。その時、ジョセフにはあるものが見えてきました。それは 7 章の前書きにこう記されています。

「この啓示は，**ヨハネが羊皮紙に記して自ら隠しておいた記録**の訳文である。」（教義と聖約 7 章前書き）

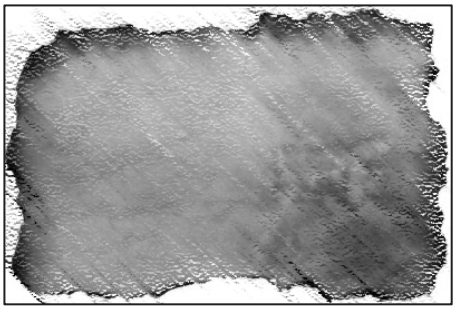


図16　羊の皮を伸ばして作られる羊皮紙

ヨハネが自ら書いた記録ということは紀元 30－100 年位に書かれた可能性があります。ヨハネが黙示録や福音書、そして 3 つの手紙を書いたのも紀元 100 年頃の話[31]です。ヨハネが自ら隠した記録が見つかったという話はこの教会の中でも、世界のどこでも、ニュースとして取り上げられたことはありません。つまり見つかっていないのです。ともすれば、もうこの地上からは失われてしまったのかもしれません。しかしこの時、まだウリムとトンミムを使う必要はあったものの聖見者にはそのオリジナルの羊皮紙が見え、そこに書いてある言葉の理解ができました。

聖書の翻訳も同じです。聖書の中の重要な部分が失われたり、取り去られたりしているのに、元に戻すことができない最大の理由はオリジナルの原稿が存在しないからです。記録の複製が存在するということは、必ず昔はオリジナルが存在していたということで

[31] BYU の古代聖典の学者が調べた調査によると、クリスチャンの間に残された記録によりヨハネの黙示録はパトモス島の流刑から恩赦を受けて開放された後、そこで受けた示現として最初に記したものとされています。そしてその後ヨハネによる福音書、そして 3 つの手紙が書かれたそうです。

すが、それは歴史の中に埋もれ、どこかに隠されたままなのか、燃えてしまったのか、あるいは無くなってしまったのでしょう。ですから古い写本である「死海文書」などの発見がオリジナル原稿ではなく、単なる写本であるにも関わらず大きなニュースとなるのです。

エジプトの宗教である「死者の書」は、紀元前 1500 年～紀元前 1000 年位の古代エジプト新王国時代の後半から死者の棺に入れられるようになった、死後の世界の説明書です。死者がどのようにして黄泉の神であるオシリスに会って、裁判を受けるのかが書かれています。この「死者の書」も、そしてその宗教観も、エジプトの歴史の中で生まれてきたもので、エジプト設立時のときにはまだ存在していませんでした。ですから、おそらくアブラハムがエジプトを訪問した時代には、まだ固定された土着宗教は存在していなかったと思われます。しかしそこにアブラハムという神の道を説明できる神権の正統後継者がエジプトを訪問したのです。アブラハムは王であるパロの招待を受け自分がエジプトに入る前に、神様によって訓練されて受けた教えをパロに説明します[32]。

その教えは驚嘆すべきものであり、当時のエジプト人、特に神権を持っていないのに持っていると公言するようにと先祖から教えられてきた、その時の王にとっては衝撃的な出来事だったことでしょう。おそらくアブラハムはこの時、ウリムとトンミムを通して[33]自分が見せられた示現を図に書いて王に説明したものと思われます。この貴重な教えは当然のごとく当時の王直属の書記官によって記録され、王家の図書館に保管されたと思われます。

しかし、当時はまだヒエログリフの黎明期であり、現在私達が墳墓から見つけることができるような完成されたものではありませんでした。それまで王族や貴族の間でしか部分的に使用されていなかった「死者の書」が、突如完成された形で使用されるようになり始めたのはアブラハムのエジプト訪問から 1000 年も後のことです。おそらく 1000 年前のヒエログリフを、当時の人たちはきちんと読み取ることができずに、単に図形として捉えた可能性があります。非常に興味深いことにジョセフが記録して翻訳した 3 つの模写では、ジョセフはただの一つもヒエログリフの翻訳は行っていないのです。ジョセフが残した 3 つの模写の中で翻訳（説明）されている物（特に死者の書ではないミイラの頭の下に付けられていたヒポケパラス（模写 2 の図形））は、今のエジプト学者も理解することができない古代の図形の部分のみなのです。

---

[32] アブラハム 3：15 および模写 3 参照
[33] アブラハム 3：1 参照

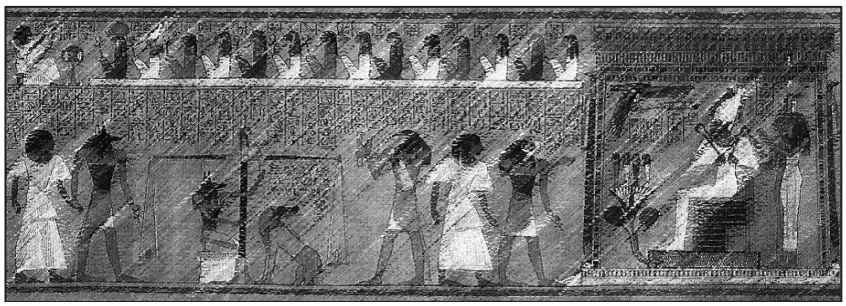


図17　死者の書

一体ジョセフは何を見て、何を翻訳して、「アブラハムが記したものが含まれていることを発見した」と言ったのでしょうか。このことが理解できるとき、私達は「出来上がった聖見者」というものがどういうことなのかを理解することができ、預言者としてのジョセフ・スミスと、聖見者としてのジョセフ・スミスを重ね合わせて、福音の全体像を理解し始めることができるようになります。そのためにジョセフ・スミスが信じていたことと、彼の人生について考えることも大変重要になるわけですが、高価な真珠にはこの部分がカバーできる「ジョセフ・スミス－歴史」と「信仰箇条」が収録されています。

教義と原則

ジョセフ・スミスは回復の業を通して、たくさんのことを「教え」として私達に伝えてくれました。しかしそれは「すべて」を事細かに教えてくれたわけではありません。神様が許される範囲での「すべて」を教えてくれたのです。天のお父様は私達に「**自ら考えて行動する**」ことを求めておられます。それこそがこの地球という学校での訓練になるからです。ジョセフ・スミスは次のように語っています。

「わたしは人々に正しい**原則**を教えて，自らを治めさせます。」（ジョン・テーラー『歴代大管長の教え―ジョセフ・スミス』 284）

ジョセフ・スミスが言う、この原則とは何でしょうか。教会ではよく「教義」と「原則」という言葉が使われます。「教義」とは変わらぬ真理であり、教えです。末日聖徒イエス・キリスト教会で日曜学校やセミナリー、インスティチュートなどで互いに教え合う基本的教義は以下のようなものになります。

神会
救いの計画
イエス・キリストの贖罪
神権時代，背教，回復

預言者と啓示
神権と神権の鍵
儀式と聖約
結婚と家族
戒め

もちろんこの他に細かく分けることもできますが、おおよそこれらのどれかに入る形になります。教会の教義は絶対に変わらない真理ですから人が勝手に作り出すことはできません。これはその人がたとえ教会の中央幹部であっても、たとえ使徒であってもです。**彼らの話を一部だけを切り取って教会の教義だと勘違いする人が多くいます**。それは正しくはありません。私達の使徒は次のように教えておられます。

「過去や現在の教会指導者が語ったことが必ずしもすべて教義となるわけではないことを覚えておく必要があります。教会では一般に，一人の指導者がある特定のときに語ったことは，熟慮されたものではあっても個人的な意見であることが多く，教会の公式な見解あるいは教会全体に対して拘束力を持つ言葉ではないと理解されます。」（D・トッド・クリストファーソン「キリストの教義」『リアホナ』2012 年 5 月号，88）

「教義は大管長会と十二使徒定員会の 15 人全員によって教えられるということです。一人の説教の中の，目立たない段落に隠れているものではありません。」（ニール・L・アンダーセン「信仰の試し」『リアホナ』2012 年 11 月号，41）

私達が教会の教義を勝手に理解しようとしないことは、真理の探求にとても重要です。この基本を間違えてしまうと、サタンの教義を知らぬ間に取り入れることになってしまいます。サタンの教義は一見、真の教義に似ています。それで多くの人が惑わされてしまいます。どんなに良さそうなものでも、どんなにその時代の道徳観や社会通念にあったものであっても、真の教義になることはありません。この偽りの、それでもまるで真実のように思える教義に惑わされないように、ヨハネは自分と共に働く末日の聖徒たちに向けて暗号を使って警告を与えています。

「ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、その数字は六百六十六である。」（黙示録 13：18）

六百六十六は数字で並べると６６６です。ヨハネは黙示録全体で「７」という数字をわざわざ３回使ってシオンが完成する様子を表しています。「７つの封印」「７つのラッパ」「７つの災いの鉢」です。なぜ「わざわざ」と書いたかというと、７つの鉢はすべて７つのラッパの最後のラッパに含まれるので、細かく分ける必要もないのです。しかしこれによって、７７７という並びが出来上がります。ユダヤ人であるヨハネにとって

「７」という数字には特別な意味があります。「７」はユダヤでは「完成」を表します[34]。７７７で末日の聖徒がシオンを築き上げることができる事を、ヨハネを示現を通して見ました。ところがその過程でいかにも真実のように思える教義を信じ、サタンにまどわされて落ちていく聖徒たちも見たのです。

「そして彼（※サタン）は、聖徒に戦いをいどんでこれに**勝つことを許され**、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。」（黙示録 13：7）

ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンも、日の栄光の示現で真理を見誤ってサタンの虜になってしまった末日の聖徒が「滅びの子」、すなわち「サタンの子」となってサタンと共に暗闇に落とされるのを見ています。

「彼（※サタン）は神の聖徒たちに戦いを挑み，彼らを取り囲む。また，わたしたちは，彼と戦って打ち負かされた者たちの苦しみを示現で見た。主の声が次のようにわたしたちに聞こえた。『わたしの力を知り，それにあずかる者とされながら，自らを悪魔の力に打ち負かされるに任せ，また真理を否定し，わたしの力に反抗するに自らを任せたすべての者について，主は次のように言う。すなわち，彼らは滅びの子であり，生まれなかった方が彼らのためによかったとわたしが言う者である。』」（教義と聖約 76：29-32）

何度も言いますが、聖霊からの教えに頼らず、自分や人の考えに惑わされる末日の聖徒は、このようなあたかも真理のような偽の教義に騙されて、自分では正しいと思いながら、決して「７」にはたどり着くことがない「６」への道をたどることになります。せっかく神の真実の教会に入り、聖霊から直接教えていただける資格の「聖霊の賜物」を受けたにも関わらず、それを使わなければ、一体教会員になって、何の意味があるのでしょうか。１から始めて６までたどり着き、その先がないことを知ったときの悲しみとはいかに大きいことでしょう。もう一度次のニーファイの言葉に耳を傾けてみてください。

「人に頼る者，すなわち肉を自分の腕とする者はのろわれる。すなわち，**聖霊の力によって与えられる訓戒ではなく，人の訓戒に耳を傾ける者はのろわれる**。」（２ニーファイ 28:31）

---

[34] 人間には指が１０本あるので、人は昔から１０進法という数え方を使ってきました。1，2，3，4，5，6，7，8，9，10 がそれにあたります。10 まで行くと位が一つ上がります。ユダヤ人はこの 1 から１０まで数字がそれぞれお互いに 1 を抜いた掛け算とわり算で関係しあっていることに気が付きました。たとえば 2X3＝6，2X4＝8，2X5＝10，3X3＝9 といった感じです。しかし、7 だけはどの数字とも関連がないため、7 はその存在だけで「完成」していると考えるようになったのです。

教義は変わらぬ真理であり、教えです。そしてその教義を実際にどのように理解し、実行に移すのかを説明したものが「原則」と呼ばれます。たとえば「神会」という教義の原則の一つとして「祈り」があります。神会があるからこそ、私達はイエス・キリストの御名を通して天のお父様に祈ることができ、天のお父様からの応えを聖霊を通して受けることができるという原則が存在します。しかしジョセフ・スミスが「わたしは人々に正しい原則を教えて，自らを治めさせます。」と教えたように、私達は一日に何回祈るべきだとか、特定の場所で祈らなければならないだとかは指示されません。教義と原則を理解した後は、「自ら考えて行う」ことが必要になります。これが訓練と呼ばれるものです。パウロはこの訓練について次の言葉を残しています。

「すべての訓練は、当座は、喜ばしいものとは思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、**平安な義の実を結ばせるようになる**。」（ヘブル 12：11）

末日の聖徒はこの「平和の義の実」を結ばせる者たちです。それによって周りの人々に良い影響を与え、その地を聖めることができるようになります。

神様のご計画とジョセフをはじめとする多くの初期の聖徒たちの努力によって、今私達にはシオンに向けて必要なすべての道具が揃いました。これが「回復の業」です。ここから世の終わりと、新しい世界に向けての「驚くべき不思議な業」が始まりました。

5 章：約束の地

世の中では時々、多くの人が「なぜイスラエルから始まったキリスト教を、さも自分たちの宗教のように信じるのだろう？」と考えることがあるようです。末日聖徒イエス・キリスト教会に関して言えば、街で見かける外国人宣教師を見て「アメリカの宗教」と考えている方も多いようです。確かに回復の業が始まったのはアメリカ大陸。リーハイやニーファイ、ヤレドの民がいたのもアメリカ大陸。不思議とアメリカがやたら関連していると思いませんか？　実はその謎を解くと神様の偉大な計画の凄さが少しずつ見えてくるようになります。

アメリカ大陸という特別な場所

すでに説明したようにアメリカ大陸が発見されたのは、つい最近のことです。もし今が末日と呼ばれる人類の歴史の最終場面であるのなら、神様はアメリカ大陸を最後まで隠しておられたということになります。しかし、なぜ？　アメリカがそれほど特別な場所なのでしょうか。いや、逆にもし、アメリカが特別な場所だからこそ、最後までとっておかれたとしたら・・・。そこには必ず理由が存在するはずです。

ここに一つのヒントとなる聖句があります。ニーファイたちがアメリカ大陸に着いた時、その地は約束の地であり、神様はこの場所を特別な呼び方で呼ばれていました。

「あなたがたは，わたしの命令を守るかぎり栄えて，**約束の地**に導かれるであろう。まことにそこは，あなたがたのためにわたしが備えた地であって，それはまことに，**ほかのあらゆる地に勝ったえり抜きの地**である。」（1 ニーファイ 2：20）

つまり、神様が予め準備されていた地上のどの土地よりも、良い選びとなる場所ということです。一体何がそうさせたのでしょう。そして何のために。

よく考えてみてください。初めにこの土地は私達の知る限り、誰も住んでいなかったはずです。そこに最初にヤレドの民が連れて来られ、そしてリーハイの家族が来て、その後にはミュレクの民も来ています。でももしかして、その前にこの地に何かがあったのではないでしょうか。主が教義と聖約の 57 章で、シオンの場所についての啓示を下された時、同時にジョセフ・スミスに、ある特別な情報をもたらされました。残念なことにこの時の啓示は公式には記録されておらず、ジョセフの記憶の中だけに残ることになったようです。彼がその情報を当時の指導者たちに伝えたという記録がいくつかの文献に見受けられます。

「ブリガム・ヤング：『預言者であるジョセフは私に**エデンの園**はミズーリ州ジャクソン郡にあったと教えてくれました。』[35]」

「ヒーバー・C・キンボール：『ジョセフは主から、アダムがアメリカの地に住んでいた事を学びました。そして**エデンの園**は今のミズーリ州ジャクソン郡にあったのだと。』[36]」

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は次のように述べておられます。

「ジョセフ・スミスの与えられたいくつもの啓示によれば、**エデンの園はアメリカ大陸のシオンの市ができる場所、新エルサレムを私達が建てる場所にあった**と教えています。アダムとエバはその園から追い出された後、現在ミズーリ州デイビス郡と呼ばれているアダム・オンダイ・アーマンという場所に住みました。・・・私達はこのアダムがアメリカ大陸に住んでいたということを事実として受け止めています。[37]」

つまり、天のお父様とイエス様が人類の歴史を始められた場所こそ、アメリカ大陸であり、私達がシオンを立てようとする場所こそが、その場所であるということです。ということはかつてシオンができた場所もエノクが住んでいた土地であり、彼がアダムに会うことのできる距離の場所であったわけですから、おそらく同じ場所なのでしょう。つまり、**最初からこの場所が神様の聖別された土地であり、最初から私達が末日にシオンを築く事が計画されていた場所**ということです。

しかし、ということはこのアメリカ大陸にはもともとアダムの時代から人が住んでいたということになります。でもヤレドの民が来たときには誰もいなかったはずです。一体いつ、このアメリカ大陸から人がいなくなったのでしょうか。そのことについて黙示録には大変興味深いことが書いてあります。

「しかし、女は自分の場所である荒野に飛んで行くために、大きなわしの二つの翼を与えられた。そしてそこでへびからのがれて、一年、二年、また、半年の間、養われることになっていた。 へびは女の後に水を川のように[38]、口から吐き出して、女をおし流そ

[35] Journal of Wilford Woodruff, vol. 5, 15 Mar. 1857, Archives Division, Church Historical Dept., Salt Lake City.
[36] Andrew Jenson, Historical Record, 9 vols., Salt Lake City: Andrew Jenson, 1888, 7:439; see also Orson F. Whitney, Life of Heber C. Kimball, Salt Lake City: Bookcraft, 1967, p. 219.
[37] Doctrines of Salvation, 3 vols., comp. Bruce R. McConkie, Salt Lake City:Bookcraft, 1956, 3:74. Compare Answers to Gospel Questions, 5 vols., Salt Lake City: Deseret Book Co., 1957–75, 2:93–95, 4:19–24; and Alvin R. Dyer, in Conference Report, Oct. 1968, pp. 108–9.)

[38] 英語では「洪水のように」

うとした。 しかし、地は女を助けた。すなわち、地はその口を開いて、龍が口から吐き出した川を飲みほした。」（黙示録 12：14-16）

ジョセフ・スミスの説明によれば、女は神の教会でした。大背教で追いやられてしまった真の神の教会は、神様が準備してくださったわしの二つの大きな翼によって逃れることができ、そこでしばらく時期を待つことができたのです。ヨハネは続けてその二つの翼がどのようにしてできたかを説明しました。サタンであるへびが、口から吐き出した水は川（※英語では**洪水**）のように地を埋め尽くしました。しかしやがて地はその水を飲み込んで再び地面が現れたというのです。

ここでもう一つこのことに関連すると思われる聖句を教義と聖約から読んでみましょう。この聖句には末日の最後に起こることが書かれています。

「彼が大いなる深みに命じると，それは北の地方へ退き，島々が**一つの地となる**。エルサレムの地とシオンの地は，それぞれの所に戻り，陸地はそれが**分けられる前の時代のようになる**。」（教義と聖約 133：23-24）

この 2 つの聖句からある状況が浮かび上がってきます。アダムとエバが作られた時、この地球には大陸は一つしかありませんでした。しかし人々が悪に染まり始めた時、神様は人間を地上から一掃されます。ノアの時の大洪水です。ノアとその家族は方舟で 40 日間降り続いた雨のあと、水が引くのを待って、やっと地に降り立つことができたのは約 5 ヶ月後でした。その間ずっと水の上でしたから、その時に水面のはるか下にある地面で人類が経験したことがない陸地の大移動が起こっていたとしても気づくことはまずなかったでしょう。5 ヶ月間も漂流したわけですから、到着した場所に見覚えがなくても全く気にならなかったと思います。しかし実際には洪水前には一つしかなかった大陸は、洪水の最中にバラバラに分かれ、その中でも先祖が住んだエデンのあった聖なる土地は、わしの翼の形に切り取られて他の土地からはるか離れた場所に置かれてしまったのです。

図 18　わしの翼の国

この誰も知るはずのない、わしの翼の大陸に、そして将来その土地から起こるであろう異邦人、すなわち末日の聖徒に向けて、はるか 2500 年前にイスラエルのユダ王国から挨拶を送った人物がいます。イザヤという預言者は、わしの翼の形をした国を、アフリカのはるか海を超えた向こうに見つけます。そしてそこにシオンが出来上がる直前に、ある特別な人々が集まるのを見ます。その地に合図の旗がなびいた時、その人達は神様からの命令を受けて動き始め、やがてシオンが出来上がるという予言です。その予言はイザヤ書 18 章に書いてあります。ただ、日本語でも英語でもイザヤ書の原語からの翻訳はむずかしく、本来のイザヤの預言を完全に翻訳することはできません。日本語と英語でも表現が異なります。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長の話[39]を元に、説明を加えながらイザヤ書 18 章を**末日の聖徒について書かれたものとして**読んでみましょう。

「ああ、 エチオピヤの川々のかなたなる ぶんぶんと羽音のする国、 この国は葦の船を水にうかべ、 ナイル川によって使者をつかわす。 とく走る使者よ、行け。 川々の分れる国の、たけ高く、膚のなめらかな民、 遠近に恐れられる民、力強く、戦いに勝つ民へ行け。 すべて世におるもの、地に住むものよ、 山の上に旗の立つときは見よ、 ラッパの鳴りひびくときは聞け。	アフリカの海を超えたはるか彼方のわしの翼の形をした国に私イザヤが挨拶を送る。 この国から世界に主がしもべらをつかわされる。 高潔で、力強く、負けない人々よ、主の回復の合図である「旗」を見、ラッパの音を聞いたなら行動を起こし始めなさい。
主はわたしにこう言われた、 「晴れわたった日光の熱のように、 刈入れの熱むして露の多い雲のように、 わたしは静かにわたしのすまいから、 ながめよう」。	あなた方がどのような働きをするのかを、主はそのすまいから静かにながめておられます。
刈入れの前、花は過ぎて その花がぶどうとなって熟すとき、 彼はかまをもって、つるを刈り、枝を切り去る。 彼らはみな山の猛禽と、 地の獣とに捨て置かれる。 猛禽はその上で夏を過ごし、 地の獣はみなその上で冬を過ごす。	あなた方の働きが実る時、悪人とサタンらは刈り取られて、集められ、そして捨てられます。誰も猛獣に手が出せないように、誰も彼らを助けるものはないでしょう。

[39] *The Signs of the Times* [1952], 51 参照

その時、
川々の分れる国の
たけ高く、膚のなめらかな民、
遠くの者にも近くの者にも恐れられる民、
力強く、戦いに勝つ民から
万軍の主にささげる贈り物を携えて、
万軍の主のみ名のある所、シオンの山に来る。」
（イザヤ 18 章）

その最後の時に、高潔で、力強く、負けない人々によって主をお迎えする準備が整い、その場所はシオンとなって、主イエス・キリストがおいでになるのです。

イザヤ書は幾通りもの方法で読む事ができるので、簡単には口語訳にすることはできないのですが、例えばこれがスミス大管長の言われるように末日の聖徒に向けて書かれたものと仮定して読むのであれば、このような解釈もできるのではないかと思われます。つまり、イザヤは神様の計画が実行される時に、このノアの洪水によって別れたわしの翼の形をした国から回復の驚くべき業が始まると予言しているのです。

ニーファイたちが来るべくしてたどり着いた土地

ジョセフ・スミスが生まれるはるか前に、ニーファイの家族は主に導かれてこの地にやってきました。彼らが来なければ記録は生まれず、金版が作られることもなく、ジョセフとその家族に聖書以外の神様からのリソースは何ももたらされなかったのかもしれません。しかし神様のご計画はニーファイやヤレドの民をこの地に導くため、世界の形を変えるところから始まっていた可能性があるのです。

ニーファイが船を作ってアメリカ大陸に渡ったことは、モルモン書から読み取ることができます。おそらくニーファイは生まれて初めて船を作ったのだと思われます。しかも神様が指示されたその作り方は、人が作る方法とは違っていたと記録されています[40]。そしてニーファイたちが船を出した時、船は「約束の地に向かって追い風に吹かれて進んだ。」と書いてあります[41]。船の作り方は神様から教えてもらいましたが、ニーファイはどうやって航海術を学んだのでしょうか？　ニーファイが船出したのは大航海時代によりもはるか昔です。ヤレドの民にいたっては、それよりもずっと昔で、彼らがどこから船出したのかもわかっていません。ニーファイの船や、ヤレドの民の船に帆が着いていたかどうかさも私達は知りません。なのにどうやって恐ろしい大海を超えて、アメリカの地に彼らはたどり着いたのでしょうか。もし神様がこのことまで計画されて世界の形を変えられたのであれば、私達は真剣にこの不思議について考えるべきではないで

[40] 1 ニーファイ 18：2
[41] 1 ニーファイ 18：8

しょうか。それを考えるための一つの助けとしての仮説になりますが、次のようにも考えることもできます。

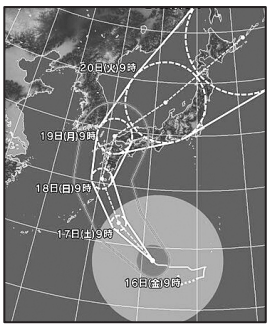


図19　台風の進路

日本には毎年春から秋にかけて台風がやってきます。南太平洋の中心辺りで発生した台風は次第に勢力を増して西向きに動いて日本に近づきます。そして北緯30度を超えるあたりから進行方向を東向きに変えて進みます。毎年天気図で見ることのできる台風の進路ですが、なぜ台風がこのように進むのかと言うと、地球の自転と大気の循環によって起こる貿易風と偏西風によって台風はその進行方向を変えて進むのです。

この風向きによって影響を受けるのは台風だけではありません。地球全体をこの貿易風と偏西風がそれぞれ逆の方向で進んで吹くのですから、最も影響を受けやすいのは海の水になります。深度400メートル深くまでの水が、この風の影響で一定方向にかき回されます。そうして出来上がる水の流れが「海流」です。地球上の風向きが常に同じですので、海流の向きも常に同じになります。北半球では基本的に時計回り、南半球ではその逆になります。

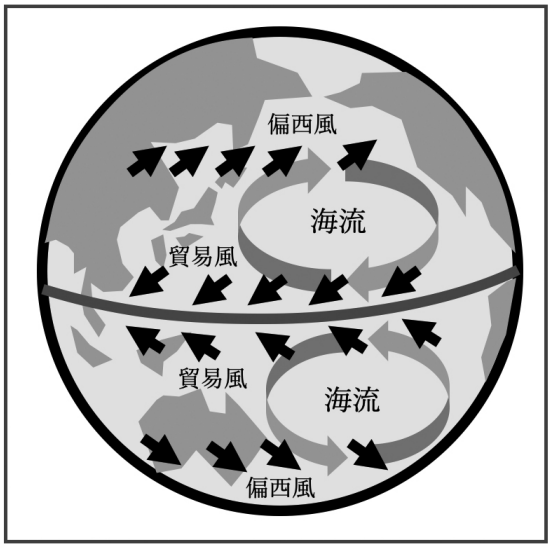


図20　風と海流

さて、ここに世界地図を当てはめてみると面白いことがわかります。陸地の場所の形によっては、海流が閉じ込められて独特の水の流れる方向をそれぞれの湾や海が持つようになります。ニーファイの記録から彼らはエルサレムを出たあと、紅海に沿ってリアホナの指示通りに南南東[42]へ進みました。ところがある程度アラビア半島を南に下ると行き先を東に変えて[43]海岸にたどり着き、その場所をバウンティフルと名付けます。海岸でしたので、作った船はすぐに海に乗り出すことができました。ニーファイはおそらく海流があることを、そしてその海流が風と共に同じ方向へ動くことを、詳しくは知らなかったかもしれません。しかし、船を出した時、漕いでもいない船が勝手に進んだので、ニーファイは「約束の地に向かって追い風に吹かれて進んだ」と感じたのです。広大な水の上ですから、たとえ曲がりくねった水路をたどって進んだとしてもニーファイには常に追い風があって、約束の地まで真っ直ぐ進んだ

[42] 1ニーファイ16：13
[43] 1ニーファイ17：1

ように感じたのだと思います。それもそのはず、貿易風と偏西風、そして世界の地図と海流をニーファイの進路にあてがうと、船はアラビア半島の南端から自然にアメリカ大陸に着くようにできているのです。それを証明するかのように、そのわずか数年後に出発したミュレクの民も、同じようにアメリカ大陸に到着し、ニーファイたちの住んだ土地の近くにゼラヘムラという都市を作って定住していました。

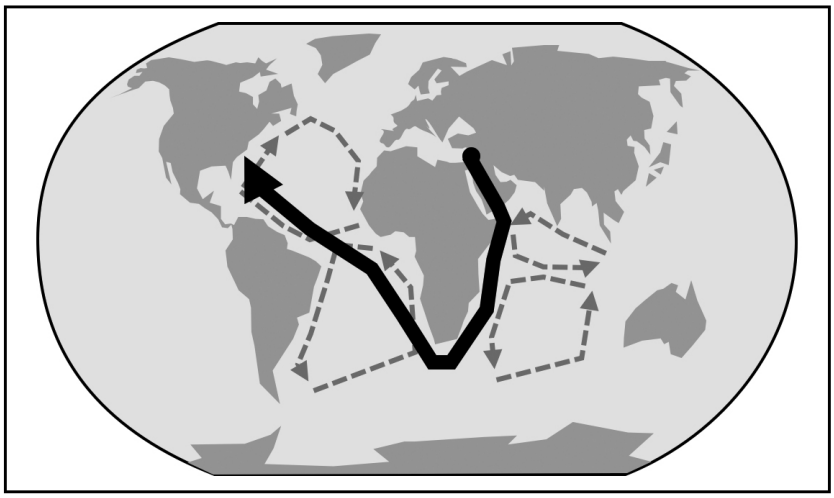


図21　海流とニーファイたちの旅（仮説）

これらが偶然ではなく、ノアの大洪水の時に聖なる地を人々から隠し、末日になるまで神様の真の福音がこの地球上に残るように、神様が特別な使命を帯びた人々をまだ航海術の発達していない時代に無事に約束の聖なる地へたどり着けるように、この世界の形を風と海の流れに合わせて変えていたとしたら、私達は末日の最後の偉大な業のために神様が作られた地球規模の大計画の中に立つ自分たちの使命とその意味を、どんな事をしても見出す必要があるのではないでしょうか。よくよく思い出してみてください。ヨハネが黙示録の中で見たのは女である神の教会、すなわち真理、永遠の福音は荒野である大背教の最中、二つのわしの翼の形をした特別な場所でかくまわれました。大背教のときだけではありません。ノアの洪水の後再び人が悪に染まり始めた時、神のことを知っているはずの人々がエジプトで奴隷になって真理を忘れかけていた時、カナンの地に着いても神に従おうとする人々がほとんどいなかった時、モーセの律法を自分勝手に解釈し始めた時代でさえ、この**アメリカ大陸にだけは真の福音がヤレドの民、ニーファイの民、そして金版という変わることのできない記録によってこの地に残され続けた**のです。さらに言うのなら、アダムの時代から末日に至るまで、過去6000年の人類の歴史の中でイエス・キリストの真の福音が常に存在していたのは、世界中で今このアメリカがある土地だけなのです。

ヤレドの兄弟と封印された記録

モルモンの記録よればアメリカ大陸では重要な民の記録が一つの責任として王や預言者に引き継がれてきたので、モロナイが最後の記録を地に埋めるまで、聖書のような書き変えや貴重な部分の損失がありませんでした。その意味でもアメリカという場所が他の世界から別れていたことは重要です。その中で**私達が知っておかなければならない一つの記録の存在があります**。金版はまだすべてが翻訳されてはいないのです。金版を見たデビット・ホイットマーの証言にはこうあります。

「証人の一人の話では，『書物のおよそ半分』が，開けられないように**固く封じられて**いました。この封じられた部分は，ページを離してめくることができず，『木のように固く見えた』と言います。」（David Whitmer, Interview by P. Wilhelm Poulson, Deseret Evening News, Aug. 16, 1878, in Lyndon W. Cook, David Whitmer Interviews: A Restoration Witness (Orem, Utah: Grandin Book Company, 1991), 20–21）

モロナイはジョセフが封じられていない部分、すなわち私達が持っているモルモン書の部分を翻訳した後、そのまま金版を受けとって持って行きました。ジョセフは次のように説明しています。

「そして，前もって定められたとおり，使者がそれらを取りに来られたとき，わたしはそれらを使者に引き渡したのである。そして，千八百三十八年五月二日の今日まで，その使者がそれらを管理しておられる。」（ジョセフ・スミス－歴史 1：60）

つまり、今日私達の時代に至るまで、この封じられた部分は翻訳されることがなくモロナイが持ち続けているというのです。

一体この封じられた記録には何が書かれているのでしょう。イザヤがある面白い言葉を残しています。

「その日、耳しいは**書物の言葉を聞き**、目しいの目はその暗やみから、**見ることができる**。 柔和な者は主によって新たなる喜びを得、人のなかの貧しい者はイスラエルの聖者によって楽しみを得る。 あらぶる者は絶え、あざける者はうせ、悪を行おうと、おりをうかがう者は、ことごとく断ち滅ぼされるからである。」（イザヤ 29：18-20）

イザヤはある特定の日が来ると、誰かが書物を読み、柔和な人々はそれを聞いて喜び、悪人は滅びると話しています。一体何の書物なのか。このイザヤ書 29 章を大変わかりやすく説明してくれた預言者がニーファイです。ニーファイはたくさんのイザヤ書を小版に書き写しましたが、この 29 章についてだけは今日私達が持っている聖書とは大変異なる書き方をしています。それは元々のイザヤ書がそのように書いてあったのか、そ

れともニーファイがわたしたちにわかりやすいように書き直してくれたのかはわかりません。しかし、彼によってこの記録の意味がより鮮明に理解できるようになっています。この記録にはいくつかの特徴があるとニーファイは言っています。第二ニーファイ書の 27 章から拾ってみましょう。

●その書物にはすでにこの世を去った人たちの言葉が載っている。（6 節）
●その記録は封じられている、（7 節）
●その記録には世の初めから終わりまでの神からの啓示が載っている。（7、10 節）
●その記録は民が悪事にふけっている時代には人々から隠される。（8 節）
●その記録は一人の男に授けられるが封じられている部分は授けられない。（9-10 節）
●その記録はやがて屋根の上で読まれる。（11 節）
●その記録はキリストの力によって読まれる。（11 節）
●その記録によって人々の行いのすべてが明かされる。（11 節）
●その記録を授けられる男以外に三人の証人が見る。（12 節）
●学者がその記録を読もうとするが、封じられていると知って諦める。（15－18 節）
●その記録を最初に授けられる男は無学であるが、読む力を与えられる。しかし、封じられている部分には触れられない。（19－21 節）
●その記録は再び封じられて神の手に託される。（22 節）
●その記録は神の知恵にかなう時まで保管される。（22 節）
●その記録が読まれる時、義人たちは喜ぶ。（29 節）

この説明から教会員であれば、すぐにこれがモルモン書の元となった金版の話であることが分かると思います。しかし、イザヤとニーファイは明らかにここで 2 種類の記録について話しています。一つは一人の無学な男、すなわちジョセフ・スミスによって読まれて世に公表されますが、もうひとつはジョセフ・スミスにも触れることが許可されずに再び神の手によって保管され、時が来るまで封じられ続けるというのです。しかも三人の証人はその記録の中身ではありませんが、全体を見ることが許されているというのです。先程、三人の見証者の一人であったデビット・ホイットマーが金版を見た時、「およそ半分は固く封じてあった」と説明したのを思い出してください。

つまりこの話をまとめると、金版には大きく 2 つの目的があると思われます。一つは歴史のある時点で一度地面の中から掘り出され、回復の旗印としてイエス・キリストの真の福音を回復するためにジョセフ・スミスによって翻訳されてモルモン書となります。しかし、封じられている部分もあって、それは再び神の手に託され、神の知恵がかなうある特別な日まで保管され、ついにその日に開かれて、屋根の上、すなわち誰もが聞けるように全世界に向けて読まれます。そこには世の初めから、世の終わりまでの神の啓

示と、すべての人の行いが書かれていて、それを聞く義人は喜びを得、悪人は滅ぼされるということではないでしょうか？

この記録はどこから来て、だれが書いたのでしょうか？モルモン書を読む限り、（私達はリーハイ書を持っていないので）モルモンが封じた部分について説明を書いていたかどうかはわかりませんが、モルモン本人の記録は明らかにエルサレムを出たリーハイから始まって、1000 年間の記録を書きつづり、モルモン 7 章で終わってしまっています。ですので封じた部分がもし金版と同じくらい（あるいはそれ以上）のページ数があるとすればそれは間違いなく、ニーファイ人の記録とは別に封じなければならないほどのなにか重要なことが書いてあるはずです。

ヨハネと同じくこの世の終わりまでを見たであろうニーファイは次のような言葉を書き残しています。

「見よ，わたしの愛する同胞よ，あなたがたに言っておく。主なる神は**暗闇の中で業を行うようなことはなさらない**。・・・主は人の子らの中で，ためになることを行われるからである。また主は，人の子らにとって分かりやすいことでなければ，何事も行われない。そして主は，御自分のもとに来て主の慈しみにあずかるように，すべての人を招かれる。したがって主は，黒人も白人も，束縛された者も自由な者も，男も女も，主のもとに来る者を決して拒まれない。主は異教徒さえも心にかけられる。ユダヤ人も異邦人も，**すべての人が神にとって等しい存在なのである**。」（2 ニーファイ 26：23，33）

この話の直後にニーファイは封じられた書物の話をイザヤ書から引用して書いています。もし仮にこの話と封じられた書物が関係しているとしたら、どうでしょうか。
主はすべての人のことを心にかけられ、すべての人が神にとって等しい存在です。「神様はその人達に向かって、隠れて暗闇の中で業を行うようなことはなさらない」と、ニーファイは説明しています。もし、私達が救いの計画 101 で学んだように、この世が学校であったとしたら、入学の後からルールが作られ、テストの後から答えが準備され、勉強の後から律法が作られていたら、それは私達にとって「公平」と呼べる学校でしょうか。暗闇の中で業を行われない神様は、この学校を作るにあたって、予めルールやテストの答えを準備されていて、それを人類の歴史の最初の時点で人に説明して記録させ、封じて、**最後の答え合わせ**のその日まで保管されているとしたら・・・。回復にあたって人類にそのような記録が存在することを教えるために、ジョセフと三人の証人がその部分を見たのであれば、私達はその書物が読まれる日に備える必要があるのではないでしょうか？

では神に命じられてその記録を書いたのは誰でしょうか？人類の歴史からすればアダムがもっとも適任だと思われますが、ノア以前の記録はほぼ洪水で消えたと思われます。

ですので、神様は神権の系統でさえ、ノア以降にアブラハムを基[44]として、そこからリセットとして再び人類と契約を交わされたのです。ではノア以降に、あるいは大洪水の後でこの全人類に関わる記録を書いた人が存在するのでしょうか？

モルモン書の中にはある不思議な書物が存在します。それはエテル書です。エテル書はおそらくモロナイの当初の考えでは付け足す予定ではなかったか、あるいは付け足す予定ではあったものの、かなり内容を削る必要があったと思われる書物です。あるいはそれを書くはずだった父モルモンの意思を継いだのかもしれません[45]。モロナイは父モルモンから金版を受け取ったとき、残りの空白ページが「わずか」しかなかったと記録しています。

「見よ，わたしモロナイは父モルモンの記録を書き上げる。見よ，わたしが書く事柄は**わずか**であり，それは父から指示されたものである・・・見よ，父はこの記録を作り，この記録の目的を書いた。そしてまことに，わたしも版に余地があればそれを書きたいが，**その余地はない**。また，あらがねもない」（モルモン 8：1，5）

日本語のモルモン書は全部で 745 ページ。そのうちモロナイが書いた部分は 73 ページ。全体の約 10%になりますが、リーハイ書がもっと長い歴史だったとも考えられるので、モロナイが見た余白は全体から見れば「わずか」だったのかもしれません。モロナイはモルモンに託されたモルモン書[46]をたった 2 章で切り上げて、無理やりニーフィ人の歴史よりも長いヤレドの民の歴史を書き込んでいます。しかも書いた内容について次のように書いています。

「しかし見よ，わたしが記すのはすべての話ではない。塔のときから彼らが滅びるときまで，**話の一部のみ**を記す。」（エテル 1：5）

モロナイ自身が全てではなく話の一部のみと言っているので、エテル書はほとんどが系図の羅列になり、たった 15 章で約 2000 年[47]に渡る歴史を終えています。ほとんどが系図ですので読み手にとっても、あまりおもしろい書物とは言えません。モロナイが命懸けで、しかも追われる身でありながら金版に文字を彫るという難しい作業を、無駄なことのために続けたとも考えにくいのです。「わずか」な余白に記録し、それを最後の歴史の部分まで書きつないだということは、そこには何かとても重要な目的があったと推察されます。ここでそれについて考えられる重要なポイントを 2 つあげてみます。

---

[44] アブラハム 2：9 参照
[45] モーサヤ 28：19 参照
[46] 本のことでなく第四ニーファイ書の後に続く「モルモン書」のこと
[47] ニーファイ人の歴史は約 1000 年間

まず一つは、エテル書と言えば誰もが記憶している、ヤレドの兄弟が透明な石を溶かし出して作り、主がそれに触れられると光り出したという話です。系図以外にはさして重要な話は残されておらず、この話だけがかなり詳細に記されています。ということは、この話に何かが隠されているのではないでしょうか。そしてもう一つは、長々と最後の1人の名前まできっちりと書き連ねられた系図と、詳細に記されたその話がどのようにつながるのか、なぜそれが重要なのかという点です。

そもそも、この書のオリジナル原稿となったのはヤレド人最後の預言者であるエテルが24枚の純金の版に書き残した記録です。それはリムハイの民から父祖モーサヤの手に渡り翻訳されたそうです[48]。この記録にはアダムの時から最後のヤレド人の生き残りとなったコリアンタマーのことまでが書いてありました。ここで覚えておいてもらいたいのは彼らの記録にはアダムからのことが載っていたということです[49]。ニーファイ人の記録にはアダムのことは載ってはいますが、あくまでも真鍮板から読み取った内容で、そのものが書かれているわけではありません。ここで注目してもらいたいのは封じられた書物には世の初め、すなわちアダムのときからのことが載っているとニーファイが書き残していることです。ではエテル書が「封じられた書物」なのでしょうか？それも違います。ニーファイは「その書は再び封じられる」と書き残しているので、エテル書が私達の手元にある以上、それらが同じ記録ではないはずです。

このエテル書を書くにあたってモロナイは**非常に**興味深いことを書き残しています。

「その後，彼らは皆不信仰に陥り，今はレーマン人のほかにはだれもいない。そして，レーマン人もキリストの福音を拒んだので，わたしは**その記録を再び地の中に隠すように**命じられている。見よ，わたしは，**ヤレドの兄弟が見たとおりのことをこの版に書き記した**。ヤレドの兄弟に明らかにされたこと以上に大いなることは，いまだかつて明らかにされたことがない。そこで主はわたしに，それらのことを書き記すように命じられた。そして，わたしは**それを書き記した**。すると，主はわたしに，**それを封じるように命じられた**。また，主がその解訳も封じるようにと命じられたので，わたしは主の命じられたとおりに**解訳器も封じた**。」（エテル4：3-6）

これはエテルの4章なのでエテル書自体はまだこの後10章も続きます。しかしモロナイはこの時点で、すでにある記録を「書き記した」と過去形で話しています。そして解訳器と共にそれを封じたと。つまりこの時点で封じられた書物が出来上がっていると話しているのです。しかもその内容について「ヤレドの兄弟が見たとおりのこと」と言及しています。ヤレドの兄弟が見たことは「それ以上に大いなることはない」ほどのこと

[48] モーサヤ28：11-18
[49] エテル1：3－4参照

だったそうですが、私達が持つエテル書によれば石が光った話しか思い浮かびません。確かにそれもすごい話ではありますが、それ以上に大いなることはないと言うほどでもないような気がします。モロナイは更にヒントをくれています。

「また，主の指を見た後，ヤレドの兄弟には信仰によって得た約束があったので，主は彼の目から何も隠すことがおできにならなかった。そこで，主は彼に**すべて**のものをお見せになった。彼はもはや幕の外側にとどめられなかったからである。」（エテル 12：21）

実はあの石が光りだした出来事の後、ヤレドの兄弟はその信仰によって「すべて」、すなわちアダムの創造からこの世の終わりまでの全部を見ています。この部分を押さえてもう一度石の話の直後を読んでいくと意味が繋がり始めます。

「さて，主はヤレドの兄弟に言われた。『見よ，わたしが肉にあってわたしの名に栄光を受ける時が来るまで，あなたは見聞きしたこれらのことを，世の人々に公にしてはならない。あなたは見聞きしたことを心に留めておき，だれにもそれを知らせてはならない。 見よ，あなたはわたしのもとに来るとき，**これらのことを書き記し，それを封じて**，だれもこれらのことを解釈できないようにしなさい。あなたは人々が読めない言語でこれらのことを書き記すので，だれも読むことができない。見よ，**これらの二つの石をあなたに与えよう。あなたは書き記すこととともに，これらの石も封じなさい**。』」（エテル 3：21-23）

主はヤレドの兄弟に、彼にお見せになったすべてのことを記録するように命じられました。そしてこの時、解訳器であるウリムとトンミムも与えたのです。ヤレドの民は言葉が乱されなかった[50]ので、おそらくはアダム語を話し続けていたものと思われます。そのため、その言葉をウリムとトンミムを使って翻訳したモロナイは、その言葉の凄さに驚嘆し、自分の言葉の力との差を嘆いています。

「わたしは主に言った。『主よ，わたしたちの物を書き記す力が弱いので，異邦人はこれらのことをあざけるでしょう。主よ，あなたはわたしたちを，信仰によって言葉に力のある者とされましたが，物を書き記す力のある者とはされませんでした。あなたはこの民に聖霊をお授けになり，聖霊のためにすべての者が大いに語れるようにされました。また，わたしたちの手が不器用であったために，わたしたちがわずかしか書けないようにされました。まことに，あなたはわたしたちを，**ヤレドの兄弟のように物を書き記す力のある者とはされませんでした。あなたはヤレドの兄弟を物を書き記す力のある者とされたので，彼の書き記したことはあなた御自身のように力強く，それを読**

[50] エテル 1：37 参照

む者を圧倒するほどのものとなりました。あなたはまた，わたしたちの言葉を力強くまた大いなるものとし，わたしたちがそれを書き記せないほどのものとされました。そのため，わたしたちは書き記すときに，わたしたちの弱さを知り，またわたしたちの言葉の用法を誤ってしまいます。ですから，異邦人がわたしたちの言葉をあざけるのではないかと心配です。』」（エテル 12:23-25）

ところでモロナイはなぜ封じてあるはずのヤレドの兄弟の記録を見ることができたのでしょうか？その答えはエテル 3：21 に書いてある「わたしが肉にあってわたしの名に栄光を受ける時が来るまで」にあります。これはイエス様が肉体を持ってこの世に来られて復活するまで封じなさいという意味です。24 枚の純金の版からこのことを事前に知ったモーサヤ王（初代）は封じられた書物を何らかの方法で受け取った時、それをキリストの復活まで開かないようにと子孫に命じました。

「主はヤレドの兄弟に，主の前を去って山を下り，見たことを書き記すように命じられた。しかし，書き記す内容は，主が十字架に上げられる後まで，人の子らに明らかにするのを禁じられた。このためにモーサヤ王は，**キリストが御自分の民に御自身を現わされる後まで，その記録が世の人々に明らかにされることのないように保存した**のであった。」（エテル 4：1）

モーサヤ王はまちがいなく、24 枚の純金の版とは別に封じられた書物を受け取っていました。それは彼が、封じられた記録と一緒に封じられたはずのウリムとトンミムを持っていた[51]ことからわかります。このウリムとトンミムはヤレドの兄弟が主から受け取ったものです。その証拠が教義と聖約に書いてあります。

「見よ，わたしはあなたがたに言う。あなたがたはわたしの言葉に頼らなければならない。あなたがたは誠心誠意そうするならば，版を目にし，また胸当て，ラバンの剣，**ヤレドの兄弟が主と顔と顔を合わせて語ったときに山の上で授けられたウリムとトンミム**，またリーハイが紅海の境の荒れ野にいたときに授かった不思議な指示器も目にするであろう。」（教義と聖約 17：1）

ジョセフ・スミスが受け取ったウリムとトンミムはヤレドの兄弟が授かったものでした。モロナイが持っていたウリムとトンミムはモーサヤ王から代々受け継がれてきたものなので、モーサヤ王が解訳器と封じられた記録を持っていたことがわかります。さらに、イエス様が復活後にニーファイ人を訪れているので、その時に封じられた書物は開かれた可能性があり、モロナイも読むことができたということなのかもしれません。し

[51] モーサヤ 8：13 参照

かし悪がはびこってしまったために、その記録は再びニーファイ人の原語に書き換えられてモロナイの手によって解訳器と共に封じられたということになります。

モルモンは息子が封じたこの記録が再び地上に出てきて、読まれる日が来ることを知っていました。そしてそれが、自分のこの世の使命をはっきりと理解できた異邦人、すなわち末日の聖徒の働きによってその日が来ることも知っていたようです。

「・・・しかしわたしは，これらのことが将来必ず知らされ，現在隠されているすべてのことが将来屋根の上で明らかにされることを知っており，これらのことが，将来これらの民の残りの者と異邦人に知らされることも知っている。・・・わたしは以上のことを知っているので，あえて自分がこれまで見てきたことを全部は記録せず，小さな短かくまとめた記録を書き記している。・・・さて見よ，わたしはこのことをこの民の子孫と，また異邦人に，すなわち，**イスラエルの家を心にかけ，自分たちの祝福がどこから来るかをはっきり自覚して知っている異邦人に述べる**。」（モルモン 5：8-10）

さて、もしこれらのことがエテル書に隠された謎の一点であるとすれば、もう一点の謎であるあの長々しい系図にはどんな秘密が隠されているのでしょうか。

まずモロナイは父モルモンがエテルの記録を後から載せようとモーサヤ 28：19 で書いたにも関わらず、書かないままモロナイに渡した事に気が付き、余白に父の意思を継いでそれを書こうと思ったのかもしれません。しかし、書き込めるスペースは限られていました。ここでモロナイは全部は書けないまでも、ある重要な点を含んだ 2 つのことだけは書こうと考えたようです。一つはこれまでに話してきた封じられたヤレドの兄弟の記録について。そしてもう一つが、そこから最後の生き残りであるコリアンタマーに至るまでの系図です。

私達は日曜学校などでこのことをあまり話すことはありませんので、多くの教会員が気にせずにいることが多いのですが、実はヤレドの民とニーファイ人は同じアメリカ大陸に約 300 年以上に渡って同時期に住んでいました。つまり、2000 年続いたヤレドの民の歴史の終わりの 300 年と 1000 年間続くニーファイ人の歴史の最初の 300 年が重なるのです。ただ、同じアメリカ大陸でありながら彼らは別々の場所に住んでいたために、お互いの存在を知りませんでした。その 2 つの民の歴史がたった一度、生きた人間によって交差したと記録があるのがエテル書の最後に登場するコリアンタマーです。

さらに大変不思議なことに、失われた 116 ページの代わりとして金版に付け足されたニーファイの小版に彼の名前が最後の最後に書き残されています。

「それには，コリアンタマーという人物と，彼の民の中の殺された者たちの話が載っていた。このコリアンタマーはゼラヘムラの民によって**発見され，九か月の間彼らとともに暮らした**のであった」（オムナイ 1：21）

これによってモロナイが残した系図とニーファイ人の歴史が繋がるのです。このたった一文がなかったなら封じられた記録の意味も、ヤレドの民がいつまで存在したのかも、モーサヤ王の持つウリムとトンミムがどこから来たのかも、私達は知ることができなかったでしょう。2 つの民の記録が時間を超えてつながるというモルモン書自体の構成が、なんとも不思議な奇跡となっているのです。

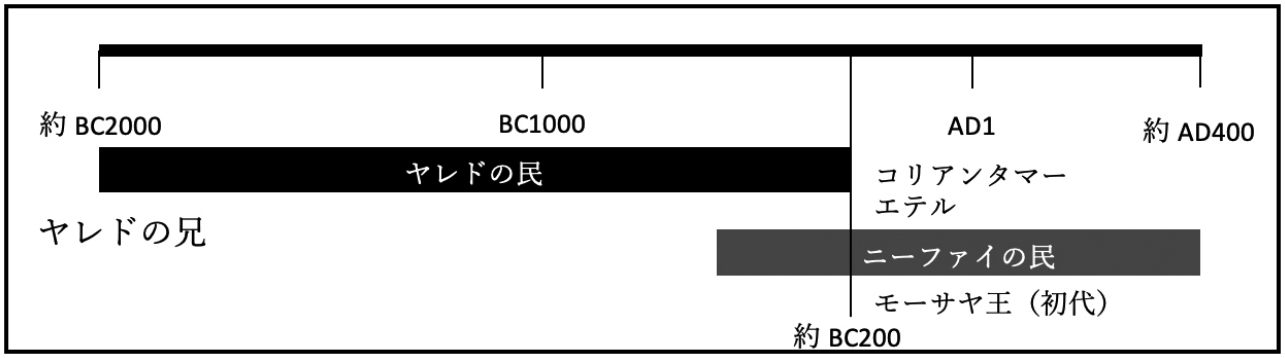


図 22　ヤレドの民とニーファイ人の接触

さて、では一体だれがモーサヤ王にその封じられた記録と解訳器であるウリムとトンミムを渡したのかですが、残念ながらそれはどこにも書かれていません。ただ一つわかっているのは、ヤレドの民にはコリアンタマーの他にもう一人の生き残りが居たと言うことです。その一人というのは他でもないエテルです。コリアンタマーの最後の戦いを見届け、自分の他には彼しか残されていないことを知ったエテルは、主から命じられて出ていきました。

「そこで，主はエテルに，『出て行きなさい』と言われた。そして，エテルは出て行くと，主の言葉がことごとく成就したのを見た。そして，彼は記録を書き終えてそれを隠し，後にリムハイの民がそれを発見したのである。」（エテル 15：33）

この記録とは例の 24 枚の純金の版のことです。ヤレドの兄弟の封じられた記録についての言及はありません。しかし、この同時代にいた初代モーサヤ王が解訳器を手に入れていますので、誰かがこの時代にニーファイ人に接触して渡したか、ニーファイ人の誰かが、24 枚の記録のように発見したのかという事になるでしょう。

ところでエテルは自分の事について最後に興味深いことを書いて記録を終わっています。

「エテルの書き記した最後の言葉は，次のとおりである。「**主がわたしの身を変えてわたしを天に移すこと**を望まれようと，あるいはわたしが**肉にあって生き長らえ**，主の御心に従うことを望まれようと，わたしは神の王国に救われるのであれば，それはどうでもよい。アーメン。」（エテル 15：34）

エテルは自分のこの先の将来について二通りのことを書いてますが、それはどちらも死ぬことではありません。肉体が変貌して死なない体になるか、あるいはそのままの体で主の御心を果たすかと書いているのです。彼は明らかになにか、自分に残された使命があると知っていたようにも感じ取ることができます。しかしそれが何なのかはわからないままです。もしかすると、それがヤレドの兄弟の封じられた記録に係るのかもしれませんが、どこにも記録はありません。

なぜアメリカ大陸で回復がおこなわれたのか、なぜニーファイたちはアメリカに来たのか、なぜヤレドの兄弟の記録は封じられたのか。そしてなにより、なぜそれらの答えがのすべてが今私達の前にあるのか。それを知る時、私達末日の聖徒に託された責任の重さが次第に見えてくるのではないでしょうか。

6章：祝福文とみたまの賜物

回復された真理の中で働こうとする末日の聖徒には、ある特別なものが与えられます。一つは御霊の賜物、そしてもう一つは祝福師の祝福です。忘却の幕を通ってこの世に来た私達は全てのことを忘れています。天でどのような教育を受け、どのような話をし、どのような決意と約束をしたのかさえ、全て忘れます。しかし、末日の聖徒になることがもし偶然の出来事ではないとしたら、神様はなんらかの方法でそれを思い出すことができるようにしてくださるのではないでしょうか？

みたまの賜物

最初の方で説明したように、ジョセフ・スミスも自分が何者であるかを最初の頃は知りませんでした。しかし、彼は努力に努力を重ねて自分に与えられた御霊の賜物を磨き、成長させ、ついにこの世に来た目的を理解してそれを実行することに成功しました。

末日の神様の業においてジョセフ・スミスだけが努力するのでしょうか？いいえ、そうではありません。全ての末日の聖徒たちが同じ努力をする必要があるのです。そうしなければ与えられているはずの御霊の賜物を磨き、成長させることができません。それができなければシオンは建設されないのです。この時代にキリストの教会をもう一度設立するにあたり、イエス様は何度もジョセフへの啓示を通して、すべての教会員が御霊の賜物の重要性を理解する必要があることを語られています。

「さらにまた，まことに，あなたがたに言う。**教会員に与えられているそれらの賜物が何であるか，常に覚えておき，また常に心に留めておくように**と，わたしは望んでいる。」（教義と聖約 46：10）

私達は「御霊の賜物」とは何であるかを知り、何のためにあるのかを知って自分の努めをこの世で果たす必要があります。

この世は私達にとっての学校ですが、同時に働く場所でもあります。しかし何も持たない状態での私達は無力です。神の業に働くために、キリストご自身が私達に与えてくださるもの、それが「御霊の賜物」なのです。モロナイの言葉を読んでみましょう。

「これらの賜物はすべて，キリストの御霊によって授けられる。そして，**キリストの望まれるままに，それぞれすべての人に授けられる**のである。」（モロナイ 10：17）

モロナイはキリストがすべての人に授けてくださるものが御霊の賜物であると説明しています。広い意味で言えば、教会員であるなしを問わず、すべての人にこの賜物は渡さ

れて、それぞれの自由意志で使われていきます。正しくそれを使う人達の努力によって神の業が発展していきます。御霊の賜物の最終的な目的は一つです。

「これらの賜物は**人を益するため**に，神の御霊の現れによって人に授けられるのである。」（モロナイ 10：8）

「人を益する」とは別の言い方をすれば「人を神に近づける」ことです。御霊の賜物の使い道の本質は誰かを助け、少しでも神様の元に近づけること、それ以外にありません。多くの末日の聖徒がそのことを知って努力し続けることによってシオンが築かれるのです。御霊の賜物には様々な種類があり、それぞれ重要な価値があります。一つの賜物を持つ人もあれば、いくつかの賜物を持つ人もあります。

賜物と聞いてまず教会員が思い浮かべるのは「聖霊の賜物」でしょう。御霊の賜物と聖霊の賜物は異なるものではありますが、大変重要な関係があります。人を益するという目的においてはこれらふたつの賜物には密接な関係があります。もう一度先程の聖句を理解してください。

「これらの賜物は人を益するために，**神の御霊の現れによって**人に授けられるのである。」（モロナイ 10：8）

神の御霊の現れというのは別の言い方をすれば聖霊によって教えられる、あるいは良い影響を受ける時という意味です。教義と聖約の中でも何度もこの御霊の現れという言葉が登場します。モロナイはあの有名な 10 章の約束を書いたあとで御霊の賜物の話をしています。つまり、モルモン書が真実であることをキリストの御名によって神様に尋ねると、聖霊によってそれを教えてもらえると書き、更に続けてその聖霊がすべての事を教えてくださると書いて、御霊の賜物の話を書き始め、その聖霊の現れを人が受けると、御霊の賜物が授けられると書いてあります。

しかし、御霊の賜物は突然与えられて、突然使えるようになるわけではありません。ジョセフ・スミスのことを思い出してください。最初は石で訓練され、次にウリムとトンミムで訓練され、また石に戻って更に訓練され、やっと何もなしに古代の記録の翻訳ができるようになり、本来の聖見者としての御霊の賜物が完全な形で働き始めました。ある意味、御霊の賜物は私達がこの世に生を受けた時にすでに与えられているのかもしれません。しかし磨かれ、鍛えられなければ使えるようにならないということです。ここで、もう一人の聖見者の話をしましょう。エジプトに売られたヨセフの話です。

彼はヤコブの 12 人の息子の一人として生まれました。幼い頃から夢を見てそれについて語りだすことが記録されているので、もしかするとこの頃から彼には将来聖見者にな

るために必要な御霊の賜物が与えられていたのかもしれません。しかし、まだ未熟でその賜物の使い道がわからなかった幼い子供のヨセフはその夢の話のために兄弟から嫌われて、罠にはまりエジプトに売られます。

エジプトで奴隷として生きながら、そこでも罠にはまって牢獄へと繋がれます。ところがある日彼は王様の夢を解き明かして、エジプトで第二番目の権力者となって、家族全員、すなわちイスラエルの全家を救うことになります。この時の王様の夢を解き明かしたというのはまさにヨセフが完成された聖見者になったことを示しています。一体彼はどこでその賜物を訓練したのでしょうか。

ここにその過程を解き明かすことのできる一つの聖句が残っています。

「彼らはヨセフが聞きわけているのを知らなかった。**相互の間に通訳者がいた**からである。」（創世記 42：23）

これはエジプトの権力者となったヨセフの元に自分を売った兄たちが訪ねてきた時の話です。もちろんヨセフは兄たちの話す言葉を理解することができました。しかし、あくまでもその正体を秘密に留めるために、イスラエルの言葉を理解できないように見せて自分たちの間に通訳者を置いていたのです。つまりこれはエジプト人とイスラエル人の言葉が違っていて、互いに話すことができなかったことを意味します。幼い頃エジプトに売られたヨセフはその地の言葉がわからなかった可能性があるのです。突然家族から引き離され、言葉の通じない奴隷の世界に身を落とされたヨセフの絶望感はどれほどのものだったでしょうか。そのとき、彼にできた唯一のことは、どんな場所に居ても自分の言葉を理解してくださる天のお父様に向かって祈り、助けを求めることだけではなかったかと思います。

ここで奇跡が起こります。

祈るというからには答えを求めて祈るわけですが、祈りは行動であって、実際には天のお父様との会話を表します。天のお父様が私達に語られるときには必ず聖霊を通して話されます。そしてそれが起こる時こそが「聖霊の現れ」となるわけです。自分を救ってくださるようにと願い続けたヨセフの祈りは、その熱心さによって何度も「聖霊の現れ」を経験する機会となりました。その度に彼の持つ御霊の賜物は磨かれて、他人の夢の解き明かしを始め、ついには完成された聖見者となってエジプトの王の前に立ち、イスラエルの全家を救うことになるのです。王の夢を解き明かしてあげて、さらにイスラエルの全家を救ったわけですから彼は御霊の賜物を使って「人を益した」ということになります。

「聖霊の現れ」によって自分の「御霊の賜物」が磨かれる。この法則が理解できれば自分が末日の聖徒として何をすべきかが次第にわかってくるのではないでしょうか。[52]

祝福師の祝福

とりあえず、自分にはなにかしらの御霊の賜物が与えられているはずだということを知れば、ぜひともそれを使ってみたくなると思います。しかし、それが何なのか最初のうちははっきりとわからないと思います。もし、初めから自分に与えられている賜物が何なのかと教えてもらうことができれば、もっと効率良く天の業のために働くことができるのにと思うのも仕方がありません。しかし、神様のご計画はそのようにはなっていないのです。シオンを築くことは当然やらねばならないことではありますが、何よりもその前に、末日の聖徒一人ひとりが、ジョセフ・スミスやエジプトのヨセフたちと同じように試練を乗り越えて学び、御霊の賜物と共に成長し、神の業を成し遂げるのにふさわしい者となる必要があります。そのために神様は私達個人に向けて成長のための指針を与えてくださっています。そしてその中には自分に与えられた賜物についての表記もある可能性があります。

祝福師の祝福、それこそが天のお父様より私達個人に与えられる、成長のための指針です。人生の地図とも呼べるこの祝福にはアブラハムの聖約を確実に受けるための血統の宣言と、個人に与えられる神様からの言葉が含まれます。「神様からの言葉」と聞いて自分の祝福文を見直し、「神様がこんな言葉遣いをするだろうか？」と心配する必要はありません。祝福師も聖霊を通して啓示を受け、それを私達のために言葉にしてくれるわけですから、教義と聖約のために啓示を受け続けたジョセフ・スミスに似ています。実は教会設立当時もジョセフの受けた啓示を読んで、「神様がこんな言葉遣いをするだろうか？」と思った人たちがいました。その人達に向けてイエス様はこのように説明しておられます。

「見よ，わたしは神であり，わたしがこれを語った。これらの戒めはわたしから出ており，わたしの僕たちに，彼らの弱さのあるままに，**彼らの言葉に倣って与えられた**。それは，彼らが理解できるようにするためである。」（教義と聖約 1：24）

ジョセフ・スミスは聖霊を通して与えられる啓示によって、心の中に浮かぶ神様からのメッセージを自分の言葉になおして人々に伝えていたのです。もし直接イエス様や天の

---

[52] 巻頭の「天からの教えとその働きの仕組み」の図参照
」

お父様の言葉を伝えようとしたらどうなっていたと思いますか？　モルモンはこう説明しています。

「彼らは次のように証した。『わたしたちはイエスが御父に話されるのを見聞きしたが，それは目がまだ見たこともなく，耳がまだ聞いたこともないほど，大いなる驚くべきことであった。わたしたちはイエスが話されるのを見聞きしたが，**それはどんな舌も語ることができず，どんな人も書き記すことができず**，人の心が想像できないほど，大いなる驚くべきことであった。』」（3 ニーファイ 17：16-17）

もし、このような偉大な言葉を書き記せと言われてもジョセフにはできなかったでしょうし、私達も読んで理解することができなかったかもしれません。祝福師も同じように、心に浮かぶメッセージを自分の言葉で私達にわかりやすいように伝えて下さいます。

祝福文は聖典と比べればかなり短く、わかりやすい言葉で書かれているため、一度で読み切り、何度か読んでいるうちに内容も覚えてしまうでしょう。でもそれで終わりではありません。10 年後、20 年後と自分の経験が多くなるにつれて、祝福文を見直す度に中身の理解が変わるのを感じると思います。もし、イザヤ書が少しずつ理解できるようになった段階で見直すと、更に深い意味があることが分かるでしょう。イザヤ書は聖霊からの教えを理解するための訓練だからです。そしてある段階まで頑張り続けて読み直す時に、そこに自分に与えられた御霊の賜物についての言及が最初からあったということを知ることになるかもしれません。そこまで行くと、自分が神様にとって特別な存在であり、自分の今までの人生において、いつも神様がそばにいてくださって支えてくれていたことを知る事になると思います。

指針に従うときに見えて来る自分個人の神様のご計画

祝福文を信じて進み続け、もしそのような段階までたどり着くことができたら、今度は自分が末日の聖徒として、どのように神様のご計画を助けることができるのかが少しずつ見えてくるのではないでしょうか。自分の働きは全体に比べれば遥かに小さいのかもしれません。また他の人の働きに比べれば本当に小さな働きにしかならないように思えるかもしれません。しかしそれは関係ないのです。

御霊の賜物の意味がわかれば、その賜物を自分の持てる限りの力で最大限に使い、「人の益」のために使うことができれば、私達の人生は成功に近づくことでしょう。自分は教会で大きな責任を得ることがなかった、ビショップやステークの会長、あるいは扶助協会の会長などの責任を受けることがなかったというようなことで落ち込む必要もありません。ビショップやステーク会長になったからその人たちは偉いということは一切あ

りません。そのような働きができるように、その人達はイエス様からそういう御霊の賜物が与えられているというだけのことです。

オルガンが弾けない人には聖餐会で賛美歌を演奏する召しは来ないでしょう。逆にオルガンが弾けるという賜物を持っている人はその召しが来るのです。どの召しも重要であって、どの賜物も重要です。なくて良い賜物などありません。持ってるから他の人を見下しても良いという賜物もありません。パウロが次のように説明している通りです。

「兄弟たちよ。霊の賜物については、次のことを知らずにいてもらいたくない。 各自が御霊の現れを賜わっているのは、**全体の益になるため**である。 すべてこれらのものは、一つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである。

からだが一つであっても肢体は多くあり、また、からだのすべての肢体が多くあっても、からだは一つであるように、キリストの場合も同様である。 目は手にむかって、『おまえはいらない』とは言えず、また頭は足にむかって、『おまえはいらない』とも言えない。

そうではなく、むしろ、からだのうちで他よりも弱く見える肢体が、かえって必要なのであり、からだのうちで、他よりも見劣りがすると思えるところに、ものを着せていっそう見よくする。それは、からだの中に分裂がなく、それぞれの肢体が互にいたわり合うためなのである。 あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である。

みんなが使徒だろうか。みんなが預言者だろうか。みんなが教師だろうか。みんなが力あるわざを行う者だろうか。 みんながいやしの賜物を持っているのだろうか。みんなが異言を語るのだろうか。みんなが異言を解くのだろうか。 だが、あなたがたは、更に大いなる賜物を得ようと熱心に努めなさい。そこで、わたしは最もすぐれた道をあなたがたに示そう。

たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、**もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鐃鉢と同じ**である。 たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、**もし愛がなければ、わたしは無に等しい**。 たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、**もし愛がなければ、いっさいは無益である**。」（1 コリント 12:1,7,11-12,21-23,25,27,29-31; 13:1-3）

愛の無い神権の儀式や、愛の無い御霊の賜物の行使には何の意味もありません。そこからは日の光栄に入るための最も大切な条件である「人を愛し、人のために働く」ということを学ぶことができないからです。どんなに小さな召しでも、どんなに小さな賜物でも、頑張ればその働きは一本の真っ白な亜麻の糸を紡ぎます。ヨハネは一人ひとりの末日の聖徒たちが、一生懸命必死になって涙を拭いながら頑張り続け、自分の賜物を精一杯使って召しを果たし、キリストを迎える準備ができたその日を次のように表現しました。

「わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである。 彼女は、光り輝く、汚れのない麻布（※亜麻布【英語】）の衣を着ることを許された。この麻布の衣は、**聖徒たちの正しい行い**である。」（黙示録19：7-8）

黙示録の12章の中に出てくる女は神の教会であるとジョセフは説明しました。その女が最後の婚姻の準備ができた時、つまりイエス・キリストをお迎えしてシオンに共に住む準備が整った時に、ヨハネは亜麻の糸で紡がれた光り輝く花嫁衣装を見たといっているのです。その衣装に使われる真っ白な一本の糸を紡ぐことができた時、私達の喜びはどれほどのものになることでしょう。

自分が末日の聖徒に選ばれたことを知る

おそらく教会員の多くは自分が改宗した、あるいは教会員の家族のもとに生まれたことをただの「偶然」と思っているのではないでしょうか。それはたぶん違います。世の中には現在80億人を超える数の人間がいて、わずか１％にさえも到底届かないほどの確率で末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になったことが、本当に偶然でしょうか？街中で宣教師に声を書けられた時、その場にちょうど居合わせたことが偶然だと言えますか？6千年にも及ぶ人類の歴史の中でちょうどこの時代に生まれてきた確率が本当に偶然だと思いますか？すべてが回復し、全てが整い、あとは働きを待つだけの状態で会員になった私達が、もし今の自分は単なる偶然の中に立っていると考えるのであれば、一体、ニーファイやヨハネ、イザヤやモルモンは誰に向かってメッセージを送っていると言うのでしょうか。

今まで、多くの末日の預言者たちが口を揃えて「私達は取っておかれた特別な世代です」と教えてこられました。この言葉を真剣に受け取って、自分はなぜ祝福師の祝福によってアブラハムの聖約にあずかれるように血統の宣言を受けたのか、一体何の御霊の賜物を与えられ、それを使って自分には何ができるのかと考える時、私達は必ず一つの道へと導かれていきます。

7 章：イエス様はご自分でたどり着かれた

私達がもし前世でなにかの約束をしていて、天のお父様から大切な役目を受けているのであれば、私達はこの世でそれを思い出す必要があります。それは砂漠の中に落ちている小さな一つの宝石を探すようなことなのかもしれません。しかしどうやって探せばよいか、どうやって思い出せばよいか、という方法を知れば時間はかかっても難しいことでは無いのです。そして、その方法を教えてくださったのは他でもない私達の教師であるイエス様です。

忘却の幕

救いの計画の中ではこの世は学校のような場所であって、たくさんの訓練を受ける場所となっています。そのために私達が必ず通らなければならないものが「忘却の幕」です。実際にそういう幕があるのかどうかはわかりませんが、イメージ的にその幕を通るとすべてを忘れるという感じなのでしょう。私達は生まれる前に神様と共に前世に住んで居たと教えられていますが、そのことを覚えている人はだれもいません。そう、イエス様でさえ、覚えておられなかったのです。イエス様は弱い私達と同じ条件で試練に耐える必要があったからです。パウロの説明を読んでみましょう。

「**主ご自身、試錬を受けて苦しまれたからこそ**、試錬の中にある者たちを助けることができるのである。」（ヘブル 2:18）

おそらく世の中の多くの人がイエス様は神の子で特別だから何でも知っていたし、何でもできたのだろうと考えるでしょう。しかし事実は違います。ご自分の身を常に清く保ち、ご自分の賜物を使って、そして聖霊の助けによって、ついにすべてを思い出すまでに到達されたのです。そのことを証できる人物が居ます。イエス様の親戚にあたるバプテスマのヨハネです。イエス様とヨハネが生まれる前に、それぞれの母であるマリアとエリサベツは会っていますから、おそらく彼らが生まれた後にも何度か出会う機会があったのかもしれません。たとえなかったとしても、イエス様がバプテスマをお受けになられた時に二人は会っており、その後もお互いを見かける機会は幾度かあったようです。そのバプテスマのヨハネが書いた記録が存在しています。ただ、私達はまだ見ることができませんが[53]、その一部がジョセフ・スミスに与えられた啓示を通して紹介されました。それが教義と聖約 93 章です。この章は私達が何者であるかを、どうやって知

[53] 教義と聖約 93：6,18 参照

ることができるのかが説明された末日の聖徒にとってはとても大切な啓示なのです。まずバプテスマのヨハネの説明[54]を読んでみましょう。

「彼（※バプテスマのヨハネ）は証して言った。『わたしは彼（※イエス・キリスト）の栄光を目にし，また世界が存在する前に初めに彼がおられたのを見た。それゆえ，初めに言葉があった。彼は言葉，すなわち救いの使者であり，世の光であり，世の贖い主であり，世に来られた真理の御霊であった。彼が世に来られたのは，世が彼によって造られたからである。また，彼の中に人の命と人の光があった。もろもろの世界は彼によって造られた。人は彼によって造られた。万物は彼によって，彼を通じて，彼から造られた。 わたしヨハネは証する。わたしは御父の，恵みと真理に満ちておられる独り子の栄光としての，すなわち**世に来て肉体に宿り，わたしたちの中に住まわれた**真理の御霊の栄光としての彼の栄光を見た。』」（教義と聖約 93:7-11）

ここでヨハネは聖霊の力によって、イエス様の前世での使命とこの世での使命を理解することができたと説明しています。そしてその万物を造られた貴いお方が、自分と同じ時代、同じ場所に、「人」として不完全な体に宿ってこの世に来られたのを見たと証しているのです。そしてそれに続く彼の証がとても重要です。

「また，わたしヨハネは，**彼が最初から完全は受けず**，**恵みに恵みを加えられた**のを見た。**彼は最初から完全は受けず，恵みに恵みを受け続け**，**ついに完全を受けられた**。このようにして，彼は神の子と呼ばれた。**彼は最初から完全は受けられなかったからである**。」（教義と聖約 93:12-14）

ヨハネははっきりと宣言しています。イエス様はこの世にお生まれになった時に「最初から完全は受けておられなかった」と。一体どういう意味でしょうか。教義と聖約 93 章をしっかり読めば、イエス様が私達にイエス様と同じ方法によって「ある事」を理解することができるようになると伝えようとされていることがわかります。そのある事こ

[54] 教義と聖約 93 章に出てくるヨハネが使徒ヨハネとバプテスマのヨハネのどちらを指しているのかという問題についてブルース R マッコンキー長老は次のように述べています。「バプテスマのヨハネには、彼自身が証人として福音書を書くように召されていましたが、彼の記述には、おそらく聖徒たちと世界がまだ受け入れる準備ができていない真理と概念を含まれているため、今のところはまだ私達には与えられていません。 しかし、1833 年 5 月 6 日、主はジョセフ・スミスにヨハネが書き記した書物の中の 11 節を明らかにし、「完全なヨハネの記録」は、人々の信仰が彼らにそれを受けるのにふさわしくなった時に明らかにされると約束されました。」「バプテスマのヨハネの書物の一部が明らかにされたことと、使徒ヨハネの福音書の内容の一致から、使徒ヨハネが福音書を書いたとき、彼の前にはバプテスマのヨハネの書物があったことは明らかです。 ヨハネ 1:1–38 とヨハネ 3:23–36 は、バプテススマのヨハネによって最初に書かれたものから引用または言い換えられて書かれたのです。」(Mortal Messiah, 1:426–27)

そが、最初に説明した「**私達に与えられた使命を思い出すこと**」です。もし「最初から完全は受けておられなかった」と言う意味が私達と同じように、イエス様も忘却の幕を通っておいでになり、赤子として生まれてくる時にはすべてを忘れられたとしたらどうでしょうか。それはある意味大変なことです。アブラハムは自分の書いた記録の中で、示現によって見せられた天上会議の様子をこう書き残しています。

「また，主は言われた。『わたしはだれを遣わそうか。』すると，一人が人の子のように答えた。『**わたしがここにいます。わたしをお遣わしください**』。また，別の者が答えて言った。『わたしがここにいます。わたしをお遣わしください。』そこで，主は言われた。『わたしは最初の者を遣わそう。』すると第二の者は怒り，その第一の位を守らなかった。そして，その日，多くの者が彼に従った。」（アブラハム 3：27-28）

ここで「主」と書かれているのは天のお父様のことです。そして最初に答えたのがイエス・キリストで、二番目に答えたのがルシフェル、後のサタンです。天のお父様はすべての子供達が参加した天上会議において、救いの計画を示されました。そしてその中で創造主、贖い主、救い主に誰かなることができる人がいるかと尋ねられたのです。私達は生まれる前の世界にいた時から自由意思を持っていました。それによって最初に答えられたのがイエス様でした。

もし、イエス様がこの世に来て、忘却の幕でこの事をすべてを忘れてしまったら、そしてそのまま思い出さなかったら、私達には救いが来ないということになります。エジプトに売られたヨセフが人生の試練を通して、自分の御霊の賜物を訓練する機会が与えられたように、おそらくはイエス様ご自身にもそのような機会が与えられたのかもしれません。しかし、この世でも自由意志がありますから、それに耐える必要もなく、嫌なことを避けて好きなことだけをやることもできたはずです。しかしイエス様は前世で現されたような資質を現世の自由意志に応用されて、罪を犯さず、身を清く保たれました。ヨハネは続けてこう証しています。

「わたしヨハネは証する。見よ，天が開かれ，**聖霊が**鳩の形を取って彼の上に降って，彼の上にとどまられた。また，天から声があって言われた。『これはわたしの愛する子である。』わたしヨハネは証する。彼は御父の**完全な栄光を受けられた**。彼は天においても地においても，一切の権威を受けられた。そして，御父の栄光は彼とともにあった。御父が彼のうちにおられたからである。」（教義と聖約 93:15-17）

神会のお一人という特別な立場におられるイエス様が、わざわざこの世に来てすべてを忘れる必要など無いようにも思えますが、イエス様がバプテスマのヨハネの元にバプテスマを受けに行った時の事を思い出してください。

「そのときイエスは、ガリラヤを出てヨルダン川に現れ、ヨハネのところにきて、バプテスマを受けようとされた。ところがヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った、『わたしこそあなたからバプテスマを受けるはずですのに、あなたがわたしのところにおいでになるのですか』。しかし、イエスは答えて言われた、『今は受けさせてもらいたい。**このように、すべての正しいことを成就するのは、われわれにふさわしいことである**』。そこでヨハネはイエスの言われるとおりにした。」（マタイ 3：13-15）

イエス様は私達に教えるため、バプテスマを一つの模範例として「すべての正しいことを成就する」と言われました。そのすべての正しいことの中には私達が**この世に来た使命を思い出すこと**も含まれます。そのために、イエス様は一旦すべてを忘れられて、私達のようになって、そこからすべてを思い出す努力をされたのです。それは簡単なことではありません。イエス様でも当然サタンの誘惑を受けられるのです。しかしその誘惑に打ち勝つ度に、少しずつ「恵みに恵みを加えられ」、次第にご自分の使命を思い出していかれて、ついには完全な栄光を受けられるまでになられたのです。これは十字架上で亡くなられた後の話ではなく、**生きている間に**という話です。なぜならこの記録を書いたバプテスマのヨハネはイエス様の伝道中に殉教しています。その彼が生きている間に「見た」と記録しているのです。

イエス様は教義と聖約 93 章の中で、まだ公開されないはずのバプテスマのヨハネの記録を引用された理由を次のように説明されています。

「わたしは**これらの言葉をあなたがたに与える**。それは，**あなたがたが礼拝する方法を理解して知り，また自分が礼拝するものを知ることによって**，あなたがたがわたしの名により父のもとに来て，定められたときに父の完全を受けられるようにするためである。あなたがたは，わたしの戒めを守まもるならば，父の完全を受け，わたしが父によって受けているように，あなたがたはわたしによって栄光を受けるからである。それゆえ，わたしはあなたがたに言う。あなたがたは**恵みに恵みを加えられるであろう**，と。」（教義と聖約 93:19-20）

イエス様はバプテスマのヨハネの記録を引用することによって、ご自分がこの世で一から始められたことを話し、そして全てを理解することができたと説明されました。そしてそれを伝えた理由は**「私達」も同じように恵みに恵みを加えられて知ることができる**ということを教えるためだったのです。そしてそのためには誰に祈り、どうやって祈るかを理解する必要があると教えられたのです。

自分の使命や真理を知るために、なぜあらためてわざわざ「祈り」について理解する必要があるのでしょうか？私達は毎日祈り、祈りについては良く理解しているのではないでしょうか？でももし、それをご存知の上で、イエス様がさらに祈りについて理解しな

さいと言われているのであれば、もしかすると私達の現在の祈りの理解には、さらにその上があるということではないでしょうか？私達は勝手に「もう知ってるよ」と思うことがたくさんあります。ニーファイは次のように教えてくれました。

「まことに，『わたしたちは受けているので，もうこれ以上は必要ない』と言う者は，災いである」（2 ニーファイ 28：27）

弟のヤコブも同じように説明しています。

「見よ，主の業は大いなる驚くべきものである。主の奥義の深さは何と計り知れないことか。**主の道を知り尽すことは，とても人にできることではない**。主の道は，啓示されないかぎりだれも知ることはできない。それゆえ同胞よ，**神の啓示を侮ってはならない**。」（ヤコブ 4:8）

もしかすると私達が今「知っている」と思っている以上の真理が存在していて、それを知ろうと努力しない限り教えられることがないとしたら、私達はどれほどもったいないことをしているのでしょうか。聖典に書いてあることが真理だと信じるのであれば、そこに書いてあることに従うべきではないでしょうか？

イエス様は 93 章で更に続けて、どういう理由で私達がそのように恵みに恵みを加えられる可能性があるのかを、前世の更にはるか昔から、私たちの存在がどのように成長してきたかを説明してくださいました。

「人もまた**初めに神とともにいた**。**英知すなわち真理の光**は，創造されることも，作られることもなく，実にそうすることのできないものである。・・・見よ，ここに人の選択の自由があり，またここに人の罪の宣告がある。なぜならば，初めからあったものが分かりやすく示されているのに，彼らがその**光を受け入れ**ないからである。・・・人は霊である。元素は永遠であり，分離しないように**結合した霊と元素は，満ちみちる喜びを受ける**。・・ 神の栄光は英知である。言い換えれば，光と真理である。」（教義と聖約 93：29，31，33-34，36）

私達は自分たちが理解している前世よりもさらに遥か前から、言い換えれば最初から存在していました。その頃私たちはまだ、造られたものではない英知[55]でした。その英知たちがさらなる成長を遂げることができるように神様は準備をしてくださいました。英知が成長して霊となるのか、それとも英知自体が霊なのかはわかりませんが、その霊が

[55] この場合の英知は世の初めからの存在していたものを指します。それが具体的に何かと私達は知ることはできません。ただ、最初から常に存在していたと知ることが重要です。

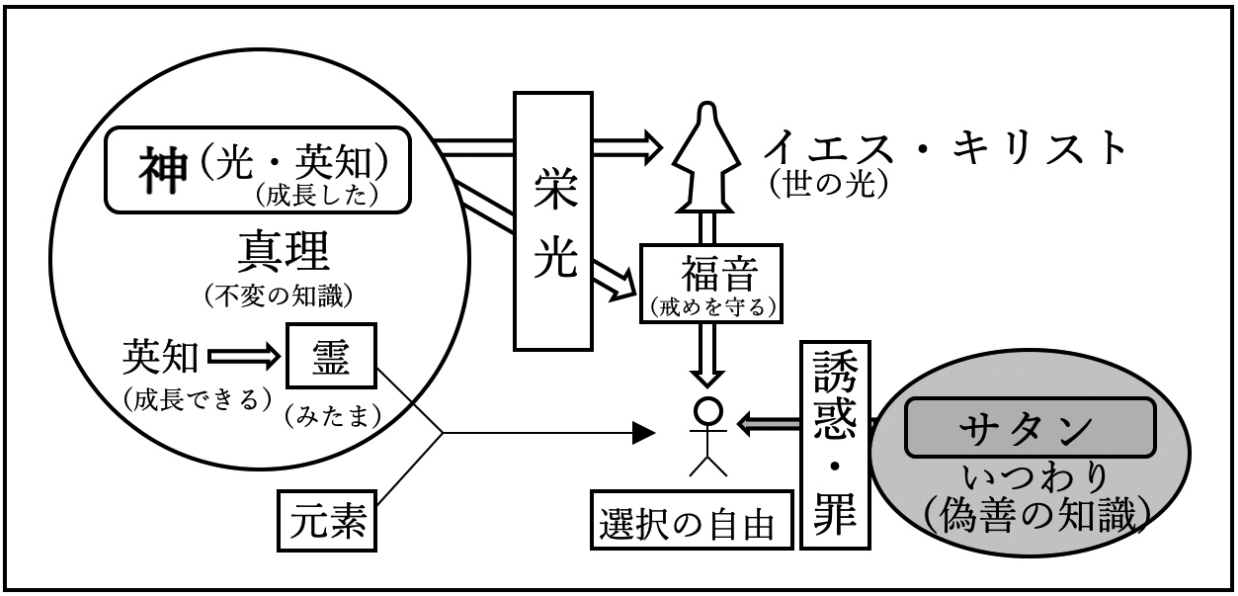


図23　教義と聖約93章の説明図

元素と結合する時、人となって満ち満ちる喜びを受けます。英知もそれだけでは成長できないのですが、神によって恵みを受けて次の段階へと進むことができます。示現によって前世の様子を見せられたアブラハムも同じような事を学びました。

「そして，わたしたちはこれによって彼らを試し，何であろうと，主なる彼らの神が命じられるすべてのことを彼らがなすかどうかを見よう。第一の位を守る者は**付け加えられるであろう。**また，第一の位を守らない者は，第一の位を守る者と同じ王国で栄光を受けることはない。さらに，第二の位を守る者は，とこしえに栄光をその頭に**付け加えられるであろう**。」（アブラハム3：25-26）

つまり、前世のはるか昔から恵みに恵みを付け加えられ続けてきた結果、私達は今ここにいるのです。その私達がその進歩を信じなくなって、ここで歩みを止めてしまったら、ここまで来た意味が無くなってしまいます。私達はまだ先に行くことができるのです。それをイエス様はこの世で自ら証明してくださいました。そしてその模範に従えば、同じようにイエス・キリストの御名によって祈り、聖霊を通してすべてを理解していくことができるので「**わたしが父によって受けているように，あなたがたはわたしによって栄光を受けるからである**[56]」と言われたのです。

[56] 教義と聖約93：20

もし自分で選んでいたとしたら

私達は文字として自分の記憶を取り戻すのではありません。聖霊を通して心で記憶を取り戻します。すぐにパッと分かるのでもありません。「恵みに恵み」ということですから、少しずつ、少しずつです。では一体何を、何の記憶を取り戻すのでしょうか？

ここで、教義と聖約 93 章とアブラハム 3 章がなぜわたしたちに与えられているかを考えてみてください。アブラハム 3 章には天上会議でイエス様が自ら進んで救い主になることを選ばれた話が書いてあり、教義と聖約 93 章には現世においてイエス様がどうやってその事を思い出されたのかの説明が書いてるわけです。

それはとても重要なことでしょう。私達にとってもイエス様がどのように私達の救い主になられたのかを知れるということはとても貴い情報です。

しかし・・・ではなぜ、イエス様は教義と聖約 93 章でその後に続けて「私達も知ることができる」と教えられているのでしょうか？

よく考えてみてください。私達は自分では偶然だと思っていても、今現実に末日の聖徒になっています。これは否定のしようがない事実です。もし仮に、私達もイエス様と同じように自ら進んでそうなることを選んでいたとしたらどうでしょうか？

たとえばの話を考えてみましょう。アブラハム書の 3 章に出てくる天上会議で天のお父様はおそらくすべての子供達に向かって「誰が皆のために救い主となってくれるだろうか」と尋ねられたのだと思います。それがどれだけ大変なお仕事なのか、おそらく私達は理解していました。手を上げたのはたった二人でした。しかしそのうちの一人は皆のためではなく自分の欲求のために救い主になろうとしたため、天のお父様には選ばれず、イエス様が救い主として選ばれました。

でも、この会議にはおそらく、救いの計画を実行するために「誰」を選ぶかという内容も含まれた会議だったのではないでしょうか？もしそうだったと仮定するなら、（あくまでも仮定の話ですが）もしかして、救いの計画の中心となるイエス様が選ばれた後に、天のお父様はこのような質問をされたかもしれません。

「だれか、最初の人となって人間の歴史を始めてくれませんか？」

おそらくアダムとエバが手を上げたのでしょう。

「だれか、それぞれの時代の預言者となって働ける人はいますか？」

エノク、ノア、モーセ、エリヤ、ニーファイ、アルマ、モルモン・・・数々の勇気ある人たちが手を上げたのだと思います。

「だれか、キリストと共に使徒となって働ける方はいますか？」

ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、パウロ・・・錚々（そうそう）たる人々が手を上げたでしょう。

「だれか、末日に、この計画の最後の時に、真の福音の回復の『旗』となってくれる人はいますか？」

ジョセフ・スミスが、手を上げました。

「この回復された教会の設立と発展のためにジョセフを助けられる人は？」

マーティン・ハリス、エマ・スミス、スミス家の人々、オリバーカウドリ、デビッド・ホイットマー、ブリガム・ヤング・・・数え切れない人の手が上がったのではないでしょうか。

そして天のお父様が**最後に**この質問をされたとしたら・・・・、

「末日に聖徒となってシオンを築き、キリストを迎えて救いの計画を完成する働きをしてくれる人はいますか？」

もし、そこにいた私達が、救いの計画の素晴らしさと、自ら進んで大切な使命を果たそうとして手を挙げる多くの人達の勇気を目の当たりにして、心から感動し、この**最後の質問**が出た時に、自らを奮い立たせて、手を高く差し上げ、「ここに居ます！わたしをお遣わしください！」と叫んでいたとしたら・・・・。

私達は全てを忘れているのです。本当にすべてを。

エレミヤは預言者として召される時に自分は若く、知識がなく、弱いと感じていました。自分が前世で手を上げたとしても忘れていたはずです。そんな彼に主は言われました。

「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、あなたを知り、あなたがまだ生れないさきに、**あなたを聖別し**、あなたを立てて万国の預言者とした。」（エレミヤ 1：5）

これはこの教会の教義で「予任」として教えられています。つまりこの世での役目がある人は前世ですでに選ばれているという意味です。しかし、アブラハム書の 3 章を読めばわかります。イエス様が救い主になられたのは勝手に選ばれたのではなく、イエス様ご自身が自ら進んで「私をお遣わしください」と言われたから選ばれたのだと。ということはここで選ばれたというエレミヤも同じだったのではないでしょうか？「あなたを聖別し」というのは自ら進んで「やります！」と言ったので選ばれ、その責任のために聖別されたという意味ではないでしょうか？イザヤは末日にたくさんの聖徒たちがこの世に送られる時の様子をこのように表現しています。

「あなたがたは木のない山に**旗**を立て、声をあげて彼らを招き、手を振って彼らを貴族の門に、はいらせよ。 わたしはわが怒りのさばきを行うために**聖別した者ども**[57]に命じ、わが勇士、わが勝ち誇る者どもを招いた。 聞け、多くの民のような騒ぎ声が山々に聞える。聞け、もろもろの国々、寄りつどえるもろもろの国民のざわめく声が聞える。**これは万軍の主が戦いのために軍勢を集められるのだ**。」（イザヤ 13：2-4）

何度も言いますが、もし私達が生まれる前に、天のお父様の準備された「救いの計画」に感動し、共に働こうとする人々の模範に心を打たれ、せめて最後のその時に少しでも力になることができればと自ら進み出て手を上げていたとしたら・・・。今、どのようないきさつであれ、現実に末日の聖徒となっているという事実について、私達は深く考えてみる必要があるのではないでしょうか。

[57] 英語では「聖められた者たち」の意味

8章：イエス様が示された道

前の章の話から、今の自分が前世で自らの選びをしたために、この世で末日の聖徒になったと仮に仮定してみましょう。多分不思議であると同時に、仮にもしそうだったとしても今の自分の生活の現状と、自分が思い見る「末日の聖徒」としてのあるべき姿に大きな差を感じて愕然としてしまう人も多いのではないでしょうか。誰しも自分の思い描く完璧な生活を、日々行えているわけではありません。仕事や家事、学校や子育てなどの毎日やらなければならないことがあり、その上に日々の生活上の問題がのしかかってきます。家族や、友達、人間関係、金銭的悩みや、将来についての不安、結婚や就職などの心配ごと、数え上げても切りがありません。

もし本当に私達が末日の聖徒として聖別されているのであれば、神様はなぜ、私達の生活をもう少し楽にして、聖徒として働けるような場を作ってくださらないのでしょうか。神様のしもべとして、神様のために働きたい気持ちは充分にあるのに、日々の試しの連続で、自分がきちんと働けていると思えなくなることもよくあるのではないでしょうか。

私達でも達することができる可能性

この世は学校であって、同時に私達が働く場でもあるということを思い出してください。つまり、現場で働きながら学んでいく。実習生やインターンシップに似ています。私達に与えられた人生は一度しかありませんので、失敗したからと言ってやり直しをすることは許されていないのです。この本番の現世という世界で、私達は現場で学びながら自分を鍛えて、生きている間に少しづつ神様の御業を手伝って、自分を成長させて、そして完成に近づくしか方法はありません。そしてそれは「可能」なのです。

もし不可能であれば、現世にいる私達にイエス様が次のようなことをいわれるでしょうか。

「それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも**完全な者となりなさい**。」（マタイ 5：48）

この聖句を読む時、多くの人が「この現世で、不完全な私達にそんなことが可能だろうか？」と思うのではないでしょうか。もちろん、それは不可能です。現世で天のお父様のようになることはできません。そういうプロセスの決まりがあるからです。しかし、もしこの聖句の言葉が**人としてという意味ではなく、たとえば与えられた使命を全うするという意味**だとしたらどうでしょう。

ジョセフ・スミスは殉教するその最後の瞬間まで人間でした。おそらく最後の息を引き取るまで不完全な人間だったと思います。しかし、彼が前世において自ら神様に誓った約束を果たせたかと考えれば、彼ほど神様の救いの計画に貢献した人は居ないのではないかと思えるほどです。ジョン・テイラーが教義と聖約の 135 章で「**ただイエスは別として，この世に生を受けた他のいかなる人よりも**」とジョセフの事を説明したのはそういうことだったのではないでしょうか？つまり、人間とはしては不完全でも、約束を果たすということにおいては、人は完全になれる可能性があるのです。つまり、自ら作った約束をこの世において「完全」に果たすことができるということです。

この理解はとても大きいと思います。もし私達がこの可能性を理解できたら、自分の人生の中で「自分の使命の探求」を始めるはずです。その可能性を信じることができたら弱った膝を叩いて何度でも何度でも立ち上がることができます。どのようにして、その「自分の使命の探求」を始めることができるのか、その方法を考えていきましょう。

キリストの光と聖霊

再び忘却の幕の話に戻ります。せっかく自らの約束をしたとしても、私達は全てを忘れてしまいます。脳の中にはその記憶は全く残りません。思い出すことさえ不可能です。自分では思い出すことはできないわけですから、誰かに教えてもらわなければなりません。神様がなぜ聖霊というお方を私たちのために準備されたのか、不思議ではありませんか？聖霊はすべてをご存知で、全てを教えられることができます[58]。でももし教会員の家族に生まれていなければ、あるいは人生のどこかで改宗しなければ、この世で聖霊の事を知る機会はとても少なかったでしょう。サタンの企みによって聖典から「聖霊」という言葉が抜き取られていた時代、人々はその存在すら知る機会に恵まれていませんでした。

「（※パウロが）彼らに『あなたがたは、信仰にはいった時に、聖霊を受けたのか』と尋ねたところ、『いいえ、**聖霊なるものがあることさえ、聞いたことがありません**』と答えた。」（使徒 19：2）

そう、つまり、今この時代に生まれた私達は「**聖霊を知る機会**」に恵まれている特別な時代の人間なのです。天使モロナイはジョセフに最初に現れた夜に、次の聖句を聖書から引用して「これから起こること」として伝えました。

[58] モロナイ 10：5 参照

「その後わたしは**わが霊をすべての肉なる者に注ぐ**。あなたがたのむすこ、娘は預言をし、あなたがたの老人たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見る。 その日わたしはまたわが霊をしもべ、はしためにに注ぐ。」（ヨエル 2：28-29）

すべての肉なる者、すなわちそれを望むすべての人間が神の霊、聖霊を受けることができるという宣言でした。この聖句には続きがあります。

「すべて主の名を呼ぶ者は救われる。それは主が言われたように、**シオンの山とエルサレムとに、のがれる者があるからである。その残った者のうちに、主のお召しになる者がある。**」（ヨエル 2：32）

つまり、その霊を受けて主を呼び求め続けるものたちが選ばれ、シオンを作る者として主に召されるという意味です。今までこんなことは歴史上なかったと思います[59]。天のお父様が救いの計画の最後の仕事として、私達に聖霊から学べるようにしてくださるというのです。何のために？シオンのために働く者たちを集めるためです。

しかし、先程の話に戻りますが、教会員の家に生まれなければこのチャンスに巡り合うことはとてもむずかしいですし、この 80 億人以上の人がいる世界で教会の宣教師に出会える確率も、その時に彼らの話を聞こうと思える確率も、とてつもなく低いでしょう。たとえ教会員の家に生まれたとしても、自分がその機会の素晴らしさに気がつかないまま一生を過ごせば全く意味のないことになってしまいます。どうやって人は天のお父様が準備してくださった聖霊の教えまでたどり着くことができるのでしょうか？

英知が霊となって、人間となるまでに「自由意志」を行使し続けたという話を思い出してください。私達はいくら忘却の幕をくぐっても、自分の本質と自由意志は持ち続けます。そのわずかな力から聖霊にたどり着く方法を神様は準備してくださいました。それが「**キリストの光**」です。

キリストの光と呼ばれるものにはいくつもの名前があります。「主の御霊」「真理の光」「良心」「善悪をわきまえる力」など、呼び方は様々でも同じものをさします。このキリストの光は世界を包んでいます。別の言い方をすればイエス様が創造されたすべての宇宙を包みます。イエス様が宇宙を創造された時に、その影響として残してくださったものが人を聖霊にまでたどりつかせるキリストの光です。すべての人がこのキリストの光の中に生まれてきますから、人は生まれながらにしてこの存在を感じます。モルモンはこの光の性質を次のように教えました。

---

[59] エノクの時代にも同様のことはあったかもしれませんが、完全な福音や聖霊の存在の真理が失われたという点では歴史上初めての事になります。

「さて，わたしの同胞よ，あなたがたは判断する際に用いる光，すなわちキリストの光について知っているので，誤って裁かないように注意しなさい。あなたがたが裁くその裁きで，あなたがたも裁かれるからである。そこでわたしは，同胞であるあなたがたに，**善悪をわきまえることができるように，キリストの光の中で熱心に求めること**を切に勧める。もしあなたがたが善いものをことごとく手にして，それを非難しなければ，**あなたがたは必ずキリストの子となる**。」（モロナイ 7：18-19）

人はどんな環境でも最終的には自分で選ぶことができる権利を持っています。そしてその権利において自分の行くべき道を決めることができます。最初は何も知らない無知の状態であったとしてもキリストの光は正しい方向を指してくれます。キリストの光は言わば「聖霊にたどりつかせてくれる光」です。

モルモンが使った「キリストの子」という言葉についてはモルモン書の中でベニヤミン王が次のように説明しています。

「さて，あなたがたが交わした聖約のために，**あなたがたはキリストの子と呼ばれ，キリストの息子および娘と呼ばれる**。見よ，それは，今日キリストが霊的にあなたがたを子としてもうけられたからである。あなたがたは，キリストの御名を信じて心が改まったと言う。だから，あなたがたはキリストから生まれ，キリストの息子および娘となったのである。」（モーサヤ 5:7）

人は生まれながらにして、キリストの光の中に生まれてくるので、自然に自分で善悪を理解できるようになります。それを受け入れるか、拒絶するかもその人の自由です。しかし、その人がそれを受け入れ、正しい方向に進みたいと願う時、もし時代や環境が許せば、その人はやがてイエス・キリストの教えに近づきます。国の規制や法律によってキリストを信じること自体が許されない人々もいるでしょう。しかし、その人達もその環境においてできる限り努力するのであれば、やがて別の時期に、あるいは霊界において公平に真の福音にあずかる機会があります。

もし末日の聖徒になると約束してこの世に来た人々にはきっと、キリストの光を通じてイエス・キリストの真の福音までたどり着く機会が与えられるのではないかと思います。キリストの光は末日の聖徒を自分の約束までたどり着かせるための道標です。イザヤは「キリストは自分の子孫を見る前に死んでしまったので、彼には子孫を見る喜びがない」と考える人々に対し、そうではないと書きました。アビダナイはそのイザヤの言葉を更に詳しくこう説明しています。

「さて，わたしはあなたがたに言うが，だれが御子の子孫であると名乗るであろうか。見よ，わたしはあなたがたに言う。御子は罪のためのささげ物にされると，御自分の子

孫を御覧になる。では，あなたがたは何と答えるか。御子の子孫とはだれか。見よ，わたしはあなたがたに言う。預言者たち，まことに，主の来臨について預言してきたすべての聖なる預言者の言葉を聞いた人々，預言者たちの言葉を聴き，主が御自分の民を贖われることを信じ，自分たちの罪の赦しのためにその日を待ち望んできたすべての人，わたしはあなたがたに言うが，これらの人々が御子の子孫なのである。すなわち，彼らは**神の王国を受け継ぐ者**である。これらの人々は，御子が罪を負ってくださる人々だからである。御子はこれらの人々を背きから贖おうとして，彼らのために死なれた。**だから彼らは，御子の子孫ではないだろうか。」**（モーサヤ 15：10-12）

モルモン、ベニヤミン王、イザヤ、アビナダイ達は皆、人々がキリストの光を受け入れて正しい道を歩もうとし、そしてついにイエス・キリストの福音にたどり着く時、私達はキリストの子、キリストの息子娘、そしてキリストの子孫となることができ、王であるキリストとともにその王国を受け継ぐことができると説明しているのです。

心の穴とみたまの実

そのキリストの光が導く到達点こそが、「聖霊」であり、「聖霊の賜物」を受けることです。キリストの光は善悪を区別することはできますが、それ以上、それ以下でもありません。私達はキリストの光の中に生まれますから、ある意味持って生まれたようなものです。しかし、それを使ってキリストの元にたどり着く時に、私達は更に教えを請う機会が与えられます。それを助けてくださるのが「聖霊」というお方です。そしてモロナイがヨエルの言葉を引用して説明したように、現代に生きる私達にはそれを受ける特別な機会が許されています。

聖霊の話をする前に、まずバプテスマについて考えてみてください。私たちはバプテスマと聞くと、すぐに頭の中で水に沈めるバプテスマを連想するでしょう。それは間違いではありません。そのように覚えられるように形で教える儀式だからです。しかし、この福音においては、形で覚える儀式はアロン神権によって執り行われます。アロン神権の別名は「備えの神権」です。何かを準備するための儀式。バプテスマにおいての本当の目的は水に沈むことではなく、罪を捨てて、生まれた時の状態にリセットして、天のお父様がこの世で私達にくださる最高のギフトである「**聖霊の賜物**」を受けることです。聖霊の賜物はアロン神権では授けることができません。アロン神権の儀式によって清くされた肉体の上にのみ、メルキゼデク神権によって授けられるのです。

「聖霊の賜物」とは聖霊を常に伴侶とするために、身を清く保ち、教えを請いたいと望めばいつでも聖霊から教えていただけるという約束であり、資格であり、権利のようなものです。しかし、聖霊の感じ方は人によって様々です。その理由は私達がどれだけ「神様の御心を知りたいか」によって変わります。例えば、モルモン書の中でラモーナ

イ王や、その父親のレーマン人の王が真実を知った時、聖霊に感動して気を失ったという記述があります。現代の教会に改宗する人でそのような事になる人はあまり見ることがないでしょう。それは心にどれくらいの穴が開いているかによるのです。

ラモーナイ王や、その父親のレーマン人の王は彼らの中の先祖からの言い伝えと文化によって、罪のない人の血を流すことが悪いことであるとは知らされていませんでした。ですから、王という権限を利用してそのような行為を行っていたのでしょう。しかし、文化や掟が許しても、キリストの光は善悪を心に告げます。彼らはおそらく日々の生活の中で誰にも見せることができない苦しみを抱えて、いつしか心の中に何を持ってしても埋めることができない大きな穴が開いていたのではないでしょうか。しかし、宣教師たちの働きによって真実がわかり、更にキリストを通して祈り求めたことによって聖霊が彼らの心の穴を天のお父様の御心で埋め、あふれるほどの真理を伝えた時、彼らは喜びに満ちて気を失ったのです。

現代に生きる私達は法律と秩序のある社会に生きていますので、よほどのことがない限りこのような状況に陥ることはないでしょう。しかし、それでも聖霊はささやいているのです。

キリストの光と聖霊による影響はどちらも「善い」ものですから、生まれた時からキリストの光の中にいる私達はあらためて「聖霊」と言われても「どれが聖霊なんだろうか」と思い悩むと思います。パウロがこの事について、最初はわかりにくいかもしれないが、ちゃんと聖霊はささやいているのだということを、聖霊の影響が結んでくれる「実」にたとえて「御霊の実」という話をしています。

「しかし、**御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制**であって、これらを否定する律法はない。」（ガラテヤ 5：22-23）

パウロは愛や喜び、平和や寛容など日々の生活の中で心の中に良いものを感じる時、その時すでに聖霊が私達の近くにおられるのだと教えています。そして聖霊によって導かれる時、私達もそのようにして実を結ぶことができるのです。最初はわかりにくくても、自分がやっていることで心の中に「善い」気持ちを感じるのであれば、それはもう聖霊の影響を受け始めているということです。

聖霊はまだバプテスマを受けておらず、聖霊の賜物を持たない人にも影響を及ぼすことができます。そうでなければモロナイがモロナイ 10 章で約束したことは実現しないで

しょう。ペテロが異邦人であるコルネリオに聖霊が降るのを見て驚いたとある通りです[60]。
しかし、もしそうであるのなら、なぜわざわざ聖霊の賜物を受ける必要があるのでしょうか。バプテスマを受けていない人でも聖霊を感じることができるのであれば、わざわざ聖霊を身近に感じるための賜物を受けることは必要ないのでは？と考える方もおられると思いますが、聖霊の賜物を受けると受けないとでは天地ほどの差が生じます。

たとえば、このように考えてみてください。教会員でない人は宣教師と出会うことで神様の事、真の福音を知る機会に預かります。その人は宣教師のレッスンを受けている間に聖霊からの影響を受けることもあると思います。しかし、もしその人がその聖霊からの影響を真剣に受け止めずにそのままにしておけば、やがてその影響は薄れ、宣教師とも離れてしまえば、せっかく受けた善い影響もやがて記憶に残らず消えていくでしょう。聖霊の賜物がなければ聖霊からの教えもまた自分の中に留まることがないのです。

図 24　聖霊の賜物

バプテスマ受けるということは罪の許しを受けて清くなるという事以外にも、神の教会に入る決心をするという重要な目的があります。それを受け入れて聖霊の賜物を受けると、いつも教会という守りの中にいることができるので、自ら学ぼうという努力が比較的続けやすくなります。その時に聖霊の賜物を持っている人はいつでも聖霊に尋ねることができますし、聖霊の賜物自体が教えられたことを記憶の中に留めるように働いてくれます。そしてある日、本当の意味で聖霊によって自分の御霊が照らされて真理を知った時、私達は真の意味で「**火と聖霊によるバプテスマ**」を受けてさらにもう一段上の段階へと進んでいくことができます。

「したがって，わたしの愛する同胞よ，もしあなたがたが十分に固い決意をもって御子に従い，神の前に決して偽善と欺きを行うことなく誠意をもって行動し，罪を悔い改め，バプテスマによって，まことに，あなたがたの主であり救い主である御方に従い，主の言葉のとおりに水に入り，バプテスマを受けることによって，キリストの名を喜んで受けることを御父に証明するならば，見よ，そのとき，あなたがたは聖霊を受ける。すなわち，そのとき**火と聖霊によるバプテスマを受ける**。するとあなたがたは天使の言葉で語り，イスラエルの聖者に賛美の声を上げることができるのである。わたしはそれを知っている。」（2 ニーファイ 31：13）

[60] 使徒 10：44－45 参照

聖霊の賜物によって火と聖霊によるバプテスマを人生の中で何度も経験すると、人は新しい人間に生まれ変わることができます。それこそがイエス様の言われた次の言葉の真の意味になります。

「イエスは答えて言われた、『よくよくあなたに言っておく。だれでも**新しく生れなければ**、神の国を見ることはできない』。ニコデモは言った、『人は年をとってから生れることが、どうしてできますか。もう一度、母の胎にはいって生れることができましょうか』。イエスは答えられた、『よくよくあなたに言っておく。だれでも、**水**と**霊**とから生れなければ、神の国にはいることはできない。肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である。あなたがたは新しく生れなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない。』」（ヨハネ 3：3-7）

これは一度にすべてが起こるわけではありません。私達の「前に進もうとする努力」が実を結ぶ時に少しずつ進歩が生じるのです。十二使徒の D・トッド・クリストファーソン長老の言葉から読んでみましょう。

「皆さんは，こう尋ねるかもしれません。『なぜその大きな変化はもっと早くわたしに起きないのでしょうか。』ベニヤミン王の民やアルマ，聖文に登場するほかの人々の目覚ましい例もありますが，それは驚くべきことであり，すべてがそうではありません。**多くの人にとって，その変化は少しずつ時間をかけて起こります**。再び生まれるとは，肉体的な誕生とは異なり，一つの出来事ではなく一連の過程です。その過程を踏むことが，現世における最も大切な目的なのです。
また同時に，いいかげんな努力を正当化しないようにしましょう。悪を行おうという性癖をいささかでも持つことのないようにしましょう。毎週，聖餐を頂くにふさわしい者となり，心の中に汚れた部分が少しでもあるなら根絶できるよう引き続き聖霊に頼りましょう。霊的に再び生まれるという道を歩み続けるときに，イエス・キリストの贖いの恵みが皆さんの罪と罪の汚れを取り去り，誘惑はその力を失うことを証します。そしてキリストにより，皆さんはキリストや御父が聖なる御方であられるように，聖くなることができると証します。」（2008 年 4 月総大会日曜午前の部会 D・トッド・クリストファーソン長老「再び生まれる」より抜粋）

キリストの贖いの意味

人は何も学ばなければ、罪を犯しながら成長します。福音を知らずに、この世に不完全な状態で生まれてきた私達は、生まれたての赤ん坊の状態から成長する度に失敗し、キリストの光に包まれながらも必ずしもその教えに従うことはせず、自分の弱さ故に誘惑に負けて、自分を傷つけ、自分の心を汚していきます。もし天のお父様が私達をこの状

態から救ってくださらないならば、私達は決して再び彼の御顔を見ることはできなかったでしょう。エデンの園において神様の言いつけを守りきれずに、サタンの誘惑に負けて追い出されたアダムとエバは「天の御父の御顔を見られる」ことがどんなに素晴らしいことなのかを知っていましたから、その機会が自分たちから取り去られた時、どれほどの悲しみに陥ったことでしょう。モーセ書にはアダムが再び天のお父様の御顔を見る機会が与えられるという計画を天使から聞いた時の喜びが記録されています。

「アダムとその妻エバは主の名を呼び，エデンの園の方向から彼らに語る主の声を聞いた。しかし，主を目にすることはなかった。彼らは主の前から締め出されていたからである。・・・多くの日の後，主の天使がアダムに現れて言った。・・・『これは，御父の，恵みと真理に満ちている**独り子の犠牲**のひながたである。』・・・その日，御父と御子のことを証する聖霊がアダムに降り，・・・アダムは神をたたえ，満たされて，地のすべての氏族について預言し始めて言った。『神の御名がたたえられるように。わたしの背きのゆえに，わたしの目は開かれた。**わたしはこの世で喜びを受け，再び肉体にあって神にまみえるであろう。』**」（モーセ 5：4-10）

この私達の罪のために犠牲となられる独り子こそが、救いの計画の中心となられるイエス・キリストです。私達が知らずに犯してしまう罪を肩代わりしてくださり、私達の代わりにその罰を負ってくださる方がいるということを知らされたアダムは、自分たちがその後も努力し、清くあり続ければ再び、あの栄光の御父の御顔を見ることができると知って喜んだのです。

犠牲、すなわち生贄とはなにかの肩代わりとして他の者の命を捧げることです。犠牲というとモーセの律法が有名ですが、犠牲の律法はモーセの律法よりもはるか前に存在していたことは、先程のアダムが犠牲を捧げていた話からも明白です。犠牲は神権の儀式によって罪の肩代わりを象徴するためのものとして、世の最初から救いの計画を民に教えるために存在していました[61]。

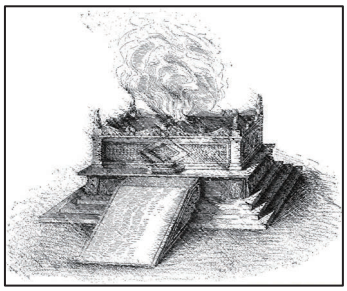


図25　燔祭を捧げる祭壇

しかし動物を犠牲に捧げることは形で学ぶだけであって、それ自体で動物に私達の罪が肩代わりされるわけではありません。人の犯した罪は同じように罪を持つ他の人間が、ましてや人間でもない動物が、肩代わりすることはできないのです。しかし、ひとつだ

[61] 犠牲は形を通して救い主の役割を学ぶための神権の儀式です。形で示すものですからアロン神権の儀式になります。この儀式は今は行っていませんが、無くなったわけではなく、再び回復するとバプテスマのヨハネはアロン神権の回復において宣言しています。教義と聖約 13 章参照。

け方法があるのだとアルマとアミュレクはこの事についてゾーラム人の民に次のように説明しました。

「大いなる最後の犠牲が必要である。それは，人を犠牲にすることでも，獣や鳥類を犠牲にすることでもない。人の犠牲であってはならず，無限にして永遠の犠牲でなければならない。さて，自分の血をささげてほかの人の罪を贖うことができる人など，だれ一人いない。さて，ある人が人を殺した場合，見よ，わたしたちの公正な法律は，その人の兄弟の命を奪おうとするだろうか。そのようなことはないと，わたしはあなたがたに言う。そうではなく，法律は人を殺した当人の命を要求する。**したがって，無限の贖罪でなくては世の罪を十分に贖うことはできない。それゆえ，大いなる最後の犠牲が必要である**。・・・それで，モーセの律法が成就するのである。まことに，モーセの律法は一点一画に至るまでことごとく成就し，むなしくなるものは何一つない。見よ，これが律法の目的そのものであり，すべての部分がこの大いなる最後の犠牲を指し示している。**そして，この大いなる最後の犠牲となるのが神の御子であるので，まことに，これは無限にして永遠の犠牲である。**」（アルマ 34：10-14）

たった一人の選ばれた神の力と人間の不完全さの両方を持ったお方だけがこの大いなる最後の犠牲となられることができるのです。その最終的な贖いの業はイエス様がゲッセマネの園にお入りになってお祈りを捧げ始められたところから始まりました。それまでに生まれ、その後にも来るであろうすべての人類の罪の重荷が彼の肩にかかりました。イザヤはそのことをこう言っています。

「わたしは彼を堅い所に打ったくぎのようにする。そして彼はその父の家の誉の座となり、その父の家の**すべての重さは彼の上にかかる**。すなわちその子、その孫およびすべての小さい器、鉢からすべてのびんにいたるまでみな、彼の上にかかる。」（イザヤ 22：23-24）

その苦しみはどの人間にも想像ができないほどの苦しみでした。すべてを理解されておられた主でさえ、その苦しみのあまり「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください[62]」と言われたほどです。しかし私達のために、私達が希望を持てるように、私達が涙の淵から再び立ち上がれるように、それをたった一人でお受けになったのです。その時のお気持ちを主ご自身がこう語られています。

「それゆえ，わたしは，悔い改めるようにあなたに命じる。わたしの口の鞭によって，わたしの憤りによって，またわたしの怒りによって打たれて，つらい苦しみを被ること

[62] ルカ 22：42

のないように，悔い改めなさい。これらの苦しみがいかにつらいか，あなたは知らない。いかに激しいか，あなたは知らない。まことに，いかに堪え難いか，あなたは知らない。見よ，神であるわたしは，すべての人に代ってこれらの苦しみを負い，人々が悔い改めるならば苦しみを受けることのないようにした。しかし，もしも悔い改めなければ，彼らはわたしが苦しんだように必ず苦しむであろう。その苦しみは，神であって，しかもすべての中で最も大いなる者であるわたし自身が，苦痛のためにおののき，あらゆる毛穴から血を流し，体と霊の両方に苦しみを受けたほどのものであった。そしてわたしは，その苦い杯を飲まずに身を引くことができればそうしたいと思った。

しかしながら，父に栄光があるように。わたしは杯を飲み，**人の子らのためにわたしの備えを終えた**のである。」（教義と聖約 19：15-19）

人が生まれ変わるチャンスをこの世でつかめるようにするために、イエス様はこの苦しみを乗り越えられ、私達を最後まで導かれるように勝利されました。この意味が理解できる時、私達は今一度預言者ヨエルの次の言葉を考える必要があります。

「主は言われる、『**今からでも**、あなたがたは心をつくし、断食と嘆きと、悲しみとをもってわたしに帰れ。 **あなたがたは衣服ではなく、心を裂け**』」（ヨエル 2：12-13）

もし私達が形だけの末日の聖徒になってしまったら、このキリストの努力は報われないでしょう。もし私達が、罪が許されたことだけで満足していたら、イエス様はがっかりされるかもしれません。何のためにイエス・キリストが命をかけて犠牲になられたのかを真剣に考えて、心からの行動を取って新しく生まれ変わろうと努力する時に、少しずつ天のお父様とイエス様の救いの計画が実を結び始めるのではないかと思います。

私達は日々の行いの中で何度も失敗するかもしれません。でもその度にもう一度立ち上がろうと努力する時、イエス様の犠牲が実を結び、私達は清く、そして聖くなれるのです。

9章：キリストの教義の意味

宣教師からイエス・キリストの贖いの業とその犠牲についての説明を受け、それを理解し始める時に人は新しく生まれる努力を始めます。でもどこから？何から始めればいい？と考えることでしょう。そこで宣教師は「福音の第一原則と儀式」を教えてくれます。これは別の言い方で「キリストの教義」として、モルモン書の第三ニーファイ書でイエス様ご自身が[63]、そして第二ニーファイ書でニーファイが[64]教えてくれているとても重要な初めのステップです。ここからが私達のこの世においての永遠の旅のスタートになります。

福音の第一原則と儀式

福音の第一原則と儀式、あるいはキリストの教義と呼ばれるものはとてもシンプルです。ジョセフ・スミスが信仰箇条で説明してくれています。

「わたしたちは，福音の第一の原則と儀式とは，第一に**主イエス・キリストを信じる信仰**，第二に**悔い改め**，第三に**罪の赦しのために水に沈めるバプテスマ**，第四に**聖霊の賜物を授けるための按手**であることを信じる。」（信仰箇条第4条）

このように福音の第一原則と儀式にはきちんとした順序があります。そしてその先のことはイエス様も説明されず、ニーファイも教えてはくれませんでした。別の言い方をすれば教えることができないのです。ニーファイはこのキリストの教義（福音の第一原則と儀式）を説明した直後にこう語っています。

「さて，わたしニーファイはこれ以上言うことができない。**御霊がわたしの語るのを止められるから**である。」（2ニーファイ32：7）

つまり、その先には聖典に載せられないことがあるのです。と言ってもすでにここまでで何度も説明してきたので、もうおわかりだとは思いますが、その先は聖霊が教えられることだからです。聖霊は個人的に啓示を通して私達に教えて下さいます。聖典は万人に共通した一般的な教えですが、聖霊からの教えは私達一人ひとりに与えられる、その時、その時に必要な神様からの直接の教えです。これがなければ人は成長することもできず、この世に来た目的さえ達することができません。その教えを受けるためにどうしても必要な最初の4つのステップが福音の第一原則と儀式です。

---

[63] 3ニーファイ11：31-39

[64] 2ニーファイ31：2-21

まず「**主イエス・キリストを信じる信仰**」が必要になります。救いの計画の中心になるお方がイエス・キリストです。彼の事を知り、彼について学ばなければ私たちの永遠の成長は始まりません。宣教師が教えてくれるのはイエス様のお話、教会で学ぶのもイエス様のお話です。そして聖典に書いてあることも。イエス様ご自身がこうおっしゃられています。

「あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、**わたしについてあかしをするもの**である。」（ヨハネ 5：39）

神会のお一人であられ、最初からこの地球の神エホバとして私達を助け、肉体を得てこの世に来られて私達人間と時間を共にされたイエス様を通してでなければ、私達は天のお父様の存在も聖霊についても何も知ることはできないのです。

イエス様はキリストの教義の他に山上の垂訓などを通して、教義以外にもどうやって正しい人間としてこの世で生活できるのかという方法を教えて下さいました。また神様に祈る方法も教えて下さり、心に苦しみを持つ人に声をかけてくださいました。体に病を持つ人を癒やしてくださり、生きようとする人に希望を与え、生まれ変わることができる真実を教え、人を愛するという偉大な模範を見せてくださったのです。このお方から私達はたくさんの事を学び、希望を持つことができます。それが「信仰」となっていくのです。

アルマは信仰の理解ができていない人たちに向かって、当時のニーファイ人であれば誰でも経験のあったであろう種まきの話を使ってこれを説明しました。種は固い土の中に蒔いても芽を出しません。空気がないからです。だから柔らかく空気を含ませるために最初に土を耕します。アルマは人々の心が謙遜で受け入れる準備ができていたのを見て、その心が耕された土と同じ状態であると感じました。そこにキリストの言葉を種に見立てて植えてみようと説明し、もし蒔いた種がふくらみ、芽を出したらどう思うかと人々に考えさせました。人々は皆経験があるので、自分の蒔いた種が芽を出した時の喜びを知っていました。そこでアルマは続けて、もしその種が良いものだとわかったらどんな花を咲かせ、どんな実を結ぶだろうかと希望を持ち、一生懸命養い育て、やがて実際にその実がなる時に、その実は永遠の命をもたらすだろうと「信仰」について次のように話したのです。

「さて，信仰についてわたしがすでに語ったように，信仰とは物事を完全に知ることではない。したがって，もし信仰があれば，あなたがたは**まだ見ていない真実のことを待ち望む**のである。」（アルマ 32：21）

信仰を持った人が次にしなければいけないのは悔い改めと決意です。決意が必要な理由は救いの計画とイエス・キリストの犠牲と贖いについて知ったわけですから、そこからまた元の生活に戻るということはできないからです。福音とは前進と成長のためにあるのです。自由意志によってこれからイエス様の準備してくださった道を歩んでいこうという決意ができた時、人は神様からの特別な贈り物を期待します。人がこの世において神様からいただくことのできる最高のプレゼント、それがなければ先に進むことができないのです。それが「聖霊の賜物」です。聖霊の賜物は聖霊を伴侶にする資格ですから、自分の人生の中で罪が無く、清かった赤ん坊の時の状態まで戻らなければ、聖さの中の聖さである聖霊の、その賜物を受けることができません。ですからそこまでの清さに戻るために、まず、今までの人生を振り返り、自分が犯してきた罪を「**悔い改め**」ます。そして更に今後その清さを保って、常に聖霊から教えを受けられるように努力しますということと、イエス・キリストの弟子として、彼の御名を受けて真のクリスチャンとして認められるように働き続けるという決意を表明するために「**水に沈められるバプテスマ**」を受けます。

悔い改めると言っても、その時までのすべての自分の行いを思い出すことができないかもしれません。その思い出すことのできない罪とはほとんどが無意識に、あるいは悪気もなく犯してしまったものでしょう。そのような罪のすべてをイエス様が肩代わりしてくださったのです。ですから、思い出せる限り、悔い改めて今後の努力を決意します。すべてを思い出せないから聖霊の賜物を受けることができないということではありません。そのために、悔い改めが結ぶ実としてバプテスマが準備されており、それを受けることによって、一旦赤ん坊の状態の清さまで戻り、聖霊の賜物を受けるにふさわしい状態になることができるのです。

バプテスマを受けたからと言って、私達が突然りっぱな人間になれるわけではありません。その後も何度も何度も失敗するでしょう。辛いことが起こると、気持ちも弱くなり、病気になれば肉体的にも弱って、サタンの誘惑に負けてしまうかもしれません。しかしその度毎にまた悔い改めて清さを保つように努力すれば、常に聖霊の賜物が働き、直接天のお父様から聖霊を通して教えを受けることができます。

このように聞くと何回罪を犯しても、毎回悔い改めれば許されるのだと勘違いされるかもしれませんが、そういうものではないのです。イエス様は次のように言われました。

「さて，まことに，わたしはあなたがたに言う。主なるわたしは，どのような罪もあなたがたに負わせない。あなたがたの道を行き，これからはもう罪を犯さないようにしなさい。**罪を犯す者には以前の罪が戻る**であろう，と主なるあなたがたの神は言う。」
（教義と聖約 82:7）

福音とは前述のように、成長と前進のためにあるわけですから、同じ罪を繰り返している間は折角の悔い改めの機会が無駄になってしまいます。一日も早く、自分の習慣を修正し、新しい人間に生まれ変わって罪から離れることが必要です。

中には「自分の犯した罪が頭から離れないので、いくら悔い改めをしても神様から許されたという気持ちが湧いてこない」という方もおられます。心から許されたいと願っておられる方々だと思います。しかし、悔い改めの本当の目的は先に進むことです。悔い改めをしたからと言って、自分の頭から罪を犯した記憶がなくなることではありません。悔い改めた瞬間に神様から「あなたの罪は許された」とお声がかかるわけでもありません。神様は本当にその人が罪を離れて先に進む努力ができるかどうかを見られるのです。悔い改めが実を結んでその喜びが来るのは先のことです。「許されたという気持ちがしない」と思われる方は、悔い改めにはもう一段階の上があることを知ることが必要です。真に悔い改め、罪を離れた時、私達は清さを保つことができるので聖霊から教えを授かることができます。それを実行する時、私達は一生懸命に働く必要があるので、もはや過去の罪について思い悩む暇さえなくなります。その働きが実を結ぶ時にようやく過去の罪にとらわれることがない新しい世界を知ることができるのです。

図26　バプテスマの儀式

バプテスマはアロン神権の儀式ですから、「形」で儀式の内容を知ることができます。水の中に沈められることは、一旦死んで墓に葬られることを形で表します。今までの罪を持った自分を墓に埋めた状態にして、再び新しい人となって罪を捨てて水から上がるのです。この理解がとても重要になります。アロン神権は準備の神権ですから、準備の対象があります。それが聖霊の賜物です。聖霊の賜物はメルキゼデク神権によってもたらされます。まずアロン神権とメルキゼデク神権の違いについて理解しておきましょう。

アロン神権は外形上の儀式を行うための力を持ちます。ですからこの神権の儀式は形で表すことが多く、またその神権者は教会員のこの世的な生活を支えるために働きます。

「なぜそれが小神権と呼ばれるかといえば，それが大神権，すなわちメルキゼデク神権に付属するものであり，**外形上の儀式を執行する力を持つ**からである。」（教義と聖約107：14）

これに対してメルキゼデク神権は救いに関する霊的な祝福の鍵を持ちます。

「大神権すなわちメルキゼデク神権の力と権能とは，教会のすべての**霊的な祝福の鍵を持つ**ことである。」（教義と聖約 107：18）

つまり外形上、「これから私は神様の道を歩みます」と誓いを立てて水に沈められるバプテスマという形を通して儀式を受けて、清い状態になった人には短時間のうちに救いに関する霊的な祝福である、神様からの最高の贈り物「聖霊の賜物」を受けることができることになるのです。

なぜそれが神様からの最高の贈り物なのかと言えば、この世ですべてを忘れてしまった私達が、再び神様の御元に戻り、神様の御顔を見るためには救いの計画を学び、自分が何者で、何をしなければならないのかを知る以外に方法はありません。そしてそれは聖霊を通してしか教えられることはありません。天のお父様から聖霊を通して教えを受けるにはイエス様の御名を通して祈り尋ねるしか方法がありません。だからイエス様はご自分を通してのみ、神の御元に行くことができると言われたのです[65]。イエス様の御名を通して願う時、いつでも天のお父様から聖霊を通して教えを受けることができる資格、それが「聖霊の賜物」であって、**神様がすべてを忘れた私達に準備してくださった最高の贈り物と**いうわけなのです。

ここでとても重要になるのが、福音の第一原則と儀式の順序です。知識を得て、悔い改め、清くなって、聖霊を受ける。つまり、逆に言えば学ぶこともせず、努力もしないで清さを保てない人には聖霊は来られないということです。聖霊は聖い霊の中の最も聖いお方ですから、清くないものに影響を与えることができません。ですから、大前提として、聖霊から教えを請うには清い状態を保つことが必要になります。「清さ」と「聖さ」という二つの言葉があることに気がついてください。人はまず、肉体的にと霊的に「清く」ならなければ、神の「聖さ」に入ることができないのです。ただ清いだけでも聖霊からは教えを受けることができません。聖典も預言者の言葉も学ぼうとしない人には聖霊も天のお父様の御心を伝えることができないのです。さらに、新約聖書に出てくる律法学者のように、学ぶだけで実際に善い行動を起こせない人には、経験を通して理解する力である「証」を聖霊が個人的な啓示を通して与えることができないのです。バプテスマと聖霊の賜物、水と火の違いは別の言葉で言うのなら「清さ」と「聖さ」の違いです。水による清めは物理的に付いた汚れを洗い流し、元の状態に戻すことですが、火による聖めは一旦溶かして作り直すこと、すなわち新しく別のものを生み出すことを意味します。

[65] ヨハネ 14：6 参照

聖典には入り切らない知識と知恵

聖霊の賜物が神様からの最高の贈り物であるということが理解できた時、私達は聖典がなぜ存在するのかを同様に理解することができます。世界中の多くの人は、自分たちが今持っている聖典にすべての神の言葉が入っていると信じています。本当にそうでしょうか？無限とも呼べるほどの知恵と知識をお持ちのお方のそのすべての情報が全部合わせてもわずか数百ページほどにしかならない紙媒体の記録に？そんなことがあるはずがないとニーファイは教えています。

「そして，わたしの言葉が響き渡るので，多くの異邦人は，『聖書か，聖書か。我々はすでに聖書を持っている。これ以外に聖書があるはずがない』と言う。しかし，主なる神はこう言われる。『・・・あなたがたは愚か者である。あなたがたはユダヤ人によらずに聖書を手に入れたか。あなたがたは，国民は数多くあることを知らないのか。主であり，あなたがたの神であるわたしがすべての人を造ったこと，またわたしが海の島々にいる者たちを覚えていることを知らないのか。またわたしが上は天で治め，下は地で治めていること，そしてわたしの言葉を人の子ら，すなわち地のすべての国民にもたらすことを知らないのか。さて，なぜあなたがたは，わたしの言葉がもっと多く与えられるからと言ってつぶやくのか。・・・わたしが一言語ったので，もう一言も語れないと思ってはならない。わたしの業はまだ終っていないからである。わたしの業は人の存在が尽きるまで終らないし，その後とこしえに終りがないのである。それゆえ，聖書を持っているからといって，**わたしの言葉がすべてそこに含まれていると思ってはならない**。また，わたしがもっと大切なことを書き記させなかったと思ってもならない。』」（2 ニーファイ 29：3-10）

もちろんニーファイはモルモン書の登場を示現で見てこれを説明しています。しかしここに書いてある神様の言葉「わたしの言葉がすべてそこに含まれていると思ってはならない」が真実であれば、たとえモルモン書があったとしても、まだまだ足りないのではないでしょうか。その事をさらに詳しくモルモン書の作者であるモルモンとその息子モロナイが説明しています。

「この記録を受け入れ，この中に不完全なところがあるからといって非難したりしない者は，**これらのことよりも大いなること**を知るであろう。見よ，わたしはモロナイである。**できれば**，**わたしはあなたがたにすべての事柄を知らせたい**。」（モルモン 8：12）

モルモンはこの金版の記録を作るのに 10 年以上の歳月を使ったと考えられます。さらに息子モロナイはその金版を受けとった後に 35 年もの間、敵の捜索から逃げ続けその記録を完成させました。彼ら親子にとってその「記録」とは生涯をかけたとても貴重な物に違いないのです。ところが、モロナイは「できればすべてを知らせたい」つまり別

の言い方をすれば「ここにはすべてが書かれているわけではない」と言っているのです。さらに、この記録、すなわち今私達が聖典として読んでいるものを受け入れて非難しなければ、「その記録に書いてあることよりも大いなること」を知るだろうと書いているのです。彼らが命がけで残した記録よりも大いなることとは何でしょうか？それが神の言葉であり、神の御心なのです。そして、それを知ることのできる唯一の方法が聖霊を通して学ぶということなのです。

人は聖典にすべてが書いてあると思い込み、同じところを何度も繰り返して読みます。確かに聖典は何度も読み返すことがとても重要です。しかし同じ繰り返しでも、「ここにすべてが書いてある」と思って読むのと、「更にこの上があるはず」と思って読むのでは違った結果が出てきます。パウロは何度も聖典を読んでも同じ事しか学ばない人、すなわち福音の第一原則と儀式、キリストの教義から離れることができない人に対して次のように語りました。

「そういうわけだから、わたしたちは、キリストの教えの初歩をあとにして、完成を目ざして進もうではないか。今さら、死んだ行いの悔改めと神への信仰、 洗いごとについての教えと按手、死人の復活と永遠のさばき、などの**基本の教えをくりかえし学ぶことをやめようではないか**。 神の許しを得て、そうすることにしよう。」（ヘブル 6：1-3）

「しかし今は、わたしたちをつないでいたものに対して死んだので、わたしたちは律法から解放され、その結果、**古い文字によってではなく、新しい霊によって**仕えているのである。」（ローマ 7：6）

聖典は預言者が「**啓示者である聖霊**」の力を受けて書き残した記録です。ですから読み手も同じように聖典の文字だけを見るのではなく、その文字が書かれる元となった聖霊による啓示を求めて読まなければ決して真の要点を見出すことができません。ニーファイもパウロと同じように説明しています。

「さて見よ，わたしの愛する同胞よ，あなたがたはその道によって入ってからどのようにすればよいのか，多少心の中で深く考えていると思う。しかし見よ，なぜこれらのことを心の中で深く考えているのか。 あなたがたは，聖霊を受けたら天使の言葉で語ることができるとわたしが言ったことを覚えていないのか。また，聖霊によらなければ，どうして天使の言葉で語ることができようか。天使は聖霊の力で語る。したがって，天使はキリストの言葉を語る。さて，わたしは，キリストの言葉をよく味わうようにあなたがたに言った。見よ，キリストの言葉はあなたがたがなすべきことをすべて告げるからである。さて，わたしがこれらのことを述べても，あなたがたが理解できないとすれば，それはあなたがたが求めもせず，また，門をたたきもしないためである。それゆ

え，あなたがたは光の中に導かれず，闇の中で滅びてしまうに違いない。見よ，わたしは，もう一度あなたがたに言っておく。あなたがたがその道によって入り，**聖霊を受けるならば，聖霊は，あなたがたがなすべきことをすべてあなたがたに示されるであろう。見よ，これがキリストの教義である**。」（2 ニーファイ 32:1-6）

キリストの教義は何もかも忘れてしまった私達が、この世においてそれを取り戻すためのたった一つの道ですが、ずっとそこにとどまっていてはせっかく準備されている神の教えも、個人の啓示も受けることができません。すべてを知るために先へと進む必要があるのです。

イエス様がくださる生ける水

イエス様がユダヤにおられた頃、弟子たちと共にサマリヤを通られたことがありました。その時、弟子たちが昼の食物を買いに出払っている間、イエス様は町の近くの井戸で休んでおられました。そこへ一人のサマリヤの女が水を汲みに来ます。この時の会話がヨハネの福音書 4 章に書かれていますが、ヨハネがこの記録を書いたのがイエス様と共に伝道したときよりも 70 年以上も後の話だとすれば[66]、ヨハネは歴史に重点を置くよりも、自分がイエス様と伝道した時の事を思い出しながら、私達にとってとても役に立つであろう重要な事を選んで書き残したと考えられます。ですからこのサマリヤの女の話を今一度考えてみましょう。

サマリヤはもともとイスラエルの北王国があった土地で、イエス様が来られる 700 年以上前にアッスリヤによって滅ぼされました。その時の生き残りの人たちが別の移民と混血になってサマリヤの町で子孫を増やし、サマリヤ人として暮らしていました。当時のユダヤ人にとって混血となったサマリヤ人は見下すべき存在であり、交流するのも嫌われるほどの人々でした。サマリヤ人側もそのことは良く知っていました。そんな中、井戸で休まれていたユダヤ人であるイエス様が、水を汲みに来たサマリヤの女に「水を飲ませてください」と訪ねたので、女は驚いて答えました。

「あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤの女のわたしに、飲ませてくれとおっしゃるのですか？」（9 節）

交流がなく、無視すべき存在であったサマリヤ人に声をおかけになったこの見知らぬユダヤ人に、その女が驚くのは当然でした。しかし、イエス様は続けて言われました。

---

[66] ヨハネが福音書を記録したのはパトモス島から開放されて、黙示録を記録した後と言われている。別資料「ヨハネの黙示録の読み方の解説」参照。

「もしあなたが**神の賜物のことを知り**、また、『水を飲ませてくれ』と言った者が、だれであるか知っていたならば、あなたの方から願い出て、その人から**生ける水**をもらったことであろう。」（10 節）

サマリヤ人もまた失われてしまったイスラエルの子羊なのです。そんな彼女にかけた言葉は何も知らない彼女を困惑させました。

「主よ、あなたは、くむ物をお持ちにならず、その上、井戸は深いのです。その生ける水を、どこから手に入れるのですか。 あなたは、この井戸を下さったわたしたちの父ヤコブよりも、偉いかたなのですか。ヤコブ自身も飲み、その子らも、その家畜も、この井戸から飲んだのですが。」（11－12 節）

今まさにキリストの教義の真髄を教えられようとしているこの女性にとって、この話はあまりの突然の出来事で、どこからこの不思議な人の話を理解したら良いか戸惑っていたと思います。そこでイエス様はやさしく彼女が理解できるようにキリストの教義を解きほぐし始められました。

「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。 しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、**わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう。**」（13 節）

イエス様はここでふたつの水の話をされています。一つはイエス様が与える水。もう一つはそれを取り入れることによって私達の体の内で泉となって湧き上がる水です。どちらも生ける水、すなわち永遠の命に至る水です。

このたった数回の会話でイエス様はキリストの教義の真髄を教えられました。イエス・キリストを信じ彼の教えを理解し、その後に続く聖霊の教えから更に大いなるものを得ようとする人は体のうちにある聖霊の賜物を通して聖霊から溢れんほどの知恵と知識を得ることができるようになります。

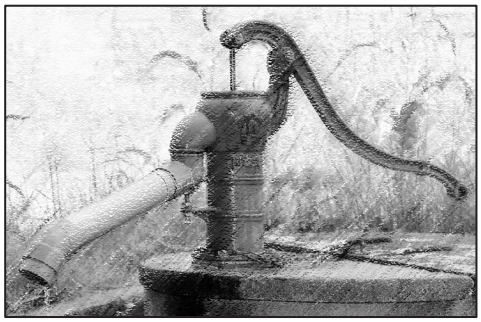


図27　手押しポンプ

昔、日本の各所では井戸のそばに「手押しポンプ」というものが見られました。金属製のポンプで大きなテコのような取っ手が付いていて、それを上げ下げすることで井戸から冷たい水を汲み上げていました。ところが、一番最初に水を汲む時は、いくら取っ手を上げ下げしても何の抵抗もなく、空気が抜けるだけで一向に水はあがってきません。このポンプは真空を利用したポンプなので、最初に空気がポン

プの中に入ってこないようにポンプの上から少量の水を入れる必要がありました。それを入れるとポンプの中が真空になり、驚くほどの量の水が井戸から出てくるようになります。この最初に入れる水は井戸の中の水を呼ぶためのものとして「**呼び水**」と呼ばれます。

イエス様はサマリヤの女に自分が教えることは「呼び水」だと教えたのです。そしてその呼び水を受け入れると、今度は聖霊があふれるほどの教えを体の内から湧き出させてくれると教えられました。それを聞いてイエス様の事をもしかするとあの予言されていた救い主ではないだろうかと考えるようになった彼女は、町に行って沢山の人を呼んできました。そして多くの人たちが二日間にわたってイエス様の話を聞いた後、それを信じて次のように彼女に言いました。

「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。**自分自身で親しく聞いて**、この人こそまことに世の救主であることが、わかったからである」（42節）

求める人には必ず聖霊が心のうちに強い確信をもたらしてくださいます。ニーファイは神様が準備してくださった「聖霊に尋ねることができる」という方法を通すことで、熱心に求める人は必ず「**神の奥義**」を見出すことができると説明しています。

「さて，わたしニーファイは，父が示現の中で見たこと，また父が来たるべきメシヤである神の御子を信じる信仰により授かった**聖霊**の力によって語ったことについて，父の言葉をすべて聞いた後，わたしニーファイもまた，**聖霊**の力によってこのようなことを見聞きし，また知りたいと思った。**聖霊**とは，昔の時代でも，またメシヤが人の子らにと御自身を現される時でも，およそ神を熱心に求めるすべての人に神が与えられる賜物である。神は，昨日も，今日も，またとこしえに変わることのない御方だからである。人々が悔い改めて神のもとに来るならば，世の初めから，すべての人にその道が備えられている。**熱心に求める人は見いだすであろう。神の奥義は聖霊の力によって**，昔の時代のみならず今の時代にも，またこれから先の時代のみならず昔の時代にも，**同じようにその人々に明らかにされる**。したがって，主の道は一つの永遠の環である。」（1ニーファイ 10：17-19）

キリストの教義を理解し、その先にさらに学びがあることを知る時、私達は生涯をかけて聖霊を通して天のお父様から直接個人的に学ぶことができるようになるのです。

イザヤ書とヨハネの黙示録

パウロがまだ学び初めの人でも聖霊はちゃんとささやいてくれているのだと「御霊の実」を通して教えてくれたように、私達は求めれば日々の生活の中で聖霊の言葉に耳を傾けることができます。しかし、さらに大いなる事を知ろうとするのであれば、また自分に与えられたこの世での使命を知り、どのように神様の計画の一部を担うことができるのかを知るためには、私達は**学ぶ努力**をする必要があります。ウリムとトンミムや聖見者の石を通してジョセフ・スミスが訓練を受け続けて、最終的にやっと彼の使命であった聖見者になるというところまで登ることができたように、私達も同じような努力をすることによって自分の使命にたどり着けるのではないでしょうか？ジョセフ・スミスがウリムとトンミムや聖見者の石というような訓練の道具を与えられたように、私達にも聖霊からより大いなるものを学ぶための訓練の道具が与えられています。それが**イザヤ書**と**ヨハネの黙示録**です。

イザヤ書は旧約聖書に、そしてヨハネの黙示録は新約聖書に書かれていて、世界中の人が目にすることができますが、この 2 つにはある共通点があります。それは「読むことが難しい」ということです。なぜでしょうか？私達はヨハネが書き残した他の記録も持っているので、ヨハネが書こうと思えば普通の言葉で書けたことを知っています。おそらくイザヤもそうなのでしょう。でもこの二人がある特定の言葉で、特別な事柄を分かりにくく書き残したのには理由があります。彼らが示現を通して見たことはたくさんありますが、その中でも共通して見ていることはある 2 つのことです。一つは末日にシオンを作るために働く、聖徒と呼ばれる異邦人の集団がいること。そしてもう一つはその人達に神様の正しいメッセージがうまく伝わらないように聖書を書き変えたり消したりする敵の存在があることです。イザヤとヨハネのメッセージは最初から神様の計画が人々の間にあったと知らせるため、モルモン書ではなく聖書に書かれて世界中の人に知られる必要がありました。しかし、同時に消されたり、書き変えられたりすることがないように、末日に来る聖徒だけが分かるように暗号のような形にして私達にメッセージが伝わるようにする必要があったのです。

「さて見よ，わたしはあなたがたに言う。あなたがたはこれらのことを調べなさい。まことにわたしは，これらのことを熱心に調べるようにという戒めを，あなたがたに与える。イザヤの言葉はまことに偉大だからである。確かにイザヤは，イスラエルの家に属するわたしの民について，すべてのことを述べた。**そこで，どうしても彼は異邦人にも語る必要があった**。」（3 ニーファイ 23：1-2）

これはイエス様の言葉ですが、イエス様が私達にイザヤの言葉をただ読むだけではなく「調べなさい」と言われ、それを戒めとされた時に説明されたものです。イエス様はイザヤがどうしても異邦人、特に末日に真の福音を知る異邦人、つまり私達について語る

必要があったと言われているのです。また別の箇所ではヨハネの黙示録についても説明しておられます。

「主がわたしに，『異邦人が彼らの罪悪を悔い改めて，わたしの前に清くなる日まで，これらのものは異邦人に伝わることがないであろう』と言われたからである。また，主は言われる。『彼らがわたしによって聖い者となるために，ヤレドの兄弟のようにわたしを信じる日に，わたしはヤレドの兄弟が見たことを彼らに示し，わたしが啓示したことをすべて彼らに明らかにしよう』と，神の御子であり，天地とその中にある万物の父であるイエス・キリストは言われる。・・・その後，わたしが**僕ヨハネに書き記させたわたしの啓示**は，すべての民の目に明らかにされるであろう。覚えておきなさい。あなたがたはこれらのことを目にするとき，その啓示が実際に明らかにされる時の近いことが分かるであろう。」（エテル 4：6-7，16）

これら 2 つの書物はある特定の方法を理解しなければ読み進めて行くことができません。これらの書物は敵の手によって滅ぼされないように暗号文で書かれているからです。書いた側であるイザヤとヨハネは末日の聖徒がその暗号文を解くための鍵を持っていると知っていて、あえてこのような書き方をしています。その鍵とはこの時代だけに与えられた聖典、そして真の内容が回復された聖書、生ける預言者の言葉、そしてニーファイが言うこの次の事です。

「したがって，聴きなさい，おお，イスラエルの家に属するわたしの民よ。わたしの言葉に耳を傾けなさい。イザヤの言葉はあなたがたには分かりにくいが，**預言の霊に満たされている人々には分かりやすい**。」（2 ニーファイ 25：4）

予言の霊は通常、預言者が持つ御霊の賜物のことだと思われますが、その預言者が御霊の賜物を使うためには当然聖霊の現れがなければなりません。預言者は啓示を記録しますが、啓示は啓示者である聖霊を通して与えられるからです。当然のことですが、昔のレコードのように、針で削って記録されたものは、針でその溝を読み取る必要がありますし、磁気で記録されたものは磁気で読み取る必要があるのと同じように、聖霊の力によって書かれたものは聖霊の助けを借りて、私達のうちに少しでも宿っているであろう予言の霊という御霊の賜物を使って理解する必要があるのです。イザヤ書とヨハネの黙示録が他の聖典と違って、これほど聖霊の助けを必要とするのは、それを読んで理解するのはもちろんのこと、それを読みこなすことによって聖霊の助けを受ける訓練となるからなのです。

たとえば、私たちの中には筋肉を鍛えるためにジムに通うという人もいると思います。中には 100Kg のバーベルを持ち上げることができるようになりたいと思っている人もいるでしょう。ところが、いくら毎日ジムに通っても、毎回 5Kg とか 10Kg のバーベルを

持ち上げる練習だけをしていたら、一体いつ100Kgのバーベルを持ち上げることができるようになるのでしょうか？いつまでたってもそれが現実になることはないでしょう。100Kgのバーベルを持ち上げたかったら、徐々に重さを増やして最終的には100Kgのバーベルで練習しなければ、決して持ち上げるようにはなりません。

イザヤ書は100Kgのバーベルなのです。そしてそれによって鍛えられる筋肉は、聖典や個人の啓示を聖霊の力によって理解する力なのです。ジョセフ・スミスがその力を手に入れた時の事を次のように記録しています。

「今やわたしたちの心に光が注がれ，わたしたちは**聖文をはっきりと理解できるようになってきた**。より不明瞭な聖句の正確な意味と意図が，以前に一度も経験することのできなかった方法で，あるいは**以前に考えもしなかった方法でわたしたちに明らかにされた**のである。」（ジョセフ・スミス－歴史1；74）

100Kgのバーベルが持ち上げられるようになったら、5Kgや10Kgのバーベルはどんなに軽いことでしょう。普通の聖典はとてもわかりやすい、5Kgや10Kgのバーベルです。イザヤ書が読めるようになって、普通の聖典に戻ると、驚くほど明瞭に私達の心に光がさすように聖文の意味が理解できるのを感じられるようになると思います。さらにイザヤ書が読めるようになると、自然にヨハネの黙示録が読めるようになります。ヨハネの黙示録はイザヤ書にくらべればだいたい30Kgのバーベルだからです。なぜそのように言うかと言うと、イザヤは世界のすべてを書き表しましたが、ヨハネは「これから起こること[67]」だけに集中して、自分が見た最後の時に起こる示現のみを書き残しているからです。

イザヤとヨハネは当然ながら末日の聖徒だけではなく、世界中の人類に向けて記録を書きました。彼らの記録の最終目的は終わりの日にキリストがもう一度来られてシオンを設立することを全世界に知らせる事にあります。一体、誰が、何の目的で、どのように最後の日とシオンがやって来るのかを示しましたが、その最終段階で働く末日の聖徒に向けては「どのようにすればシオンができあがるのか」を重ねて書き記しています。ですから私達末日の聖徒は、これらの聖典が「自分たちに向けて書かれたものである」と信じて、祈りを通して読むと一層聖霊からの訓練を受け続ける事ができて、理解が次第に深まっていくと思います。

モロナイは人が聖霊の教えを受けられるようになるためには、訓練を受けることが必要であることを充分理解していました。自分もそのようにして理解に到達したからです。

---

[67] 黙示録４：１参照

そこで彼は未来に来るであろうジョセフ・スミスとともに福音を回復し、シオンを築くであろう末日の聖徒に向けて一つの重要な提案を投げかけています。

「イザヤの予言を調べなさい」（モルモン 8：23）

とても短い一言ですが、モロナイがこの言葉を語るのはとても重要な意味を持ちます。モロナイはヤレドの記録を手に入れて、すでにそれを読んでいるからです。つまり、彼は最後の日に、全世界に向けて読まれるであろう金版の封じられた部分の内容を知った上で、この事を私達に提案しているのです。言ってみればテストの答えを知っている教師が、テストをこれから受けるであろう生徒たちに向かって、このテストを受けるにあたって**最も効果的な勉強方法のヒントを**与えてくれているのです。末日の聖徒が終わりの日の試しをくぐり抜け、見事シオンを建設するためにもこの提案を受け入れることがとても重要になります。そうしなければサタンに打ち勝ち、神様の御心にたどり着くことができないからです。

教訓に教訓

イザヤはその記録の中で「神様が人に真理を教える教え方」を記録しています。それは次の聖句です。

「それゆえ、主の言葉は彼らに、**教訓に教訓**、教訓に教訓、**規則に規則**、規則に規則、**ここにも少し、そこにも少し**となる。[68]」（イザヤ 28：13）

この聖句は人が神様から学ぶ段階を逆の順番で表したものです。人は生まれながらにしてキリストの光の中に生まれてきます。ですから、自然にこの世において何が良くて、何が悪いのかを理解することができます。これが神が人に教えを与えられる最初の段階「**ここにも少し、そこにも少し**」です。やがて人はキリストの教えにたどり着き、その律法を学び、最初はその意味がわからなくても、最初のアダムがそうであったように[69]神の言葉にしたがって教えや戒めを努力して守るようになります。これが神様の教え方の第二段階、「**規則に規則**」です。言われたことを守るという教えですから、ある意味アロン神権レベルの段階ということができます。しかし人はこの段階を熱心に行い学び続けることによって「自ら考え始める」ところにたどり着かなければなりません。これがパウロが言うところの「わたしたちは、キリストの教の初歩をあとにして、完成を目ざして進もうではないか[70]」になります。いつまでもいつまでも同じ所を繰り返し

---

[68] この聖句の前後が理解しにくい場合には 2 ニーファイ 28：30 を参照のこと
[69] モーセ 5：6 参照
[70] ヘブル 6：1-3

て意味も知らずにただ戒めを守り続け、強制されているかのような感覚で毎週教会に集い、まるで習慣であるかのように毎日決まった時に祈るだけでは同じところを回り続けているだけに過ぎません。そうではなく、律法や戒めの中にある「意味」を自ら考え始めて、「その上には何があるのだろう？」と神様から直接答えを求めようとする時、私達は神様が人に教えられる第三段階の「**教訓に教訓**」に入ります。

教訓に教訓とは求め続け、探し続け、祈り続ける時にだけたどり着くことのできる「聖霊によって教えてもらえる」段階です。ニーファイは父リーハイから木の夢の話を聞かされ、父がそれを聖霊の力によって理解したと聞いた時、自分にもそのチャンスが与えられるのではないかと考え始めました。そして聖霊に教えてほしいと頼んだ時、聖霊は声高らかに叫んで、次のように言われました。

「わたしがこれらの言葉を語ると，御霊[71]は声高らかに叫んで言われた。『いと高き神にまします主に，ホサナ。主は全地を支配される神，まことにすべてのものの上にまします神であられる。ニーファイよ，あなたはいと高き神の御子を信じているので幸いである。それゆえ，あなたは**望んでいたものを見るであろう**。』」（1 ニーファイ 11：6）

そしてニーファイはその言葉とおり、父の夢の解き明かしを受け、更にそれだけではなく、その後に自分の子孫に起こる全ての出来事を見、そして最後に自分の子孫に救いをもたらしてくれる異邦人の集団、末日の聖徒たちを見ました。だからこそ、彼はその後何度も、末日の聖徒に対し、自分が経験したと同じことを経験できるのだと書き続けているのです。ニーファイは自分が尋ねた時、聖霊は喜んでくれたことを記録しました。それは私達が尋ねても同じです。そのために聖霊は存在してくださっているのです。私達がそこにたどり着く時、聖霊は惜しげもなく私達に真理に関する知識を与え、「〇〇〇（あなたの名前）よ，あなたはいと高き神の御子を信じているので幸いである。それゆえ，あなたは望んでいたものを知るであろう。」と声高らかに言われるのではないでしょうか。

[71] ここでいう「御霊」が聖霊の事を指しているかどうかははっきりとはわかっていませんが、前後の話しの内容からして聖霊である可能性は高いと思われます。たとえそうではなくても、聖霊もその場におられれば同じように言われるのではないでしょうか。

10 章：聖徒として新たに生まれ変わる

聖霊からの教えは真実の教えです。それを知る時、私達は本当の記憶を取り戻し「末日の聖徒」に少しずつ生まれ変わり始めることができます。しかし、忘れないでください。末日の聖徒は、この世の王であるサタンにとっては最大の敵です。当然、サタンとその使いである悪霊たちはその邪魔をしてきます。ですからサタンの攻撃方法についてよく理解し、その罠に陥らないようにすることがとても重要になります。

教義と聖約 1 章とイザヤ書 1 章に込められた意味

教義と聖約は回復された教会の教会員たちが、これからどのように教会を強くし、福音を世界中に広めて、イスラエルを集め、シオンを建設するのかが書かれた書物です。そしてイザヤ書が、それをより深く理解するのに必要不可欠な、聖霊からの教えを受ける訓練のための書であるとするのなら、この 2 つの書物にはある共通した特徴があります。それはどちらとも第一章が歴史の順番ではなく、ある目的を持って第一章になったという点です。

イザヤ書の現在の第一章が、なぜ今の位置に来たのかは誰も知りません。しかし、最初の部分に彼が仕えた 4 人の王の名が上げられており、第 4 番目にヒゼキヤの名前があることから、第一章はかなり人生の後半で書かれたことがわかります。もちろん、イザヤがヒゼキヤの時代に預言者に召されて、その最初の示現がこれだったということも考えられますが、6 章にもっと詳しく、彼が預言者として示現を通して召された時の話がありますので、おそらく 1 章はその後に与えられたものと考えることもできます。

それと同様に教義と聖約の第一章は 1831 年 11 月 1 日に与えられたと記録されていますので、教会設立後、約一年半が過ぎた頃に与えられた啓示ということになります。イザヤ書 1 章がなぜ現在の位置にあるのかはわかりませんが、教義と聖約の 1 章が今の位置になった理由ははっきりとわかっています。それは教会の中でジョセフ・スミスに与えられた啓示が増えてきて、教会の指導者たちがそれを集めて一つの本「戒めの書」として出版しようとして準備していた時に、神様から直接この啓示をその本の「はしがき[72]」とするように命じられたからです。おそらくイザヤ書の 1 章も同じような理由があったのではないでしょうか。なぜならこの 2 つの書は大変似通っていて、どちらも教会員の罪について語られているからです。

心を謙遜にし、悔い改めてバプテスマを受けたばかりの人が、これらの書を読むとあまりの厳しい言葉に驚かれるかもしれません。何度も「悔い改めなさい」と言わ

[72] 教義と聖約 1：6 参照

れているからです。でもそこにはちゃんとした理由が存在します。書いてある内容を真剣に理解しようとし、与えられている聖霊の賜物を使って聖霊からの教えを心に留めようとする時、最も邪魔になるのが、慢心、つまり「高慢」です。

御霊の賜物が一人ひとりに違うものが与えられているのであれば、一人ひとり違う努力が必要になると思いませんか？それにもかかわらず多くの教会員が他の人と同程度の事をしていれば結局救われるのではないかと勘違いしてるのはなぜでしょうか。そこには高慢の罠があります。「この程度の事をしていれば大丈夫」「他の人もこのくらいしかしていないのだから、咎められることはない」。確かに咎められることはないかもしれませんが、それは同時に「それ以上学べる機会も与えられない」ということに繋がります。一人ひとりに違う御霊の賜物が与えられているからです。一人ひとりが自分に合った方法で努力し、また学んで行く必要があります。そのためにどうしても、まず謙遜になって自分が高慢になりかかっていることに気が付く必要があるのです。

あなたが高慢になるのを見た

再度モロナイが語った次の言葉の意味を考えてみてください。この言葉は教会外に人にではなく、教会員に向けて書かれたものです。

「**わたしは，あなたがたが心を高慢にして歩くことを知っている**。心を高慢にして高ぶることをしない者はわずかしかいない。高慢な者は，非常に華やかな衣服を着て，ねたみや争い，悪意，迫害，またあらゆる罪悪に染まる。また，**あなたがたの教会，まことにすべての教会は，あなたがたの心が高慢なために汚れたものになってしまった**。」（モルモン 8：36）

私達はバプテスマを受けた時、とても純粋に喜びに満たされ、「これから頑張っていこう」と決心するのではないでしょうか。しかし、長く教会員を続けていくにつれ、日々の生活の大変さから周りの教会員の普段の態度や生活を自分の「ある程度の標準」として身に付けてはいないでしょうか？「このくらいやっていれば立派な会員」などという聖典のどこにも書かれていない幻想を自分に当てはめて、新会員や若人、あるいは自分よりも指導的立場にいない兄弟姉妹を見下したりしていないでしょうか？自分の考えで、相手の外見だけで人を裁いてしまうような事はないでしょうか？イザヤ書も黙示録も学んでいない、すなわち聖霊からのトレーニングをまだ受けてもいないのに、聖霊に教わったつもりでいるのではないでしょうか？これらが行き着くところは高慢の大地です。気が付かないうちにサタンが準備した架空の大地が盛り上がり、その架空の大地の上に立ってしまうから、周りの人達が低く見えてしまうのです。これではいつまでたってもイエス様が言われた「新しく生まれる」にたどり着くことなどできるはずがありません。

だからこそ、これから主の器を担う者になるために、その身を清め、聖霊から教えを受けて新しく生まれる準備をしなさいと、イザヤ書と、教義と聖約の第一章は教えてくれているのです。イザヤ書を学ぶようにと教えてくれたモロナイがそのすぐ後に書き残した次の言葉に注意を払うべきです。

「見よ，神の啓示に頼りなさい。」（モルモン 8：33）

自分の知恵に頼ろうとする時、聖霊は遠のいていきます。そうではなく、この世で過ごす最後の瞬間まで、私達は神様の知恵に頼るべきです。そうすれば、神様の深い御旨と深い哀れみを知ることができるようになります。知識は自分で努力して得るものですが、知恵は神様から与えていただくものです。神様の知恵を頂くことができれば、自分の努力によって蓄えた知識をも効果的に使えるようになります。

生まれながらの人を捨てて聖徒となる

新しく生まれるということは古い自分と決別するという意味です。新しく生まれるとは何度も再生されるという意味です。鉄は灼熱の火の中で何度も溶かされ、打ち直されて強く鍛えられていきます。私達はキリストの導きによって聖霊を感じ、天父の御心を知って火と霊によるバプテスマを受けて何度も新しく生まれ変わります。パウロの次の言葉を読んでください。

「**だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である**。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。」（2 コリント 5：17）

自分が生まれる前に約束をしたかもしれないという記憶を取り戻そうとする時、私達はいつまでも同じ生活の中では生きていくことができません。「聖徒」となるために「生まれながらの人」を捨てる必要があります。

「生まれながらの人は神の敵であり，アダムの堕落以来そうであって，今後もそうである。また人は，聖なる御霊の勧めに従い，主なるキリストの贖罪により，**生まれながらの人を捨てて聖徒となり**，子供のように従順で，柔和で，謙遜で，忍耐強く，愛にあふれた者となり，子供が父に従うように，主がその人に負わせるのがふさわしいとされるすべてのことに喜んで従わないかぎり，とこしえにいつまでも神の敵となるであろう。」（モーサヤ 3：19）

末日聖徒イエス・キリスト教会が組織される前に、ジョセフ・スミスが召され、神権が回復されたその順番から、まず聖徒が召されて、その後に教会が組織されたことがわかります。教会は聖徒がそれぞれの持つ御霊の賜物を使って働くための神様が用意された舞台です。ですから（教会員＝聖徒）ではありません。しかしすべての教会員は必要なプロセスを通って、やがて本当の意味で聖徒となる必要があるのです。では必要なプロセスとは何でしょうか。それは神様の与えられる訓練です。

先程、鉄は灼熱の火の中で鍛えられて生まれ変わるという話をしましたが、人も同じです。パウロはこの訓練について次のように説明しています。

「あなたがたは、罪と取り組んで戦う時、まだ血を流すほどの抵抗をしたことがない。また子たちに対するように、あなたがたに語られたこの勧めの言葉を忘れている、『**わたしの子よ、主の訓練を軽んじてはいけない。主に責められるとき、弱り果ててはならない。主は愛する者を訓練し、受けいれるすべての子を、むち打たれるのである**』。あなたがたは訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを、子として取り扱っておられるのである。いったい、父に訓練されない子があるだろうか。だれでも受ける訓練が、あなたがたに与えられないとすれば、それこそ、あなたがたは私生子であって、ほんとうの子ではない。その上、肉親の父はわたしたちを訓練するのに、なお彼をうやまうとすれば、なおさら、わたしたちは、たましいの父に服従して、真に生きるべきではないか。肉親の父は、しばらくの間、自分の考えに従って訓練を与えるが、たましいの父は、わたしたちの益のため、そのきよさにあずからせるために、そうされるのである。すべての訓練は、当座は、喜ばしいものとは思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるようになる。」（ヘブル 12：4-11）

二種類の試練

人は誰しもこの世に来て必ず試しに会い、そして鍛えられていきます。その試しの中で人は必ず「なぜ私だけがこのような目に会うのだろうか」と考えます。しかし試しに会わない人などこの世には存在しません。この世は学ぶための学校ですから、そこで学ぶことはほとんどが試しを通して教えられます。人は前世においてそれぞれ違うレベルに成長しています[73]ので、この世においても学ぶ試しの方法は様々になります。

「そして，わたしたちはこれによって彼らを試し，何であろうと，主なる彼らの**神が命じられるすべてのことを彼らがなすかどうか**を見よう。」（アブラハム 3：25）

そして、その試しは別の言葉で言えば「**訓練**」ですから、いつかその試しにも終わりは来ます。その間をどのように過ごすのかが試されるのです。世の中の多くの人は試しに会う時に「自分の生まれが悪いから」とか「自分に才能がないから」と、自分が今持っている状況を嘆き、多くの人がその試しを乗り越えることを諦めてしまいます。しかし、神様が見られるのは生まれた時の環境や姿形、才能や財産ではありません。その環境がどうであれ、そこからどれほどの努力しようとするかという私達の心を見ておられるのであり、実際にそれをどのように努力したのかで私達の行いが判断されるのです。

[73] アブラハム 3：22 参照

「しかし主はサムエルに言われた、『顔かたちや身のたけを見てはならない。わたしはすでにその人を捨てた。わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見、**主は心を見る**』。」（サムエル 16：7）

試練は訓練ですから、たとえそれが長く時間がかかるものであっても、必ずそれを乗り越えることができます。パウロとニーファイは人生の中でそれを理解して、私達に向けて次のように記録してくれました。

「あなたがたの会った試錬で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを**耐えられないような試錬に会わせることはないばかりか**、試錬と同時に、それに耐えられるように、**のがれる道も備えて下さる**のである。」（1 コリント 10：13）

「そこで，わたしニーファイは父に言った。「わたしは行って，主が命じられたことを行います。主が命じられることには，それを成し遂げられるように**主によって道が備えられており**，それでなくては，主は何の命令も人の子らに下されないことを承知しているからです。」（1 ニーファイ 3：7）

しかしできることならば、この世での厳しい試練はなるべく避けて通りたいと思うでしょう。それはある意味可能です。先程試練の無い人はないと言いましたが、もしそうであるのなら、イエス様が教えられた祈りの言葉の中に次の言葉があるのはなぜでしょうか。

「**わたしたちを試みに会わせないで**、悪しき者からお救いください。」（マタイ 6：13）

実は試練には大きく二つのものがあることを理解してください。一つは先程から話している「神様から与えられる訓練」、もう人一つは「私達が罪を犯すために訪れる責任の結末」です。人はこの世に生まれる時に肉体と、もう一つ自由意志というものが与えられます。その上でキリストの光の中に生まれ落ち、自由意志によってキリストの光が導く方を選ぶかどうかが試されます。選ぶか選ばないかはその人の自由ですが、どちらを選んでも必ずその選びの結果がつきまといます。良いものを選ぶ人には良い結果が与えられます。当然のことですが、悪いものを選ぶ人には悪い結果がおとずれるのです。この悪い結果は神が訓練のために最初から準備されたものではないので、人はその犯した罪の報いを受け、償いをすることが求められます。人は神様が準備された訓練である試練だけでもう充分なのです。イエス様が教えられたのは、すでに神様からの訓練を受けているのに、自分で罪のための試練を呼ぶようなことをしないようにと言われたのです。教義と聖約の中で主はこの事について更に詳しく教えられています。

「見よ，まことに，まことに，わたしはあなたがたに言う。今やあなたがたの罪は赦されているので，あなたがたはこれを受けている。しかし，**数々の危難があなた**

がたに及ぶことのないように，よく覚えておいて**これからはもう罪を犯さないようにしなさい**。」（教義と聖約 29:3）

もう一度言いますが、私達は神様が私達の訓練として準備される試練を受けるだけで、もう充分なのです。自らの罪によって新しい試練を招く必要は微塵もありません。

試練と誘惑

では神様が試練を与えられるということは、その時の誘惑は神様から来るのでしょうか。それもまた違います。神様は善なるお方ですから人を誘惑するようなことはされません。新約聖書の中でヤコブが次のように説明しています。

「だれでも誘惑に会う場合、『この誘惑は、神からきたものだ』と言ってはならない。神は悪の誘惑に陥るようなかたではなく、また自ら進んで**人を誘惑することもなさらない**。」（ヤコブの手紙 1：13）

では試練には必ずつきもののように思える誘惑と試練の関係をどのように考えればよいのでしょうか。次のように説明することができます。まず私達はこの世で成長するために神様から数え切れないほどの恵みを与えられています。本当に数え切れないほどです。神様が与えられる試練というのは、その恵みが神様の計画によって**一時的に**停止、あるいは中断されるようなものだと理解してください。生まれた時から神様の恵みの中に生きている私達は、神の恵みが止まる時、おそろしく不安に駆られます。そして「この先どうなるのだろう？」と必ず将来の事を心配します。そこに来るのがサタンの誘惑です。神様が人を誘惑されるのではなく、サタンが人を惑わし誘うのです。

「また，**悪魔が人の子らを誘惑するのは必要である**。そうでなければ，人の子らは自ら選択し行動する者とはなれない。苦いことを経験しなければ，甘いことを知ることができないからである。」（教義と聖約 29：39）

この世において、訓練の一環として神様はあえて、その恵みを一時的に止めて、そこでサタンが人を誘惑することを許し、人がそれに耐えうるかどうかを見ておられるのです。ヨブが試練に会った時の最初の神様とサタンの会話を思い出してください。

「サタンは主に答えて言った、『ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。・・・あなたは彼の勤労を祝福されたので、その家畜は地にふえたのです。しかし今あなたの手を伸べて、彼のすべての所有物を撃ってごらんなさい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう』。主はサタンに言われた、『見よ、彼のすべての所有物をあなたの手にまかせる。ただ彼の身に手をつけてはならない』・・・

主はサタンに言われた、『見よ、彼はあなたの手にある。ただ彼の命を助けよ』。」（ヨブ 1：9-12；2：6）

ヤコブは人が誘惑に陥る恐ろしい段階を次のように描写しています。

「人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。 欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す。 愛する兄弟たちよ。思い違いをしてはいけない。」（ヤコブの手紙 1：14-16）

生まれた時から存在し、それが当たり前で普段は気にも止めることのない神様からの祝福の内のたった一つが突然止まる時、私達は極度の不安に陥り、そこにサタンが来て心を誘惑します。この神様の恵みはあくまでも訓練として「一時的に」止まっているだけですから必ず戻ってきます。しかし、人は心が強くなければその誘惑に負けてしまいます。それではどのようにすればこの誘惑に打ち勝つことができるのでしょうか。

もし神様がはっきりと「祝福を一時的に止めますが、また決められた時期が来れば再開されます。」と明言され、その再開時期も教えてくだされば、私達はおそらくサタンの誘惑に打ち勝つことができるでしょう。しかしそれが無いために心に保証が持てず、不安になります。実際には今までの人生の中で何度も同じことを経験し、神様の祝福が再開されることを知っているにも関わらず、今回の試練は今までとは違うと考えてしまうのです。つまり、これを乗り切るためには神様が言及してくださる代わりの何かが必要になるわけです。心に灯る神様からの保証。それを伝えてくださるのは聖霊をおいて他にありません。

試練にあってサタンの誘惑が来る時、私達は惑わされ、つい他の人間の言葉やメディア、広告や思想、宗教や社会通念などに心が引っ張られることがあります。しかし、人間の考えではなく、直接神様から来る個人の啓示を啓示者である聖霊を通して受ける時、心に平安がもたらされ、パウロやニーファイが言うように「きっと道が備えられている」と心に確信を持つことができるようになります。これが訓練です。人の言葉や考えに惑わされずに、聖霊からの導きを待ち望む人はその誘惑に打ち勝ち、神様の訓練を耐え抜くことができるのです。

「・・・それは，あなたがたが邪悪な霊，あるいは悪霊の教義，または人間の戒めに打ち負かされないためである。あるものは人間から出ており，またほかのものは悪霊から出ているからである。**それゆえ，欺かれないように気をつけなさい。そして，欺かれないために熱心に最善の賜物を求め，それらが何のために与えられているのかを常に覚えておきなさい**。」（教義と聖約 46：7-8）

「賢くて，真理を受け入れ，**自分の導き手として聖なる御霊を受け**，そして欺かれなかった者，すなわち，まことにわたしはあなたがたに言うが，彼らは切り倒されて火の中に投げ込まれることなく，その日に堪えるであろう。」（教義と聖約 45：57）

8 歳でバプテスマを受ける意味

この教会では子どもたちは生まれた時の洗礼ではなく、8 歳でバプテスマを受けるようにと言われています。

「その子供たちは，**八歳のときに**罪の赦しのためのバプテスマを受け，また按手を受けなければならない。」（教義と聖約 68：27）

なぜ神様は 8 歳という年齢を定められたのでしょうか？8 歳という年齢についてはなんとなく善悪の理解ができる年齢とも言うことはできますが、子供によってはまだその段階に達していない子供もいるはずです。神様は善悪の区別がつかない幼子はサタンが誘惑することができないので罪がないと言われました。

「しかし見よ，わたしはあなたがたに言う。幼い子供たちは，わたしの独り子によって世の初めから贖われている。それゆえ，彼らは罪を犯さない。彼らがわたしの前に責任を負うようになるまで，**サタンには幼い子供たちを誘惑する力が与えられないからである。**」（教義と聖約 29：46-47）

もし、ある子供の成長がゆっくりで、8 歳になった時点でまだ善悪の区別がはっきりとできない場合でもバプテスマを受ける必要があるのかと考えてしまうと、この理由を理解することができません。8 歳でバプテスマを受ける理由は「悔い改めができるかどうか」ということに重点があるのではなく、8 歳でバプテスマを受ける理由には「**キリストの教義**」が深く関わっているのです。

前に説明したことを思い出してもらいたいのですが、キリストの教義は悔い改めることに重点があるわけではありませんでした。悔い改めなければ受けることができないものがあるために、その身を清める意味で信仰、悔い改め、そしてバプテスマとアロン神権の儀式によってあるものを受ける備えをします。その受けられるものというものがこの地上で神様が私達に与えてくださる最高のギフトである「聖霊の賜物」です。8 歳で子供たちがバプテスマを受ける最大の要点はここにあります。

子どもたちが 8 歳をすぎるとすぐに思春期にさしかかります。すると突然体に変化が起き始めます。中でも最も大きな変化の一つが脳の容積の拡大です。脳は 10 歳までに大人の 90%近くまで成長しますが、思春期前にその成長が完成します。しかし突然の脳の成長に比べて、その中身である知識が充分でないために、情緒的にも精神的にも不安定な状況が続きます。これが 13 歳くらいから 20 歳くらいに見られる成長の変化です。いわゆるハードウエア的な脳が拡大して充実しても、ソフトウエ

アである知恵や知識が不足している状態ですから、自分が大人であると思いつつも何をどう理解したら良いかで迷い戸惑います。この時期は人の人生の中でも、最もサタンが攻撃しやすい時期と言うことができます。実際、この思春期に教会を離れる教会員の数は他の年齢層に比べて非常に多いのです。ではどのようにそのサタンの攻撃から身を守るのかと言えば、それは聖霊の導きをおいて他にありません。

子どもたちが8歳でバプテスマを受けるのは、やがてすぐに訪れるこのサタンの攻撃から身を守るために聖霊の賜物を受け、それを使う練習を始めるためです。そのためシオンのステークにおいて親は8歳までに子供にキリストの教義を教え、常に祈りを通して神様と繋がり、やがてくる試練の中でも聖霊を通して神様の御心を知る訓練をするようにと教えられたのです。

「さらにまた，シオンにおいて，または組織されているそのいずれかのステークにおいて，子供を持つ両親がいて，八歳のときに，**悔い改め，生ける神の子キリストを信じる信仰，およびバプテスマと按手による聖霊の賜物の教義を理解するように彼らを教え**なければ，罪はその両親の頭にある。・・・また，**彼らはその子供たちに祈ることと，主の前をまっすぐに歩むことも教えなければならない**。」（教義と聖約 68：25, 28）

自分の選びに責任を持つ

人が試練に会う時、多くの場合そのきっかけとなる事象が存在します。それはたとえば、事故であったり、病気であったり、離婚であったり、金銭的な問題、あるいは世界的な不況であったり、戦争であったり、時には隣人や社会の問題であったり、本当に様々です。多くの場合人は「それさえなければこんなことにはならなかったのに」とその原因となった事象を恨みます。心に苦しみを覚える時、少しでも早くそこから抜け出したい気持ちから「この苦しみの原因の全ては〇〇にある」と、人と神を恨むようになります。しかし、それは何の解決にもならず心の中の暗闇は晴れることがなく、いつもなにかのつっかえが心の中に残ることになります。

時折、与えられる試練はその傷が深く、まるで乗り越えることができないような悲しみに襲われることもあります。しかし、試練がもし神様から与えられる成長のための訓練であるのなら、その試練に対して「なぜこんなことに」と嘆くのではなく、「どうやって立ち上がるか」と考え始めるところからが成長の始まりとなります。激しい試練に打ちのめされて、文字通りにすべてを失ってしまった時のヨブの口から出た最初の言葉は次のようだったことを思い出してください。

「このときヨブは起き上がり、上着を裂き、頭をそり、地に伏して拝し、そして言った、『**わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ**。主のみ名はほむべきかな』。 すべてこの事においてヨブは罪を犯さず、**また神に向かって愚かなことを言わなかった**。」（ヨブ 1:20-22）

サタンの誘惑は引力ととても似ています。人は何もせず、体にエネルギーを送らずに力を込めなければ立つことさえできません。それは地球に引力というものがあるからです。何もしなければ何も始まらないのです。これと同様に人が試練の中で、何か努力を始めようとするときにも多くのエネルギーを必要とします。常に自分の霊にエネルギーを送り続けなければ、試練の中で立ち上がることさえできません。サタンにとっては、このエネルギーを人が立ち上がるために使うことがとても邪魔になります。そこでそのエネルギーを他の事に使わせようとします。サタンにとってその最も効果的な方法が、人を恨み、神を恨ませることによって無駄にエネルギーを消耗させる方法です。神様や他人に責任を押し付けている間、人間はそのことによって少しでも問題が楽になったような錯覚に陥り、「恨む」という行動によって無駄なエネルギーが消費されるので、いつまでたってもそこから「立ち上がる」ことができません。人は立ち上がって歩き始める時に、初めて自分が居た場所がどんなところだったのかを見ることができるようになり、それが成長の始まりとなります。

人間の人生はすべて訓練の中での「選び」によって最終的な結果が決まります。ですから誰でも間違いの無い最善の選びをしたいと思います。それは当然のことですが、多くの場合「どれを選べば良いか、神様が教えてくださるだろう。そのために聖霊が存在するのだろう」と勘違いしやすくなります。確かに、尋ねれば神様が教えてくださるかもしれませんし、聖霊はすべてのことを教えることができます。でもそれは訓練と呼べるものなのでしょうか？例えば、学校でテストがあって、「答えはAでしょうか？それともBでしょうか？」と誰かに尋ねてその答えを教えてもらったとして、それは本当に意味で試験と呼べるものになるのでしょうか。ヤレドの兄弟が船の中にどうやって光を取り込めばよいのかを神様に尋ねに行った時の事を覚えているでしょうか。彼は初め、尋ねるだけでその方法を教えてもらえると考えていました。しかし、神様の答えは彼が想像もしていなかった言葉でした。

「主はヤレドの兄弟に言われた。『あなたがたは，船の中に光があるようにするために，**わたしに何をしてもらいたいのか**。』」（エテル 2:23）

尋ねれば答えてくださると考えていたヤレドの兄弟にとって、この答えは衝撃的でした。彼は「自分で考える」という部分が自分に欠けていたことに気付かされたのです。自分は神様に何をしてもらいたいのかということを考え始めた彼は、やがてあるアイデアにたどり着きます。光とエネルギーの根源である神様からその一部を分けていただければ、船の中の闇に光が灯るに違いないと。しかし、これは誰も試みたことのない前例の全く無いアイデアでした。成功するかもわからない、ですから信仰が試されることになりました。彼は更にアイデアを広げていきます。神様の光を分けていただくための器が必要であると。そこで彼は山に登って一つの石から16個の透明な石を溶かし出します。聖典から読めばたった一節にしか過ぎないこの文章ですが、今から4,000年以上も昔の話です。自然界で透明の「石」と呼ばれる

石英を溶かし出すには1,700度以上の熱が必要です。現代でも難しいその温度をどうやって彼は作り出したのでしょうか？一朝一夜でできる話ではありません。おそらく何度も何度も失敗を繰り返し、その度に神様に知恵を願い求めて、最終的に成功したのではないでしょうか？もしかすると数週間、あるいは数ヶ月もかかったプロジェクトなのかもしれません。

しかし、神様はこの努力をご覧になられます。試練の中で人が何を考え、どう行動するかを見ておられるのです。すべての答えを教えてくださるわけではありません。**それらの経験を通さなければ知り得ることができない知識も存在するから**です。神様はこのように言われています。

「見よ，わたしがすべてのことを命じるのは適切ではない。すべてのことを強いられて行う者は怠惰であって，賢い僕ではない。したがって，彼は報いを受けない。まことに，わたしは言う。人は熱心に善いことに携わり，多くのことをその自由意志によって行い，義にかなう多くのことを成し遂げなければならない。**人は自らの内に力があり，それによって自ら選択し行動する者だからである**。そして，人は善を行うならば，決してその報いを失うことはない。」（教義と聖約58：26-28）

人生の中で、決して間違いのない選択する方法とは「**自分の選びに責任を持つ**」ということです。もちろん、その選びによって失敗することも当然あります。しかし、自分で考え、助けと導きを求めて祈り、行動を起こした結果にはたとえ失敗してたとしてもそこには「学び」が残ります。「自分の選びに責任を持つ」とはどんな結果になろうとも絶対に神様や他人に責任を押し付けないことです。そうすれば失敗はやがて成功の糧となり、自分ばかりではなく、他の人を助けることにさえつながっていきます。「自分の選びに責任を持つ」ことができるようになると、人生において無駄な選択というものがなくなるのです。

11 章：天が共に働く時

この世において直接天のお父様と現世でまみえたのがジョセフ・スミスだけであり、その事に特別な意味があるのであれば、私達にはこの世で天のお父様と直接まみえる機会はおそらくないと思われますが、しかしそれは私達が全く天との交わりがないということではありません。この事を理解することは末日の聖徒にとって、とてつもない祝福と助けを受けることに繋がります。モロナイは父モルモンからの教えとして、次のような言葉を残しています。

「さて，わたしの愛する同胞よ，あなたがたに話したこれらのことが真実であれば，また神は，これらのことが真実であることを，終りの日に力と大いなる栄光とをもってあなたがたに示されるであろうが，もしこれらのことが真実であれば，奇跡の日は終ってしまったと言えるであろうか。**天使が人の子らに現れることは，終ってしまったのであろうか。神は聖霊の力を人の子らに与えられなくなったのであろうか。時が続くかぎり，大地が存在するかぎり，地の面に救われる人が一人でもいるかぎり，神は聖霊の力を与えるのを控えられるであろうか。見よ，そうではないと，わたしはあなたがたに言う**。奇跡が行われるのは信仰によるからである。天使が人に現れて仕えるのも，信仰による。したがって，もしこれらのことがなくなっているとすれば，それは不信仰のためであり，すべてはむなしいので，人の子らは災いである。」（モロナイ 7：35-37）

４４人の悪霊

考えてもみてください。もしこの世でサタンが権勢をふるうことが許されているとすれば、それに対抗するための天の力も当然備えられているはずです。そうでなければこの世において誰も天の助けが得られず、全ての人はサタンの引力に惹かれて滅ぼされることになります。ではどのような助けが私達には、特に末日に働く聖徒たちには与えられているのでしょうか。ここで、ある計算を紹介したいと思います。これは一人の人間に対して何人の悪霊（サタンの仲間）がつきまとい、常に誘惑しようとしているかを表した計算です。当然、正確な数字などわかりませんが、あくまでも数学的に考えた場合の数字だと思ってください。

私達は天上会議において、天の三分の一の霊がサタンの仲間となって肉体を持たないまま地上に落とされて、悪霊となったことを聖典から学んで知っています[74]。では例えば、天のすべての霊の人口を計算しやすいように 3,000 人と仮定してみます。これは比率計算と呼ばれるもので、この数字が 300 人でも、3 億人でも、30 兆人でも答えは同じになりますので、とりあえず 3,000 人とします。3,000 人の三分の一が悪霊になったということは、ちょうど 1,000 人ということになります。そして残り 2,000 人が神の子としてこの地上で肉体をもらって訓練を受けるわけです。し

[74] 教義と聖約 29：36、黙示録 12：4 参照

かし、悪霊である 1,000 人は一度に世の初めからこの地上に落とされますが、訓練を受ける 2,000 人は少しずつ時代時代に分かれて降りてきます。ここでヨハネが見た 7 つの封印の意味が、人類の歴史の 7 千年を表していることを考えて[75]、2,000 人が平均的にこの 7 千年の間に降りてくるとしましょう。それぞれの人の寿命を 80 年と仮定して、計算しやすいように 80 年ごとに一つのグループが降りてくると考えると、7 千年の間に約 87.5 のグループが降りてくることになります。2,000 人が 87.5 のグループに分かれるわけですから、一つのグループは約 23 人となります。この一つの時代に降りてくる 23 人に対して、サタンの仲間である 1,000 人はどの時代でも総掛かりで攻撃を仕掛けてきます。比率は 23：1000 ですから一人あたりの比率は 1：43.478…となり、別の言葉で言えばわたしたち一人ひとりに対し、どの時代でも約 44 人の悪霊が攻撃してくることになります。

図 28　悪霊の人数の比率計算方法

悪霊の攻撃とはどのようなものでしょうか？よく聖書などには悪霊にとりつかれた話が出てきますが、それは特別な場合で、通常悪霊はサタンの目的である人が神様の訓練に成功しないようにすること、別の言い方をすれば「聖霊の導きを得られないようにすること」を最大の目標として攻撃してきます。この攻撃に対抗する方法を、神様はエゼキエルに向かってこう告げられました。

「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け、**あなたがたの肉から、石の心を除いて、肉の心を与える**。」（エゼキエル 36：26）

心は、私達が聖霊を感じるための特別に用意された器官です。この心に聖霊が触れてくださると、私達は驚くほど多くのことを学び成長することができます。ですからサタンの仲間はこの心に、この世の煩いであるお金の事、人間関係の事、仕事の

[75] 教義と聖約 77：7 参照

事、家族のこと、将来の事、病気や怪我の事など様々な心配事や不安を投げ入れて、どこにも聖霊の影響が入る隙間がないように詰め込んで来ます。サタンと悪霊の影響をガチガチに詰め込まれた結果が、主がエゼキエルに言われた「石の心」です。固く冷たく凝り固まった石の心では、人は聖霊を受け入れることができないので成長することができないのです。つまり、「新しく生まれる」ことができません。

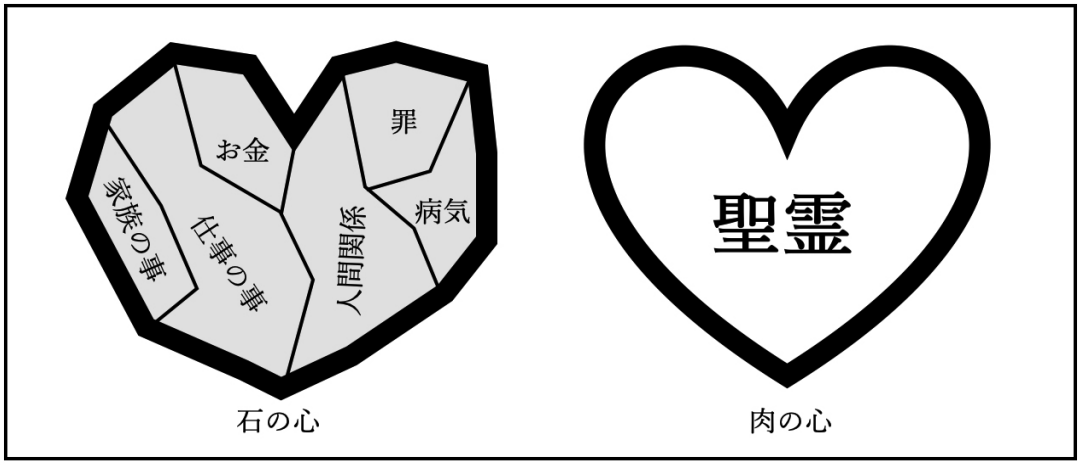


図29　石の心と肉の心

一人に対して44人もの悪霊が常時このように働きかけてくるわけですから、私達は自分一人で対抗できるはずがありません。そのために神様は私達がその状態から救われるために、柔らかい、聖霊を受け入れることができる「肉の心」を持てる方法を準備してくださいました。旧約聖書に記録されている、預言者エリシャが大勢の敵に囲まれてしまった時の話にそのヒントが隠されています。敵の多すぎる軍勢を見て、エリシャの召使いである若者は恐れ、エリシャに向かって「ああ、わが主よ、私達はどうしましょうか？」と尋ねました。その時のエリシャの答えが次のように書かれています。

「エリシャは言った、『恐れることはない。**われわれと共にいる者は彼らと共にいる者よりも多いのだから**』。そしてエリシャが祈って『主よ、どうぞ、彼の目を開いて見させてください』と言うと、主はその若者の目を開かれたので、彼が見ると、火の馬と火の戦車が山に満ちてエリシャのまわりにあった。」（列王下6：16-17）

この時、エリシャたちが見た天の軍勢とは一体何だったのでしょうか？教義と聖約にはこの事を裏付け、私達に勇気を与えてくれる一つの言葉が書かれています。

「そして，あなたがたを受け入れる者がだれであろうと，わたしもそこにいるであろう。わたしはあなたがたに先立って行こう。わたしはあなたがたの右におり，また左にいる。わたしの御霊はあなたがたの心の中にある。また，わたしの**天使たち**はあなたがたの周囲にいて，あなたがたを支えるであろう。」（教義と聖約84：88）

大変興味深い事に、この聖句には天使たちという言葉が**複数形**で書かれています。この言葉にエリシャの説明を合わせると「天で私達と共に居て、働いてくださる者は 44 人の悪霊たちよりも多い」ということになります。しかもそれだけではありません。この教義と聖約の聖句はその天使たちの他に、私達の主であられるイエス・キリストが共におられ、様々な煩いが取り除けられて肉の心に変わった私達の心の中には御霊、すなわち聖霊が共に居てくださると書かれているのです。これがどんなに敵が多くても、私達が負けることがないという確かな理由です。実際、天の三分の一もの数ですから、悪霊の総数はおそらく星の数のように多いことでしょう。しかし 1830 年に教会が回復してから今もなお、教会が成長を続けているということが、紛れもなくその数よりもはるかに勝る数の天の軍勢がいることと、心の中から守ってくださる聖霊が、今この瞬間も私達を助けてくださっているという証拠になるのです。

お祈りの隠された力

このような天の力と助けを得るためには私達は新しく生まれ、新しい心、つまり柔らかな肉の心を持って、聖霊から導きを得る必要があります。宣教師は初めて福音を聞く人に次のように教えると思います。「お祈りは天のお父様と直接お話ができる特別な機会です。お祈りはイエス・キリストの御名によって願い尋ねます。すると、天のお父様は聖霊を通して答えてくださいます。」とてもシンプルですが、これが創生の先より定められてきた「天のお父様と私達がお話することができる方法」です。ニーファイも次のように教えています。

「しかし見よ，わたしはあなたがたに言っておく。あなたがたは気を落とさずに常に祈らなければならない。そして，主があなたがたの行うことを神聖にしてくださり，あなたがたの行おうことが自分自身に幸いをもたらすものとなるように，**キリストの名によってまず御父に祈らずには，主のためにどんなことも行なってはならない**。」（2 ニーファイ 32：9）

私達にとってイエス・キリストこそが天のお父様に通じる唯一の道です。ですからお祈りをするのにも当然イエス・キリストの御名を通して祈ります。そうすると天のお父様が聖霊を通して答えてくださるというわけです。とてもシンプルなので、この教会の会員であれば誰でも知っていることだと思いますが、それではお祈りすることによってどんな効果が得られるのでしょうか？この質問を不思議に思うかもしれませんが、神様のご計画は私達が考えているよりももっと気高く、複雑で、そして効果的です。人が祈るという行為にさえ、神様は人には思いもつかないような特別な祝福を備えられておられます。イザヤは神様の御心と人の考えの違いを次のように言い表しています。

「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。」（イザヤ 55:8-9）

人が祈る時に、神様は必ず聖霊を通してお答えになられるわけですから、**この時が、そしてこの時こそが、人生において最も聖霊と近くなれる瞬間だと言うことができます**。聖典の中ではこの現象を「聖霊の現れ」あるいは「御霊の現れ」と表現されています。そこで今までの話を思い出してみてください。聖霊が私達にどのような影響を与えてくださるかをまとめると次のようになります。

〇聖霊は救いの計画と天のお父様の御心とを私達に伝えてくださる。
〇聖霊は教えを通して必ず人を神に近づけてくださる。
〇聖霊はその人のレベルごとに私達を教えてくださる。
〇聖霊からの教えに頼らず、自分や人の考えに頼る者は惑わされる。
〇聖霊の現れを人が受けると、御霊の賜物が授けられる（あるいは磨かれる）。
〇啓示者である聖霊を通して私達は個人の啓示を受けることができる。
〇聖霊の助けによって、前世で与えられた使命にたどりつくためのすべての事を思い出せる。
〇聖霊は私達の心の穴をあふれるほどの真理で満たしてくださる。
〇聖霊によって日々の生活の中に愛や喜び、平和や寛容などの良いものを感じることができる。
〇聖霊によって火と聖霊によるバプテスマを人生の中で何度も経験すると、人は新しい人間に生まれ変わることができる。
〇聖霊の力によって記録された預言者の言葉は、聖霊の力によって読んで理解することができる。
〇聖霊は私達が真理を求めることを喜んでくださる。

これほどの（おそらくはこれ以上の）影響と祝福が聖霊の現れによってもたらされるということは、「祈る」という行動自体が単に「神様とお話しする」だけではなく神様が私たちに与えてくださった、次の段階への成長の鍵だと考えることができます。そこで考えてもらいたいのですが、私達は一日に何回お祈りをするでしょうか？戒めでも聖典の中でも祈りの回数についての規定はありません。ただ、アルマ書にはアミュレクの言葉として次のように書かれています。

「それゆえ，神がわたしの同胞であるあなたがたに，あなたがたが悔い改めを生じる信仰を働かせて，神の聖なる御名を呼び始め，神の憐れみを得られるようにしてくださいますように。まことに，神に憐れみを叫び求めなさい。なぜなら，神は人を救う力を備えておられるからである。まことに，へりくだって，**神に祈り続けなさい**。牧場にいるときには，まことに，すべての家畜の群について神に叫び求めなさい。家にいるときには，まことに，あなたがたの家のすべての者について，**朝も昼も晩も神に叫び求めなさい**。まことに，敵の力を防ぐことができるように，神に

叫び求めなさい。まことに，あらゆる義の敵である悪魔を防ぐことができるように，神に叫び求めなさい。あなたがたの畑の収穫が豊かであるように，作物について神に叫び求めなさい。あなたがたの牧場の家畜が増えるように，家畜の群れについて叫び求めなさい。しかし，これだけではない。あなたがたは自分の部屋でも，人目に触れない場所でも，荒野でも，あなたがたの心を注ぎ出さなければならない。また，**声に出して主に叫び求めないときでも**，あなたがたの幸いと，あなたがたの周りの人々の幸いを気遣う気持ちを心に満たし，**それが絶えず主への祈りになるようにしなさい**。」（アルマ 34：17-27）

「苦しい時の神頼み」という言葉があるように、人は苦しければ、試練があれば、**普段よりも多く**神様に頼る傾向があります。そしてそれはおそらく普通の末日の聖徒たちも同様でしょう。しかし、先程の聖句でアミュレクは朝も昼も晩もいつでも絶えず祈れと教えています。もし祈りに、単に神様に自分の望みを訴える以上の力、あるいは効果が降り注ぐのだとしたら、「苦しい時の神頼み」ではなく、神様は私達がより早く効果的に成長することができるように、試練という苦しみを与えて、祈りの回数を増やさせ、神に頼るようにさせているのだと考えることもできないでしょうか？つまり、簡単な数学的理論です。一日の祈りの回数を一回増やせば、それだけ「聖霊の現れ」が起こる確率が上がる。たくさん増やせば、更に確率が増すということです。

人生の中で何度「聖霊の現れ」を受けられるかどうかに私達が真の末日の聖徒となれる鍵があるとしたら、「聖霊の現れ」を一番受けられる可能性の高い「祈り」をもっと真剣に、もっと多く、いつでも絶えず行うようになるのではないでしょうか？

神様の手は短いのか

イザヤが書いた主の言葉に「わたしの手が短くて贖うことができないのか[76]」という言葉があります。時折私達は「何度も同じことを神様に祈ることは不敬ではないのか」とか、「毎日何度も祈ると毎回内容が同じになる」などと、勝手に心配して祈ることをためらうことがあるかもしれません。でもそれは「人の考え」です。神様はそのようには考えておられません。そうでなければなぜアミュレクが「絶えず祈れ」と教えるでしょうか。たとえ、言葉が同じになろうとも、願うことが多すぎると思うとも、私達は口を閉ざさず、心から誠心誠意天のお父様を信頼して祈り続けることが必要です。預言者エリシャが死の間際に彼を訪問してくれたイスラエルの王ヨアシに向かって、弓と矢を取って窓の外に放つように命じた話をご存知でしょうか。エリシャは王が矢を放つ度に「主の救いの矢、スリヤ（敵国）に対する救いの矢、あなたは敵を打ち破るであろう」と言いました。エリシャは何度もそれを

[76] 2 ニーファイ 7：2 参照

続けるように王に勧めましたが、王は三度でやめてしまいます。するとエリシャは怒って次のように叫びます。

「すると神の人は怒って言った、『**あなたは五度も六度も射るべきであった**。そうしたならば、あなたはスリヤを撃ち破り、それを滅ぼしつくすことができたであろう。しかし今あなたはそうしなかったので、スリヤを撃ち破ることはただ三度だけであろう』。」（列王下 13：19）

私達は人の考えによらず、何度も何度も神様に祈るべきです。心から叫び求める時、私達は「聖霊の現れ」を受ける可能性が出てきます。その時、私達には見えない奇跡が起こり、不思議な成長を遂げることができるのです。

試練は人が祈るようになるための道

もし人間の人生に何も障害がなく、何の試しもなく、何不自由のない生活ができたら、神に祈る人は居なくなるかもしれません。祈りを必要としなくなるからです。そうすれば聖霊の現れもなくなるでしょう。すると人はこの世で成長できなくなり、生まれた状態のまま、意味のない時間だけを過ごして神の元に戻ることになります。あるいは成長していないので戻ることさえできないかもしれません。だからどんな人でも祈りを通して成長の機会が与えられるように、すべての人に試しが与えられるのです。それはイエス・キリストでさえ同じでした。前世で救い主という最も重要な召しを受けたにも関わらず、彼もまたすべてを忘れてこの世に来て、様々な試し、様々な誘惑に会い、その中で聖霊の現れとその導きを受けて、ご自分のやるべきことを理解されたのです。パウロの次の言葉をもう一度読んでみましょう。

「**主ご自身、試錬を受けて苦しまれたからこそ**、試錬の中にある者たちを助けることができるのである。」（ヘブル 2:18）

主はこのご自分の経験を通して、私達にも同じように自分のやるべきことを知ることができることを教えて下さいました。以下の聖句をもう一度読んでみます。

「わたしはこれらの言葉をあなたがたに与える。それは，**あなたがたが礼拝する方法を理解して知り，また自分が礼拝するものを知ることによって**，あなたがたがわたしの名により父のもとに来て，定められたときに父の完全を受けられるようにするためである。あなたがたは，わたしの戒めを守るならば，父の完全を受け，わたしが父によって受けているように，**あなたがたはわたしによって栄光を受ける**からである。それゆえ，わたしはあなたがたに言う。**あなたがたは恵みに恵みを加えられる**であろう，と。」（教義と聖約 93:19-20）

ただ、私達が試練がなければ祈らないのであれば、それは本当に「苦しい時の神頼み」であって、真の成長にはつながりません。「試練」は人としての成長に必要な経験を学ぶためにありますが、同時に「祈る」ということを学ぶためのものであり、それを通して初めて祈りの力を知って、祈りの本当の意味の証を得るために用意されています。アブラハムが「息子イサクを生贄に捧げよ」という試しに会った理由をジョージ・Q・キャノン長老は次のように説明されています。

「この試しの目的は、アブラハムの心に教えを深く刻みつけるためであり、**この方法でしか得ることのできない知識**を、アブラハムに得させるためであった。**これこそ、主がわたしたちにすべての人に試しを与えられる理由**である。」（George Q. Cannon, Gospel Truth, 1:113）

試練は喜ばしいものではありませんので、試練の最中にある人は心が疲弊し、立ち上がるための力も出ないかもしれません。しかし次のような聖句があることも覚えておいてください。

「**正しい者には災が多い**。しかし、主はすべてその中から彼を助け出される。」（詩篇 34：19）

どうして自分にはこんなに試練が多いのかと思い悩むときがあるかもしれませんが、この聖句を逆に読めば、試練が多いということは神様から「正しい」と認められていることだと読むことができます。そう考えれば試練という訓練を乗り切る勇気が出てくるかもしれません。その訓練が終わった時にただ終わったことを「やったー！終わったー！」と喜ぶだけでなく、その試練の最中にどれだけ自分が祈ったのかを、どれほど熱心に心をさらけ出して神様に叫び求めたのかを思い出す時、それが「学び」となり、試練がないときでも同様のことができれば、私達は約束されているように恵みに恵みを受け、イエス・キリストを通して完全な栄光を受けて自分のやるべきことを思い出すことができるようになるのです。

試練がある＝まだ学ぶことがある

一つの試練が終わってホッとするのもつかの間、やがてまた次の試練がおとずれます。おそらく死ぬまでその繰り返しは続くでしょう。しかし先程のキャノン長老の言葉のように「この方法でしか得ることのできない知識」を神様が私達に教えられる機会だとしたら、試練が続くということは、**まだ私達に学ぶべきことがある**ということです。「神様のすべてを生きている間に学ぶことなどできるはずがない」と思われるかもしれませんが、そうではないのです。神様のすべてを学ぶのではなく、**私達がこの世にいる間に知る必要のあることのすべて**を学ぶのです。ですから一人ひとり違う事を違うレベルで学ぶことになります。学ぶ順序も異なるかもしれません。でもそれをこの世で知ることは次の世界に行く時にとても重要になります。教義と聖約から読んでみます。

「そこで，もしある人が精励と従順によって，**この世でほかの人よりも多くの知識と英知を得るならば，来たるべき世でそれだけ有利になる**。」（教義と聖約 130：19）

この聖句を単に読めば、たくさん勉強する人は次の世で有利になるというだけの聖句ですが、はたしてそうなのでしょうか？小学校や中学校、高校あるいはそれ以上の教育機関で私達はたくさんの事を学びます。それらを学ぶことがこの世においては様々な点で有利になることは明白です。しかし、ここでは「やがてくるであろう世界」で有利になると言われているのです。新しい世界ではすべての知識が明らかにされ、人はすべてを知ることが許されるとありますから[77]、今この世で全部を学ばなくてもどうせ知ることになるとも考えられます。するとここで言う私達が学ぶ「知識」とは何なのでしょうか。気をつけて読むと、単に知識だけではなく「知識と英知」と書いてあります。アブラハム書では私達はもともと英知だったと書かれています。実のところ、この英知がどのようなものであるかはわかっていません。また、この英知と先程の教義と聖約の聖句にある英知が同じものであるかどうかもわかりません。ただ、アブラハム書からは**英知は成長できるもの**であることがわかっています。そうだとすれば、ここで言う知識と英知は私達の霊的な成長に必要なものということになります。例えば、今までの話を前提にして考えると次のようになります。

私達は天で与えられた、あるいは自ら約束した努めを果たすためにこの世に来たとします。しかし忘却の幕によってすべてを忘れてしまいましたが、天のお父様はそれを取り戻す方法を準備してくださいました。それが「聖霊」であり、「聖霊の現れ」です。実際に私達の模範として、イエス様はその方法を通して試練の中から恵みに恵みを受けて、ご自分のやるべきことを理解され、その全てを実行されました。何一つ欠けることがなく、完全に自分の使命を実行されたので、彼には「勝利」が与えられ、私達の王となられることが許されました[78]。そしてイエス様は私達にも同じ方法で自分のやるべきことを知ることができると教えられました。そのために私達は試練から学び、聖霊の現れを経験し、試練のないときでも熱心に祈り求め、聖霊の現れが少しでも多くあるように努めることができます。最後までそれを繰り返し、この世での必要な成長と役目を果たすことができた時、私達を次の世界で待っているものは何でしょう。それこそが「**有利**」となる意味ではないかと思います。

主の力に頼るということ

私達は弱く、とても一人では耐えきることができません。まして、一人に対して敵が 44 人も存在する世の中では一人では勝つことができないのです。ですから天のお

[77] 教義と聖約 130：9
[78] 黙示録 5：5 参照

父様に助けを頼り求めるのです。そしてその力を、私達が住む宇宙の管理者であられるイエス様によってより頼むのです。彼は勝利者です。すでに勝っているからこそ、私達を導き救うことができるのです。ヨハネが記録したイエス様の最後の教えを心に刻むと、私達は末日の聖徒として勇気を出して立ち上がることができます。

「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。**しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている**。」（ヨハネ 16：33）

そしてその勝利者であられるキリストが、今私達の教会の頭となって私達を最後の戦いに勝利するように導かれて、こう言われるのです。

「見よ，あなたがたは幼い子供であり，今はすべてのことに耐えることはできない。**あなたがたは恵みと真理の知識とにおいて，成長しなければならない**。幼い子供たちよ，恐れてはならない。あなたがたはわたしのものであり，わたしはすでに世に勝っており，そしてあなたがたは父がわたしに与えてくださった者に属しているからである・・・わたしは良い羊飼いであり，イスラエルの石である。**この岩の上に建てる者は，決して倒れることはない**。」（教義と聖約 50：40-41,44）

成長のグラフ

天と共に働き成長するということは、同じ場所に立たず、同じ自分にならないということです。聖なる場所を目指して進み続けるということです。生涯をかけて、救いの計画 101 から更にその上へと進んで学び続けるということです。天と共に働く時にきっとその不思議を知ることになるでしょう。そして自分もまた成長していることを再確認することができます。例えば、その成長をグラフで表してみるとします。

最初は何も知らなくて、戸惑いながらも必死に生きようとする時に最初の試練が訪れます。試練は壁のように立ちはだかり、それを超える努力の目標値が自分の持てる力よりも遥かに高く、乗り越えることはまるで不可能のように思われます。しかし 100％の努力と祈りによって、天が共に働き不思議な奇跡が起って、足りない分の努力目標を主の勝利の右手が引き上げてくださいます。それでこの試練を乗り越えることができたとしましょう。

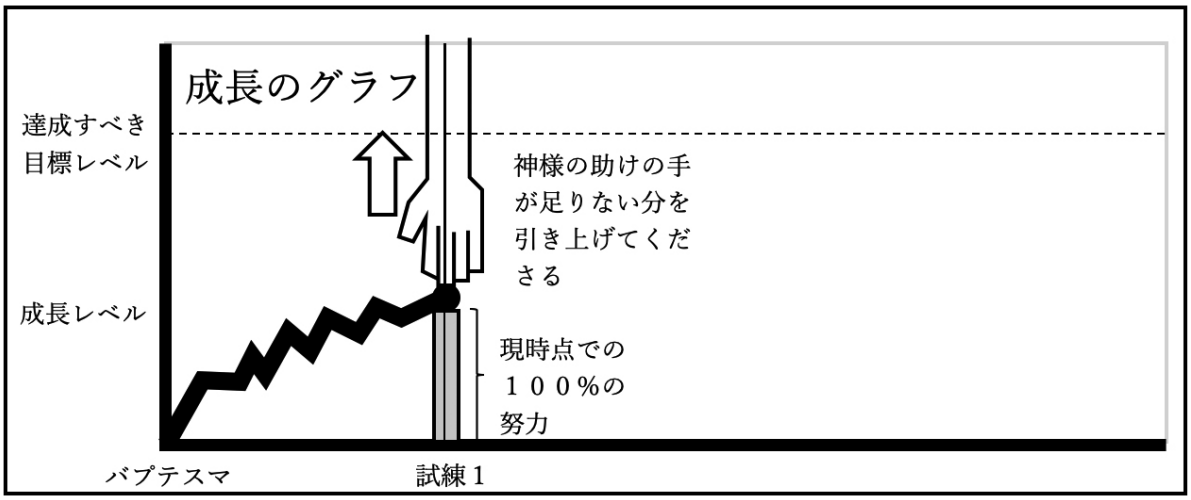


図30　成長のグラフ１

それから数年が経過したある日、前と同じような試練が訪れたとします。私達は前回の事を思い出し、「あの時、あの程度の努力をしたから今回も同じようにすれば救われるだろう」と思うのであれば、それは間違いです。私達は成長しています。数年前の 100％の努力は現在の成長からすると 50％ほどかもしれません。すると天と共に働く奇跡が起こるためには 50％が不足しているということになるのです。これが成長のグラフです。このグラフから分かることは、自分の成長に合わせた 100％の努力をする時にだけ、天が共に働く奇跡を見ることができるということです。

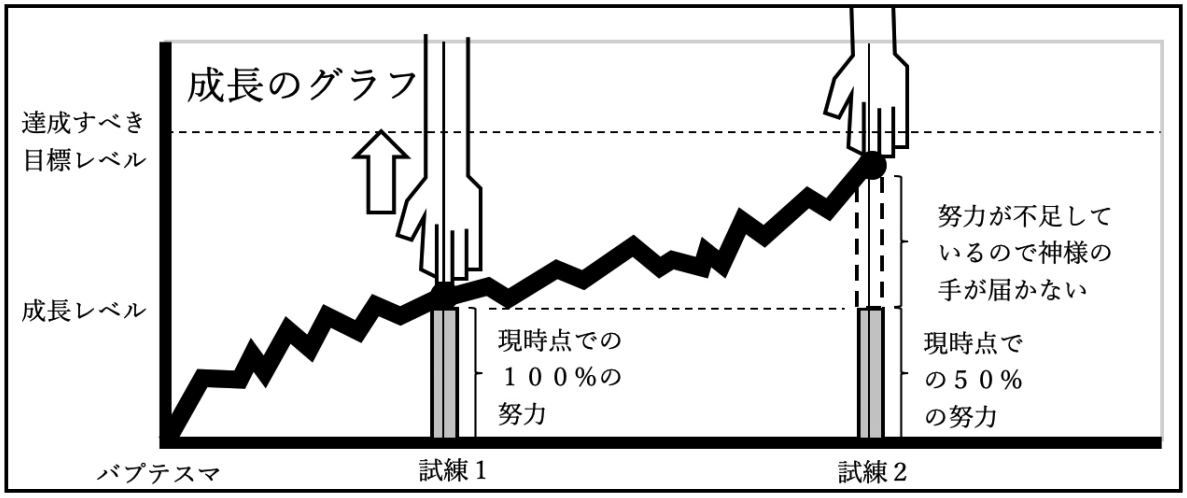


図31　成長のグラフ２

天が末日の聖徒と共に働くことを、この時代に最初に気がついたのは他でもないジョセフ・スミスです。彼はその経験を自分の人生の終わりに、次のように手紙に記しました。

「さて，わたしたちの受けた福音について，何を聞くでしょうか。喜びの声です。天からの憐みの声，地からの真理の声，死者のための喜びのおとずれ，生者と死者のための喜びの声，胸躍る大いなる喜びのおとずれ。善の喜びのおとずれを伝え，シオンに向かって，『見よ，あなたの神が治めておられる』と言う者の足は，山の上にあって何と麗しいことでしょう。カルメルの露のように，神の知識が彼らに下ることでしょう。さらにまた，わたしたちは何を聞くでしょうか。クモラからの喜びのおとずれです。預言者たちの預言の成就と，明らかにされる書について宣言する，**天からの天使モロナイ**。その書について証するように三人の証人に告げられた，セネカ郡フェイエットの荒れ野における**主の声**。悪魔が光の天使として現れたときにそれを暴いた，サスケハナ川の岸辺における**ミカエルの声**。王国の鍵と時満ちる神権時代の鍵を持っていると自ら宣言した，サスケハナ川沿のサスケハナ郡ハーモニーとブルーム郡コールズビルの間の荒れ野における**ペテロとヤコブとヨハネの声**。さらにまた，セネカ郡フェイエットのホイットマー翁の部屋における，またこの末日聖徒イエス・キリスト教会のすべての旅と艱難を通じて，様々な時の，様々な場所における**神の声**。また，それぞれの神権時代と権利，鍵，誉れ，尊厳と栄光，神権の力について宣言し，またここにも少し，そこにも少しと，教えに教え，訓戒に訓戒を与え，また来たるべき事柄を宣言することによってわたしたちに慰めを与え，わたしたちの希望を確かなものとした，**天使長ミカエルの声，ガブリエルと，ラファエルと，ミカエルすなわちアダムから現在に至るまでの様々な天使たちの声**。兄弟（姉妹）たちよ，わたしたちはこのような偉大な大義において前進しようではありませんか。退かずに前に進んでください。**兄弟（姉妹）たちよ，勇気を出してください。勝利に向かって進み，進んでください。心を喜び楽しませ，大いに喜んでください。**」（教義と聖約 128：19-22）

私達末日の聖徒は今、天と共に偉大な大義において前進を続けているのです。やがて訪れる、偉大な勝利に向かって。その両方の足音が聞こえてくる時、私達の勇気は更に大きなものになっていくことでしょう。

12 章：奥義を知るということ

日本語の聖典で「奥義」と訳されている言葉は英語で「mysteries （ミステリー）」で、別の言葉で言えば「謎」あるいは「不思議」です。元々の語源はギリシア語の「ミューステリオン」で、本来の意味は「人智では計り知ることはできないが、神の助言によって知る事」に繋がります。ニーファイが「熱心に求めれば、きっとたどり着く」とヒントを残してくれた奥義とは、別の言い方をすると「神の助言によって知る事のできること」と考えることもできます。この世において、私達がどうしても知らなければいけないことは、すべて聖霊から学べるということ。そしてその総合的な内容は天に帰る方法です。しかし、ただ帰るのでは意味がありません。何かを成し遂げて帰る必要があります。そのために自分が来た目的とやるべきことを理解して行い、さらに日の光栄に入れる者となる準備をすることが必要です。

シオンに住む者

誰が日の光栄に、あるいは誰がキリスト共にシオンに住むことができるのでしょうか？イザヤはその事をこう説明しています。

「シオンの罪びとは恐れに満たされ、おののきは神を恐れない者を捕えた。『われわれのうち、だれが焼きつくす火の中におることができよう。われわれのうち、だれがとこしえの燃える火の中におることができよう』。 正しく歩む者、正直に語る者、しえたげて得た利をいやしめる者、手を振って、まいないを取らない者、耳をふさいで血を流す謀略を聞かない者、目を閉じて悪を見ない者、 このような人は高い所に住み、堅い岩はそのとりでとなり、そのパンは与えられ、その水は絶えることがない。」（イザヤ 33：14-16）

この聖句はイザヤが、キリストの来られる日に次第に出来始めていくシオンを遠くから見る悪人たちが、焼き払いにあう直前に「キリストと共にいる人々」を見て驚きの声を上げる瞬間を表したものだとも考えられます。復活体であり、神の栄光をまとって来られるキリストと共にいるためにはその膨大なエネルギーによって一瞬で焼失しないために、その身が変えられる必要があります。それができない悪人には「なぜそれができる人間がいるのか！？」と驚かずにはいられないというシーンです。イザヤは「それができる人間がいるのだ！」というメッセージを送っているのです。イエス様ご自身もやがてご自分が来られる時に共にシオンにいる者が存在すると説明されています。

「**わたしが来るとき，わたしはあなたがたを治める者となる**。見よ，わたしはすぐに来る。あなたがたは気をつけて，わたしの律法を守るようにしなければならない。わたしの律法を受けれて，**それを行う者は，わたしの弟子である**。また，律法を受け入れると言って，それを行わない者は，わたしの弟子ではなく，あなたがたの中から追い出されなければならない。」（教義と聖約 41：4-5）

キリストと共にいることができる者とは「キリストの弟子」です。モルモンは第三ニーファイ書でイエス・キリストがアメリカ大陸を訪問されたという神聖な記録を書くのに先立って、あらためて自分の自己紹介を書き、読む人にモルモンと言う名の自分がどのような人間であったのかを一番理解してもらいやすい言葉として、「キリストの弟子」という言葉を選びました。

「見よ，わたしはモルモンと呼ばれている。この名は，アルマが人々の中に教会を，まことに彼らの背きの後で最初の教会を彼らの中に設立した地，モルモンの地にちなんで名付けられたものである。**見よ，わたしは神の御子イエス・キリストの弟子である**。」（3 ニーファイ 5:12-13）

彼はキリストの弟子になろうと努力している人ならば、自分が「キリストの弟子」だったと書けば、その人間性と正直さを通して、そこから自分の書くもの（特にイエス・キリストがアメリカを訪れたという部分）が真実であると理解してもらえると思ったのです。それぐらい「キリストの弟子」という言葉には、同じ道を歩む者たちにとって深い共通の意味があると感じたのでしょう。パウロもどれだけ自分がキリストの弟子となりたいと心から願い、努力しているのかを手紙の中で説明しています。

「**彼らはキリストの僕なのか。わたしは気が狂ったようになって言う、わたしは彼ら以上にそうである**。苦労したことはもっと多く、投獄されたこともっと多く、むち打たれたことは、はるかにおびただしく、死に面したこともしばしばあった。ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、 ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、そして、一昼夜、海の上を漂ったこともある。 幾たびも旅をし、川の難、盗賊の難、同国民の難、異邦人の難、都会の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、 労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢えかわき、しばしば食物がなく、寒さに凍え、裸でいたこともあった。 なおいろいろの事があった外に、日々わたしに迫って来る諸教会の心配ごとがある。 **だれかが弱っているのに、わたしも弱らないでおれようか。だれかが罪を犯しているのに、わたしの心が燃えないでおれようか**。 もし誇らねばならないのなら、わたしは自分の弱さを誇ろう。」（2 コリント 11:23-30）

パウロはキリストの弟子となるための絶対条件のヒントを残してくれています。「**だれかが弱っているのに、わたしも弱らないでおれようか。だれかが罪を犯しているのに、わたしの心が燃えないでおれようか**」。自分ではなく、だれか。すなわち他の人の事を気にかけることがキリストの弟子としての一番必要な条件だということです。

イエス様は他人を思い、助けることにすべての預言者と律法の教え、すなわち神の福音がかかっているのだと教えられました[79]。人を愛し、人のために働くということ、それこそが日の栄に入るための絶対条件です。パウロがどんなに聖典を勉強しても、どんなに立派な言葉を口から話したとしても、他人のことを思う「愛」の気持ちがなければ全く意味がないと教えてくれたとおりです[80]。聖典を学び、学者になったところで困っている人を助けることができなければ、日の光栄には決して入ることができないのです。

私達のまだ知らない奇跡

イエス様がまだユダヤにおられた時、復活を信じていなかったサドカイ人たちがイエス様を試そうとして、復活に関する質問をしました。その時にイエス様こう言われました。

「イエスはお答えになった。『あなたがたは、**聖書も神の力も知らないから、思い違いをしている。**』」（マタイ 22：29）

私達もまた、この世において中途半端な知識の中で勝手に福音を理解したと思いこんで、勝手に自分の救いの計画を作って思い違いをすることが多々あります。自分を、あるいは周りの人を見て、「あの人は昇栄できるだろう」とか、「この人はできないだろう」とか。あるいは「自分は〇〇だから、どんなに頑張っても昇栄にたどり着くことはできないだろう」とか、「たぶん、できるだろう」とか。もし、イエス様を目の前にしてそのような言葉を口にすれば、イエス様は「**あなた**は、聖書も神の力も知らないから、思い違いをしている。」と言われるかもしれません。

聖書は神様が私達に与えてくださった、とても素晴らしい福音の入り口です。しかし世界中の人が読むわけですから、ある意味万人に通じる福音の標準しか書くことができません。この世に生きている人は、一人ひとり違った環境に居て、異なった成長、異なった条件にあるわけですが、その全てを網羅できるような文章を書こうとすれば、それこそ世界中の文献の量を集めてもまだ足りないと思います。つまり、聖典には書かれていない神様の御心と、私達がまだ知らない偉大な計画が存在しているということです。

たとえば、教会を長くお休みしている教会員は、教会に長い間集っていないから、その人は日の光栄には行けないのでしょうか？私達が自分の事を考える時、24 時間片時も神様の事を忘れずにいるかと言えば、そんなことはないと思います。1 時間神様のことを忘れていることと、10 年間教会に集っていないのと、神様の目から見たらさほどの違いはないのかもしれません。たとえ一時的に教会から遠ざかってい

[79]マタイ 22：37-40 参照
[80] 1 コリント 13：1－3 参照

てもキリストの弟子に戻ることはできますし、もとより、イスラエルの集合には今教会に集っていない会員も当然含まれるのです。

結婚していないからとか、伴侶が教会員ではないからとか、両親や子どもたちが会員ではないからとか、聖典を読むだけの解釈で自分やその人達が本当に昇栄できないのだとしたら、どんなに悲しいことでしょう。たとえ聖典に事細かな詳細が書かれていなくとも、私達は希望を持って努力をし続けるべきです。ダリン・H・オークス管長は総大会で次のように語られました。

「**主を信頼すること**は，末日聖徒イエス・キリスト教会においてよく知られている真実の教えです。それは，初期の聖徒たちが厳しい迫害と一見乗り越えがたい障害を経験したときの，ジョセフ・スミスの教えでした。それは，まだ啓示されていないことや教会の公式の教義として承認されていないことについて学ぼうとするとき，あるいは出遭う妨害に対して慰めを見いだそうと努めるときに，わたしたちが今でも用いることのできる最善の原則です。

来世での結び固めや，現世での様々な出来事や背きによる必要な再調整についての，答えがない疑問にも，その同じ原則が当てはまります。わたしたちに分からないことがあまりにも多くあります。**主を信頼し，御自分の子供たちに対する主の愛を信頼できるということが，唯一確かなことです**。」（2019 年 10 月総大会ダリン・H・オークス「主を信頼する」）

ジョセフ・スミスはカートランド神殿の建設中に日の光栄に入る人々を示現で見ました。そしてその中に若くして亡くなった自分の兄アルビンがいるのを見て驚きます。アルビンは生きている間に神殿結婚をしていないばかりか、バプテスマさえ受けていなかったのです。それでも彼には日の光栄に入る資格がありました。ジョセフ・スミスでさえわからなかったことがあるのです。私達は聖書も神の力も知らないから、たくさんの思い違いをします。聖霊を通して学ぶのでなければ決してその思い違いを訂正し、主に信頼を置いて心に平安を持って進むことができないのです。

奇跡とは

神様とイエス様を信じて進む時、私達は考えもしなかった奇跡に出会います。イエス様は、私達がキリストの弟子となろうと努力する時に奇跡を見るだろうと教えて下さいました。

「わたしは神であり，わたしの腕は短くない。**わたしの名を信じるすべての者に，わたしは数々の奇跡としるしと不思議を示そう**。」（教義と聖約 35：8）

しかし、真のキリストの弟子となるためには数々の訓練を受ける必要があることは前述のとおりです。その訓練の暁には主が備えられた祝福が待っています。

「**多くの艱難の後に祝福は来る**。それゆえ，あなたがたが大いなる栄光を冠として与えられる日が来る。その時はまだ来ていないが，もう近い。」（教義と聖約 58：4）

この言葉があるから私達は訓練を耐え忍ぶことができます。でも、訓練の最中はとてもつらいことが多く、幾度も目からは涙が溢れることでしょう。その時、私達は空を見上げて天にお父様がいらっしゃることを再確認し、心に喜びを探す必要があります。なぜそれが必要なのかというと、不安や心配、悩みや悲しみという感情があるときにはサタンの誘惑が近寄りやすくなるからです。サタンは人の心に暗い影が出てくる時にやってきます。ですから、このような感情が続いてしまうとサタンの虜になりやすくなってしまうのです。

それではその感情が強く、どうしようもなく、どこから始めればよいのかわからない時、私達はどうすればよいのでしょうか。大きな事をする必要はありません。なにか小さな喜びを見つけることから始めればよいのです。例えば、聖典を読んで主の喜ばしい約束を探すのも良いでしょう。ふさわしい音楽を聞いて、心に慰めを得ることも良いかもしれません。一番良い方法は自分の周りにいる助けが必要な人を探し出して、その人のためにできることを見つけて働き始めることです。他人の事を思っている間は自分の悲しみから遠ざかることができます。毎日の生活の中で一つでも喜びを見出してください。パウロは「御霊の実」という話[81]をした時に、聖霊が私達の近くにおられる時の私達の感情について教えてくれましたが、その中に「**喜び**」という言葉があります。パウロは喜んでいる間は安全なので喜びなさいと何度も勧めています。

「最後に、わたしの兄弟たちよ。**主にあって喜びなさい**。さきに書いたのと同じことをここで繰り返すが、それは、わたしには煩わしいことではなく、**あなたがたには安全なことになる**・・・あなたがたは、**主にあっていつも喜びなさい**。繰り返して言うが、**喜びなさい**。」（ピリピ 3：1，4：4）

もちろん、私達が悩みと苦しみのさなかにある時に、主の助けが起こり奇跡を見ることがあるでしょう。しかし、その苦しみの中で私達が喜びを持とうとして努力する時に、私達の働きが他の人にとっての奇跡となることもあり得るのです。その時、私達はまた一歩キリストの弟子に近づけることができるのではないかと思います。

[81] ガラテヤ 5：22-23 参照

約束の聖なる御霊

私達が聖霊の導きに従い、正しい事を行い、正しい儀式を受けてキリストの道を歩む時、私達が真のキリストの弟子になったことを**承認してくださる**のもまた聖霊の働きなのです。聖霊が「**約束の聖なる御霊**」と呼ばれているのをご存知でしょうか。この世での行い、神様との聖なる約束、そしてすべての神権の儀式はたとえそれを行い、受けたとしても、聖霊が承認してくださらなければ次の世で認められることはないのです。

「まことに，わたしはあなたがたに言う。この律法の条件は次のとおりである。すなわち，すべての聖約や契約，きずな，義務，誓詞，誓言，履行，関係，交際，期待がなされ，また交わされるとき，これらが油注がれた者の仲立ちによる啓示と戒めによって，最も聖なる方法で，この世においても永遠にわたっても，この力を持つようにわたしが地上で任じた油注がれた者によって，**約束の聖なる御霊により結び固められなければ，これらは死者の中からの復活の時も，その後も，まったく効験や効能，効力がない**。・・・この目的で結ばない契約はすべて，人が死ぬと終るからである。」（教義と聖約 132：7）

たといバプテスマを受けても、またたとい神殿で永遠にわたる儀式をすべて受けたとしても、心の中に闇があるために聖霊が承認してくださらなければ次の世ではそれらの儀式を受けたとは認めてもらえないのです。しかし私達がバプテスマを受ける時、あるいは神殿に入った時、その意味がまだよくわからず聖霊に認められるような気持ちや状態ではなかったという人もおられると思います。では一からやり直さなければならないのかと言うと、そうでもありません。一度受けた儀式は「受けたもの」として残ります。そしてその後理解が進み、その儀式にふさわしい行動が取れるようになる時に、聖霊が過去に受けた儀式でも承認してくださるのです。ですからキリストの弟子となれるように、聖霊にすべての正しい行いを承認していただけるように、喜びを持って身を清め、前へと進み続ける必要があるのです。

神の奥義は「これが奥義だ！」と説明できないから奥義と言うのです。自分のレベルを上げていき、真のキリストの弟子として仕えようとする時に、聖霊の助けを得て、奥義を見出し、わたしたちは「神様のあわれみのなんと深いことか！」と心に叫ぶようになるでしょう。

13 章：最後のパズルを埋める者

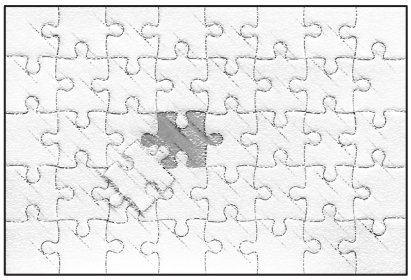


図32　最後のピース

過去 6 千年の時を経て、神様のご計画のパズルは偉大な義人たちの手によって埋め続けられてきました。最後のピースを埋める仕事が任されたのは末日の聖徒です。今現在、地球上にいる一千万人を超える教会員たちの多くが「自分は偶然に教会に巡り会って会員になった」と考えているかもしれません。しかし、真実はそうではないかもしれないのです。あらゆる聖典の予言が、この最終章に働く末日の聖徒がいることを予言しているのです。そんな何千年も前からの予言に登場する人たちが偶然集められるなどということがあるでしょうか？もしあるとしたら神様は適当にサイコロを振って、だれが働き人になるかをその時になって適当に選ばれるのでしょうか？そんなことは絶対にないのです。教義と聖約 138 章ではジョセフ・F・スミス大管長が見た霊界の示現の中で、彼はすでに世を去ったジョセフ・スミスや自分の父ハイラム・スミス、その他の偉大な末日の指導者の姿を見ます。その人たちの事を彼は次のように書き記しています。

「預言者ジョセフ・スミスや，わたしの父ハイラム・スミス，ブリガム・ヤング，ジョン・テーラー，ウィルフォード・ウッドラフ，そのほか選ばれた霊たちも霊界にいた。彼らは，**大いなる末日の業の基を据える務めに携わるために，時満ちる時代に来るようにとどめられていた者**である。」（教義と聖約 138：53）

一体彼らはどこにとどめられていたのでしょう？それは生まれる前の世界、前世です。

6 千年の間、自分たちに与えられた務めと、それを果たすその時が来るまで、天で地球に来るその時を待っていたのだとスミス大管長は説明しておられるのです。だとすれば、同じように人類誕生から 6 千年後に来て、どのような方法や経緯であれ末日の聖徒となった私達は、今まで待っていなかったと言えるでしょうか？ただ、適当に目的も持たずにこの世にきたのでしょうか？

何度も言いますが、80 億人以上いる世界の人口の、まだほんの一握りにしか過ぎない末日聖徒イエス・キリスト教会に会員になった、あるいはその家族に生まれてきたことは本当に単なる偶然なのでしょうか？教会の外から教会に入った人も、教会の家族の元に生まれた人も、「**大いなる末日の業の基を据える務めに携わるために，時満ちる時代に来るようにとどめられていた者**」とは言えないでしょうか？もし、その可能性を少しでも信じることができて、しかしなおかつ確信がないのであれば、それは単に忘れているだけかもしれません。でもそれは取り戻すことができるのです。

今、最後のバトンが私達の手に

図33　最後のバトンが繋がれる時

６千年という時間を単に数字だけで理解してはなりません。そこには人間が訓練に訓練を重ねて紡いできた歴史があるのです。人類として、文学者として、科学者として、発明家として、戦士として、政治家として、医学者として、家族を守るものとして、様々な職業の様々な人達が、様々な環境の元で、自分に与えられた御霊の賜物を最大限に活かして、歴史を作って来ました。そしてその中には神様の救いの計画を推し進めるための義人として戦い続けて来た人々もいるのです。その義しい人たちのこの世における最終的な願いは唯一つ、自分たちの後に来る者がバトンをつないで、最後の者に届けて、約束された神の国を打ち立てることでした。

「また見よ，この書の残りのすべてに，**わたしの聖なる預言者たちと弟子たちが彼らの祈りの中でこの民に伝わるようにと願った**，わたしの福音のすべての部分が載っている。またわたしは，彼らが祈りで示した信仰に応じてそれがかなえられることを彼らに告げた。・・・このようにして，彼らは，この地でこの福音を信じる者が永遠の命を得られるように，**彼らの祈りの中でこの地に祝福を残したのである**。まことに，**いかなる国民，部族，国語の民，民族であろうと，すべての者がそれを価なしに得られるように祝福を残したのである**。」（教義と聖約 10：46-47，50-51）

これが成る時、その時こそが、イエス・キリストに従う者たちの完全な勝利になります。この６千年という人類の大きなうねりの中で、そのチームが勝利するように数々の義人が受け継いできたバトンが今まさに、最後のチームである私たちに手渡されています。約束を受けて、自分のなすべきことを果たして来た人たちがここまで勝利し続けてきてくれたからこそ、このバトンが私達の手の中にあるわけですから、私達の代で負けるわけにはいかないのです。私たちは「末日の聖徒」つまり、**私達のあとに来るものはないのです**[82]。

「それゆえ，あなたがたは働きなさい。あなたがたはわたしのぶどう園で**最後の働き**をしなさい。地に住む者に最後の呼びかけをしなさい。」（教義と聖約 43：28）

イザヤとヨハネの言葉を直接身を持って理解できるという機会

私達は本当に特別な、祝福された時代に生きています。それは文明や科学の発達した時代にいるということだけではありません。数千年も前から人々に与えられてきた予言、特に人々にとって難解であると言われ続けてきたイザヤとヨハネの予言を

[82] 神の国をもたらすのに働く人達の中でという意味

読み解くための鍵を持ち、読んで理解し、そしてその上でその予言の成就を実際にその目で見ることができる時代に生きているのです。

これがどんなに素晴らしいことなのか、主は啓示の中で次のように説明されています。

「まことに，わたしはあなたがたに言う。あなたがたが受けた神権時代の鍵は，**先祖から継承され，最後に天からあなたがたに下されたもの**である。まことに，わたしはあなたがたに言う。見よ，**あなたがたの召しは何と偉大なことか**。」（教義と聖約 112：32-33）

「さらに，**あなたがたが基を据えるという誉れ**と，また**神のシオンが立つ地について証するという誉れ**を与えられるためである。」（教義と聖約 58：7）

つまりこれがどういう意味かと言えば、私たちは過去の義人たちが「この人たちは素晴らしい役目を与えられたなぁ」と憧れるほど魅力的で偉大な仕事を任せられているということなのです。それは神の国シオンを作って主イエスキリストをお迎えできるという、特別な役目です。その役目が与えられるのは誉であるとイエス様がおっしゃっておられます。今、全聖典の書かれた目的に行き着く場所に、私たちが立っているのだと理解できれば、私たちは胸を張り、誇りを持ってこの使命に携わることができると思います。私たちは過去に与えられた予言の「実行者」であり「目撃者」となることができるのです。

真の福音と神権が回復され、預言者が与えられ、教会という舞台が整えられて神様からの直接の啓示が教会にも個人的にも降り、聖霊によって教えられ、イザヤ書が読めてヨハネの黙示録が読めるということは、神様がご計画されていた末日の業がすでに始まっているということなのです。

「見よ，父が言われるには，彼らはわたしを信じ，おお，イスラエルの家よ，あなたがたは信じないので，**末日には異邦人に真理が明らかにされて，これらのことがことごとく彼らに知らされる**であろう。」（教義と聖約 16：7）

「神はその聖なる御霊によって，すなわち聖霊の言い尽せない賜物によって，**世界が存在するようになって以来現在まで示されたことのない知識を，あなたがたに与えてくださる**であろう。」（教義と聖約 121：26）

すでに最後の御業は始まっており、私達が働くために必要なすべてのものは準備されました。舞台は整っているのです。あとは役者である私達が自分の主役のパートを務めきれるかどうかに世界の運命がかかっています。

他の支族の名前が示すもの

この末日の教会は、すでにいくつもの段階を越えてきています。まず、教会の回復の下準備としてモルモン書が翻訳され、神権が回復されました。教会が設立され、最初の働き人が集められました。その人達の努力により神殿が建設され、神権の鍵が渡されます。それによって世界へイスラエルの集合のために福音が述べ伝えられるようになりました。死者のための儀式が行われるようになり、アメリカ以外の他の国々にシオンのステークが建設されるようになりました。またそれぞれの国に神殿が急速な勢いで建ち始めて、シオンへの準備が整っています。

もう一つ、今現在私達の目に見えるものとして神様の御業が進んでいることを実感できるのが、祝福師による血統宣言です。イスラエルの血統はエフライムが族長になったところでそのまま人々の悪事により捕囚されたり、離散させられたりしました。ですから教会の回復にあたってはエフライムの血統から始める必要がありました。そのため教会が始まって以来、現在に至るまで祝福師の血統宣言の殆どはエフライムとその家系であるヨセフとマナセが呼ばれていました。ところが、最近世界でこれ以外の血統が宣言され始めていると言われています。祝福師の祝福は個人的なもので大変神聖であるため、他の人に祝福を尋ねたりすることはふさわしいことではありませんが、一般的にエフライム、マナセ、ヨセフ以外が増えてきていることはわかっているようです。これが何を意味するかというと、教会がまた次の段階に向かって動き出しているということで、私達はちょうどその歴史の変わり目にいるのです。

それぞれの部族が呼ばれて、相当の人数にならなければ、教義と聖約 77 章の 11 節で説明されている各部族から 1 万 2 千人ずつの大祭司を出すことができません。まさに今、私達の目の前でそのことが始まりかけているのです。

14 章：目的を達するときに私達が見るもの

末日の聖徒という定義に当てはめてみると「神の国、シオンを作る」という私たち末日の聖徒の使命は、この世での人生が終わる時か、イエス様が再臨されてシオンが出来上がるその瞬間に終わります。しかしキリストの弟子としての仕事はその後も続きます。霊界においても、やがて復活するであろう、その時においてもです。生きたまま末日を迎え、シオンに行くことができる人もおられるかもしれません。この章では、私たちが末日の聖徒としてその特別な召しを果たすときに目の当たりにするであろう素晴らしい出来事について、聖典から学んでみます。

義人の住む街

私たちは人生の中で、主の召される場所へ赴き、その場所で働きます。しかし、その場所がシオンである必要はありません。シオンはそのステークと共に、世界に広がるからです。私達に求められていることは、いかなる場所であろうとも誠心誠意真面目に働き、生涯自分以外の人達の事をどのように愛し、どのように助けるかを考えながら、キリストの弟子となって生きることです。私達は聖典に出てくる特定の傑出した人物、たとえばモーセやアブラハムになることはできません。まったく別の個人だからです。前世で召されていない限り預言者になることもできないでしょう。しかし、聖典に出てくるある特別な人間になることはできます。それは「義人」と呼ばれる人々です。

主はある目的を持って義人が世界中に散らばることを望まれています。それは世界の至るところで福音が紹介され、イスラエルが集められるために当然必要なことですが、それぞれの土地や地域に関しても重要な理由があります。レーマン人の預言者であるサムエルがゼラヘムラの地が滅ぼされない理由を次のように説明しました。

「まことに，この大きなゼラヘムラの町は災いである。**見よ，この町が今救われているのは，義を守っている者たちのおかげである**。」（ヒラマン 13：12）

悪がはびこり、その力が強くなりつつあるこの世の中において、私達が義人であり続ける時に、その地は祝福を受け、まだ真の福音を知らない義人たちを守ることができます。それは彼らに対する伝道の機会を与え、彼らが必要な儀式を受けるための時間を作ります。自分のやっていることが微々たることのように思えて、「一体これがシオンの建設の何の役に立つのだろう？」と思うときには、どうか上の聖句を思い出してください。特に目立つことをしなくても、私達がずっと義人であり続けることで神様の目的が少しずつ果たされていくのです。

地を動かす杭（ステーク）となる

そして主はさらに私達の考えも及ばないような、その上の事を考えておられるようです。聖典の中には明確に書かれていないので、聖句を並べて説明したいと思います。世界の各地に広がる広がるシオンのステークをなぜ主がステーク（杭）と呼ばれたのかという事にはちゃんとした理由があります。イザヤは末日に訪れるシオンが次のような形で構成されているのを目にしました。

「定めの祭の町シオンを見よ。あなたの目は平和なすまい、移されることのない**幕屋**エルサレムを見る。その**杭**はとこしえに抜かれず、その**綱**は、ひとすじも断たれることはない。」（イザヤ 33：20）

上の聖句から幕屋、杭、綱でシオンが構成されているのが分かると思います。さらにイザヤは続けています。

「あなたの**天幕の場所を広くし**、あなたのすまいの**幕を張りひろげ**、惜しむことなく、あなたの**綱を長くし**、あなたの**杭を強固にせよ**。 あなたは**右に左にひろがり**、あなたの子孫はもろもろの国を獲、**荒れすたれた町々をも住民で満たす**からだ。」（イザヤ 54：2-3）

末日が来るときに悪人は焼き滅ぼされて、神であられるイエス・キリストと義しい人たちだけが 1000 年という時間を使って最後の裁きの準備を整えます。そこは一つの街であり、一つの都市、一つの国であり、一つの家です。この大いなる幕屋（※大きなテントを想像してください）は中心に一本の太い柱があり、それを支えるように何本もの綱が張ってあって、その先には大きな杭（ステーク）が結び付けられて地面に刺さっています。これがシオンのイメージです。実際にそのような大きな幕が張ってあるわけではないのですが、イザヤはシオンが出来上がる様子から幕屋を想像し、世界中に散らばる聖徒が集まる場所を杭、すなわちステークと見立てたと思われます。

杭は予め決められた場所に打たれているようです。世界中のあちこちに杭が打ち込まれます。テントを建てるときにはまず中心の支柱が立って、その天幕をまんべんなく広げるためにそれぞれの杭に取り付けられた綱が引っ張られると、大きな幕屋

がその姿を現します。問題はこの「引っ張られる」という部分が何なのかということです。

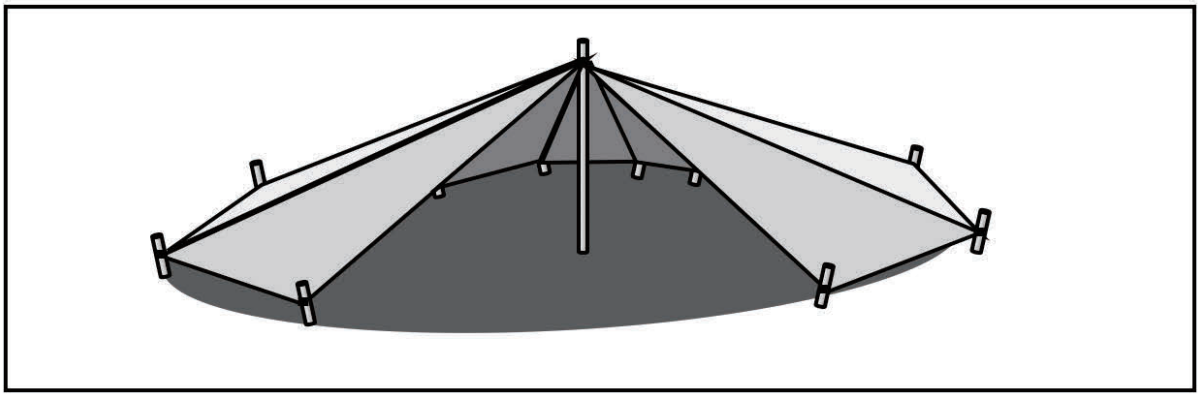


図34　杭によって引っ張られる幕屋

もちろん今の段階では、私達はイスラエルを集めるという神様のお仕事を実行している最中ですので、一度決められたシオンのステークは動くこと無く、私達が心を一つにしてサタンとその仲間の最後の猛攻に対して集まる場所、つまり「避け所」として存在しています。

「シオンの地とそのステークに集合することが，防御のためとなり，また嵐と激しい怒りが全地にありのままに注がれるときに，**その避け所となるため**である。」（教義と聖約 115：6）

しかし、やがてそのシオンが太く強い綱で中心に向かって引っ張られるときが来ます。シオンがその姿を表すときです。黙示録に次のような出来事が述べられています。

「すると、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが起り、また激しい地震があった。**それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったようなもので、それほどに激しい地震**であった。」（黙示録 16：18）

当然ですが、地面が引っ張られたら大地が揺れて地震が起こります。しかしこの地震は一体何が原因で起こる地震なのでしょうか？第三ニーファイ書で起った大災害の地震は、大地がその形を変えてしまったことが原因だと私達は記録から知っています。ヨハネは、この末日の最後に起こる大地震は人類がかつて経験したことがないほどのものであると説明しています。教義と聖約の中で、それに関連するのではないかと思われる啓示をジョセフ・スミスが受けているので読んでみましょう。

「見よ，彼（イエス・キリスト）はオリブの山に，また広大な大洋，すなわち大いなる深みの上に，また海の島々の上に，またシオンの地に立つであろう。そして，彼はシオンから声を発し，またエルサレムから語って，その声はすべての人の中で

聞かれるであろう。それは大水のとどろきのような，また激しい雷鳴のような声であり，山々を崩すであろう。そして，もろもろの谷は見えなくなる。彼が大いなる深みに命じると，それは北の地方へ退き，**島々が一つの地となる。エルサレムの地とシオンの地は，それぞれの所に戻り，陸地はそれが分けられる前の時代のようになる**。」（教義と聖約 133:20-24）

示現を通してみれば、世界中の大陸と島々が揺れ動いて、近づき、一つになる様子は、まさにシオンの地を中心にして世界中に広がるステーク（杭）が見えない強い綱で引っ張られるように見えるのかもしれません。その綱を完全に引っ張り終えたとき、人々はそこに新しい土地、シオンが出来上がっているのを見るでしょう。ノアの時の大洪水の水面下で神様の御心によって鷲の翼の形に切り取れらた聖なる地に、再び他の土地が結びついて元々あった形に戻るのです。

ノアの時は生き残っている全人類はノアとその家族だけで、彼らは船の上にいたためにこの大激震の影響を受けることはありませんでした。しかし、次にこの全地の大移動が起こるときには、地上にはかつてないほどの多くの人が生活しています。ヨハネが示現で見た、この大地震が起こるのは第 7 のラッパの第 7 の災いの鉢がこぼたれる時です。つまり、最後の最後、焼き払いの完了ですから、すべての悪人がこの全地の流動に飲み込まれます。地殻は変動し、地球の内部でもマントルが今までにない対流を起こすのかもしれません。とにかく、この大地の大移動で生き残れる人は一人もいないでしょう。

ここで、シオンができる直前の最後の最後で、末日の聖徒に与えられたある働きがやって来ます。世界の地図が書き変えられるほどの大地震や焼き払いが始まる直前、聖徒たちの姿が変わり始めます。まず、ヨハネの見た様子から読んでみましょう。

「またわたしは、天に大いなる驚くべきほかのしるしを見た。七人の御使が、最後の七つの災害を携えていた。これらの災害で神の激しい怒りがその頂点に達するのである。 またわたしは、**火のまじったガラスの海のようなものを見た**。そして、**このガラスの海のそばに、獣とその像とその名の数字とにうち勝った人々が、神の立琴を手にして立っているのを見た**。」（黙示録 15:1-2）

注意深く読むとここには三つのことが書かれています。1 つ目はこれから起こる焼き払いの準備が整い、それが始まるという知らせです。七人の御使いの七つの災害がそれにあたります。そしてその次に書かれている二つのことがとても興味深いのですが、一つはガラスの海、そしてもう一つが悪魔との戦いに打ち勝った人々です。「ガラスの海のそばに」と表記されているということは全地のすべてがガラスのようになっているわけではなく、地の一部がその様に変化し始めていると考えられます。また「海」という言葉がそのまま現在の「海」を表すわけでもありませ

ん。教義と聖約の中で、主はこのガラスの海について説明を与えてくださっています。

「問い。黙示録第四章六節でヨハネにより述べられているガラスの海とは何か。
　答え。それは**聖められた，不滅かつ永遠の状態にある地球**である。」（教義と聖約77：1）

私達の住む地球は最終的に昇栄した状態となり、日の光栄に住む者の永遠の住まいとなります[83]。そこはまるでひとつの「ガラスの海」のようであって、輝きに満ちています。なぜガラスの海なのかというと、その存在自体が「ウリムとトンミム」のような役割を持っていて、私達が知りたいと思うだけでそこから神様の知識が得られるようになるからです[84]。ですからここでヨハネが見ていることは最後の焼き払いに向けて、つまりそれは地球にとっての火のバプテスマのようであり、地球が生まれ変わり始める様子を描いたものだとも考えられます。問題はそれが始まる場所です。ヨハネが見た場所には悪魔との戦いに打ち勝った人々がいたと書かれています。そしてその人達は「神の立琴を手にしていた」と書いてあります。神様を賛美するための歌を歌う準備をしている事を表現しているのですが、状況から考えると、これはとても不思議なことです。今すぐにも世界中の滅亡を引き起こす7つの災いが訪れようとしているのに、なんとも悠長すぎると思いませんか？

実はこの時、もうすでに裁きはある意味終わっています。「うち勝った人々」とはそういう意味です。焼き払いはイエス様の毒麦のたとえにあるように、良い麦と毒麦の仕分けが完了した時に起こるのです。すべての末日の聖徒たちが自分たちのやるべきことを果たし、最後の役目を遂げようとするその瞬間、私達はその身に変化が生じ、その時を特別な場所で待ち望むことになります。聖典の中で何箇所かこの説明が書かれているので紹介します。

「それにもかかわらず，**信仰をもって堪え忍び，わたしの思うところを行う者は，勝利を得て，地上で受け継ぎを得るであろう。それは，変貌の日が来る時**，大地がまことにわたしの使徒たちに山上で示されたひながたに倣って変貌する時のことである。」（教義と聖約63：20-21）

「そして，半時間，天に静けさがある。その後直ちに，巻物が巻かれた後に開かれるように，天の幕が開かれて，主の顔が現わされる。そして，**生きて地上にいる聖徒たちは，身を変えられて，主に会うために引き上げられる**。」（教義と聖約88：95-96）

「それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に**雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い**、こうして、いつも主と共にいるであろう。」（1テサロニケ4：17）

---

[83] 教義と聖約88：18-20参照
[84] 教義と聖約130：7－9参照

「すべての人の子らに神の満ちみちる激しい怒りが注がれる日が、速やかに来る。神は、悪人が義人を滅ぼすのを許されないからである。そのため神は、満ちみちる激しい怒りを下し、義人を守るために火をもって敵を滅ぼすことになっても、**御自分の力によって義人を守られる。したがって、義人は恐れるには及ばない。たとえ火によってでも、彼らは救われるであろう**。」（第一ニーファイ書 22：16-17）

義人として、そしてイエス・キリストの弟子として、少しでもそれに近づこうとして最後まで努力し続けた人々はその日、自分の体が輝き始め、この世のすべての憂いから自分の心が解き放たれて行くのを感じるでしょう。そしてその体が空中に浮き始め、今まで見ることも想像することもできなかった世界が見え始めます。体が変貌するというのは「弱くてもろい肉体が、主にお会いできるように変えられる」という意味です。

そこで考えてもらいたいのです。ヨハネはこの義人たちのいる場所から、ガラスの海がスタートしたと言っているのです。末日の聖徒が集まる場所とはシオンのステークです。今まで弱い聖徒たちの避け所として建てられてきたステークですが、最後までその目的を達した時、聖徒たちの身が変貌するその時、勝利を受けて逆のことが起こるのではないでしょうか。つまり、聖徒の身が変えられて空中に引き上げられたその場所がガラスの海に変貌し始め、真の意味で「ステーク（杭）」となって、その中心となるシオンに引っ張られる。全地の姿が変わり、その時にシオンの幕屋がその姿を表す。レーマン人の預言者サムエルが「義人の住む街には特別な祝福があるのだ」と言った言葉を思い出してください。もしそうだとするのであれば、私達こそその地を清める者、その地を真の意味でシオンの杭、すなわちステークにする者だということです。義人であり、キリストの弟子になろうと努力を続ける時にもしそういうことが起こるのであれば、私達に与えられている祝福と責任はなんと大きく偉大なことでしょう。

シオンの中に復活する

私達末日の聖徒の多くはその日を待たずにこの世を去るでしょう。でも与えられている責任は同じです。この世にいる間、義人として、そしてキリストの弟子として務め終わった時、私達を待つのは第一の復活です。

第一の復活は厳密に言えばイエス・キリストの復活から始まっています。その時から現在に至るまで、例えば天使モロナイやバプテスマのヨハネのように、末日に向けての使命が与えられている人たちは復活を遂げます。そして気づいていただきたいのは、この人々が**義人であった**ということです。復活の順序はこの世での義しさが基準になります。すべての人の復活は義しい者から始まります。

「すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、**キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり**・・・。」（1テサロニケ4：16）

そしてシオンが確立され、福千年の朝が明けると同時に、その輝きの中で私達の第一の復活が始まります。つまり私達が目を覚ます場所は「シオン」、神の国なのです。

「シオンに住む者よ、声をあげて、喜びうたえ。イスラエルの聖者はあなたがたのうちで大いなる者だから。」（イザヤ12：6）

私達はイエス様と共に住むという喜びの中で千年間、すべての人の儀式を執り行い、最後のステージへと向かう準備をします。そして福千年の最後に悪人の復活が起こります。

「主が天から声を発する日が来る。天は震え，地は揺れ動くであろう。神のラッパが長くかつ高く鳴り響いて，眠っているもろもろの国民に，『あなたがた聖徒よ，立ち上がって生きなさい。あなたがた罪人よ，わたしが再び呼ぶまで，そのまま眠っていなさい』と言うであろう。」（教義と聖約43：18）

「さらにまた，別のラッパが鳴り響くのは，第三のラッパである。それから，裁きを受けて罪があることを認められる人々の霊が来る。これらの者は死者の残りである。千年が終るまで再び，すなわち世の終りまで再び，彼らは生きることはない。」（教義と聖約88：100-101）

真の末日の聖徒として本当の喜びを得たいのであれば、この福千年の最初に復活できる望みを抱き、この世で与えられた自分の務めを探し出して、その試しの時期が終わるその日まで働き続けるべきです。その報いとして与えられるものは私達の想像を遥かに超えた偉大なものとなることでしょう。

15 章：末日の聖徒

イザヤ書の 18 章で、天のお父様は私達末日の聖徒の働きを「静かに見ておられる」と言われました。でもそれは何もしないで休んでおられるという意味ではありません。私達の信仰が無くならないように、密かなところから私達を支え、励まし続けてくださっているのです。神様がご自分の業で休まれることはないのです。

「シオンの義が朝日の輝きのようにあらわれいで、エルサレムの救いが燃えるたいまつの様になるまで、**わたしはシオンのために黙せず、エルサレムのために休まない**。」（イザヤ 62：1）

ですから私達が最後の働きに出かける時、「神様は私達共に居てくださるのだろうか？」とか「困った時に助けてくださるだろうか？」と心配する必要はないのです。神様はこう言っておられます。

「ヤコブよ、何ゆえあなたは、『わが道は主に隠れている』と言うか。イスラエルよ、何ゆえあなたは、『わが訴えはわが神に顧みられない』と言うか。 あなたは知らなかったか、あなたは聞かなかったか。主はとこしえの神、地の果の創造者であって、弱ることなく、また疲れることなく、その知恵ははかりがたい。
弱った者には力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる。 年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れはてて倒れる。
しかし主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼をはって、のぼることができる。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない。」（イザヤ 40：27-31）

あなたがこの時、この時代に、末日の聖徒になったのは偶然ではないと思います。きっと天の高い場所に深い御心があって、きっとここに来る前に私達が天で決意した思いがあって、それらをつなげるために神様がこの機会を与えてくださったのではないでしょうか。そして今がそれを実行する「**その時**」なのです。

十人のおとめ

主は教義と聖約の 33 章で不思議な事を言われました。今は十一時なのでランプの芯を切りそろえて火をともし、油を備えて用意しなさいと。十一時とは夜中の十一時のことです。もうすぐ日が変わる真夜中。残り時間はあと僅かです。ランプの芯と油の話は、主ご自身がこの世におられる間に話された「十人のおとめ[85]」のたとえ話から来ています。

十人のおとめは結婚式に招待された人たちであり、選ばれて花婿の行列に参加して共に歩み、最後には花嫁の待つ新居で祝宴に参加できるという資格を与えられてい

[85] マタイ 25：1-13 参照

ました。結婚式は夜に行われるため、彼女たちは今か今かと花婿が到着し、花嫁の待つ新居に入って祝宴が行われるのを楽しみに待ち望んでいました。ところが、いつまでたっても花婿が到着しません。別の言い方をすれば、回復から 200 年が過ぎるのに、まだその花婿が来られないのです。あまりに遅いので彼らはうとうとと眠り始めてしまいました。真夜中に声が聞こえて、「さあ、花婿だ、迎えに出なさい！」と呼ぶ声がしたので慌てて、行列に入るために明かりを整え始めましたが、思慮の浅い 5 人の者たちは予備の油を準備していなかったので、その明かりは消えそうになっていました。そこで思慮深い他の 5 人の者に向かって「油をわけてください」と願いましたが、「私達とあなた方の分に足りません」と言われて断られ、しかたなく店に油を買い求めに行きました。その間に花婿は到着し、用意のできていた者たちは花婿と一緒に婚宴の場所に入り、そして戸が閉められました。

その後のお話がどうなったかはよくご存知だと思います。十人のおとめとは私達、末日の聖徒です。主の偉大な婚礼の宴に招待された人たちです。しかし私達はこの思慮深い者と思慮の浅い者のどちらにもなりうるのです。今は夜中の十一時、もうすぐ花婿であるイエス・キリストが到着されます。私達はどちらの者でありたいでしょうか。私達は今の時点で、婚礼に招かれており、それに参加する資格が与えられています。でもそれが実現するためにはランプが最高の光りで輝くようにきちんとその芯が切りそろえられており、そしてちゃんと油が準備されている必要があるのです。

「見よ，畑はすでに白くなり刈り入れを待っている。**今は十一時であり**，わたしが働き人をわたしのぶどう園に呼び入れる**最後の時**である・・・**忠実であり，常に祈り，あなたがたのランプの芯を切りそろえて火をともし，油を備えて，花婿が来るときに用意ができているようにしなさい**。見よ，まことに，まことに，あなたがたに言う。**わたしはすぐに来る**。まことにそのとおりである。アーメン。」（教義と聖約 33：3, 17-18）

「わたしが栄光のうちに来るその日に，わたしが**十人のおとめ**について語ったたとえは成就するであろう。**賢くて，真理を受け入れ，自分の導き手として聖なる御霊を受け**，そして欺かれなかった者，すなわち，まことにわたしはあなたがたに言うが，彼らは切り倒されて火の中に投げ込まれることなく，**その日に堪える**であろう。」（教義と聖約 45：56-57）

大切なワクワク感

パウロが語った「喜び」が御霊の実であり、日々の生活に**喜びを見つけることは聖霊を招くこと**だという事を思い出してください。聖霊を招く喜びはイエス・キリストの福音の実践に存在します。イエス・キリストの福音は喜びの福音です。福音の語源は「良きおとずれ」または「よろこびのおとずれ」です。ですから私達がキリ

ストの弟子となろうという時、日々喜びを見つけ出す必要があります。ただ、良いことが起こるのを待つだけでは足りません。「**見つけ出す**」必要があるのです。

それでも日々迫ってくる神様の訓練である試練は楽しいものとは言えません。ときには「神様に従って何の良いことがあるのか？」と、たとえ頭では理解していても心がついて来ないこともあるでしょう。そんな時はマラキの言葉を思い出してください。

「あなたがたは言った、『神に仕える事はつまらない。われわれがその命令を守り、かつ万軍の主の前に、悲しんで歩いたからといって、なんの益があるか。 今われわれは高ぶる者を、祝福された者と思う。悪を行う者は栄えるばかりでなく、神を試みても罰せられない』。 そのとき、**主を恐れる者は互に語った。主は耳を傾けてこれを聞かれた**。そして**主を恐れる者、およびその名を心に留めている者のために、主の前に一つの覚え書がしるされた**。 万軍の主は言われる、彼らはわたしが手を下して事を行う日に、わたしの者となり、**わたしの宝となる**。また人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ。 その時あなたがたは、再び義人と悪人、神に仕える者と、仕えない者との区別を知るようになる。」（マラキ 3：14-18）

私達の持つ、「高価な真珠」という聖典の名前はイエス様が話された天国のたとえ話から来ています。その話の中で、高価な真珠を見つけた商人はその価値ゆえに、家や財産のすべてを売り払ってでもその真珠を買い求めたとあります。イエス・キリストの福音はまさにその真珠です。その真珠を買った人は「商人」つまり専門家だったから、その真珠を見ただけで、その価値がわかったのです。私達は専門家ではありませんが、学べば、そして研究すればその価値を見出すことができます。そうすれば、それが喜び以外の何物でもないことが分かるでしょう。パウロの名前はもともとサウロであって、イエス・キリストに敵対する者でした。しかし、ある日を境にキリストの福音を熱心に研究し始め、その言葉、予言、計画、そして神様の御心を知った時、あまりの喜びに満たされ、聖霊と火によるバプテスマを受けます。おそらく何度も受けたのではないでしょうか。その結果として彼は手紙の中でキリストの福音が自分にとってどれだけ価値があって、どれだけ喜ばしいものであるのかを書き記しています。

「わたしは八日目に割礼を受けた者、イスラエルの民族に属する者、ベニヤミン族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法の上ではパリサイ人、 熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者である。 しかし、わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。 わたしは、更に進んで、**わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに**、いっさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、それらのものを、ふん土のように思っている。それは、わたしがキリストを得るためであり、 律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信

仰に基く神からの義を受けて、**キリストのうちに自分を見いだすようになるため**である。 すなわち、キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死のさまとひとしくなり、 なんとかして死人のうちからの復活に達したいのである。 わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、**ただ捕えようとして追い求めているのである**。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである。」（ピリピ 3：5-12）

イエス・キリストの福音は喜びの福音です。もし、聖霊の存在を理解し、聖霊の助けによってキリストの福音を学ぼうとし、そして学んだことを実行するならば、パウロと同じように、そしてニーファイやジョセフ・スミスたちと同じように、私達も神様の深い御心を知ることができます。その時、私達は喜びに満たされ、「さらにこの先には何が待っているのだろう？」というワクワク感に満たされます。それが必要なのです。このワクワク感こそが私達が前に進むためのエネルギーになります。

私達がこの世で成功するために用意された喜びの「びっくり箱」を次々と開ける時に、私達はシオンへ一歩、また一歩と近づいて行くことでしょう。

モルデカイの言葉

ここまでの話を読んで、「本当に自分が教会員となったのは偶然ではないのか？」と確信を得られない人もいるでしょう。だからこそ確信を得るために備えられた道をたどるのです。私達が今、この時代にここに居ることが偶然なのかどうか、ぜひ考えてみてください。モルデカイが自分が育てた親戚にあたる娘エステルに向かって言った言葉をどうか熟考してみてください。

エステルがペルシャ王アハシュエロスの后として召された時、国のすべてのユダヤ人は滅亡の危機にさらされていました。彼らを救えるのは唯一エステルだけだったのです。しかしそれは容易なことではありませんでした。それを実行するためにはエステルは命を捨てる覚悟が必要だったのです。だからこそ若いエステルは迷いました。その時、育て親であるモルデカイはエステルに向かって次のように語りました。

「あなたがもし、このような時に黙っているならば、ほかの所から、助けと救いがユダヤ人のために起るでしょう。しかし、あなたとあなたの父の家とは滅びるでしょう。**あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったとだれが知りましょう**。」（エステル 4：14）

この状況でこの問題を解決できる立場にあるのはエステルしか居ないことは明白でした。しかし、それでもモルデカイはイザヤの言った「神の計画は決して崩れない」ということを承知していたのか、彼女に向かって、「もしエステルがやらない

ならば、きっと神様は他から救いを起こすことができるだろう、でもエステル、あなたが王の后として迎え入れられたのは、今この瞬間のためではなかっただろうか」と問いかけました。エステルがその言葉を理解し、「自分のやるべきこと」を再確認して祈りと断食によって、その使命を実行した時、奇跡が起こります。ユダヤ人が救われただけではなく、多くの人がユダヤ人に改宗するという、イスラエルを遥かに離れた異国で、そのような不思議が起こったのです。

「あなたがこの時、この場所にいるのは、神様の目的のためでなかったとだれが知りましょう。」　この言葉を私達も自分に投げかけてみることをお勧めします。

キリストの弟子

末日の聖徒はキリストの弟子です。イザヤはその人達の事を「キリストの名を体に書き記した人たち」と表現しています。

「ある人は『わたしは主のものである』と言い、ある人はヤコブの名をもって自分を呼び、**またある人は『主のものである』と手にしるして**、イスラエルの名をもって自分を呼ぶ。主、イスラエルの王、イスラエルをあがなう者、万軍の主はこう言われる、『わたしは初めであり、わたしは終りである。わたしのほかに神はない。だれかわたしに等しい者があるか。その者はそれを示し、またそれを告げ、わが前に言いつらねよ。だれが、昔から、きたるべき事を聞かせたか。その者はやがて成るべき事をわれわれに告げよ。**恐れてはならない、またおののいてはならない。わたしはこの事を昔から、あなたがたに聞かせなかったか、また告げなかったか。あなたがたはわが証人である**。わたしのほかに神があるか。わたしのほかに岩はない。わたしはそのあることを知らない。」（イザヤ 44：5-8）

キリストの弟子は人類の歴史ではアダムから始まります。イエス・キリストの福音に従って生きた人たちは皆、キリストの弟子です。そのキリストの弟子の中でも最後の重役を担うのが末日の聖徒です。考えてもみてください。今までの歴史の中ですべてのキリストの弟子が自分の役割を初めから知っていたでしょうか？ニーファイは自分の人生の中でアメリカ大陸で預言者となることを知っていましたか？パウロはキリストの迫害者からキリストの擁護者となることを知っていたでしょうか？ペテロはいつか魚をとる漁師から、人間をとる漁師になると知っていましたか？ジョセフ・スミスは自分がキリストの教会を回復する旗となると知っていたでしょうか？答えはすべて「いいえ」です。

私達もまたこの先自分が努力を続ける時に待ち受けている人生の役目を知りません。だから学び実践するのです。主が備えてくださった方法を使って「知る」のです。やがて自分の時間が終わる時に、キリストの弟子として「すべてをやり尽くせた」と言えるその瞬間に向かって。

キリストは栄光をまとわれて来られる

私達の時代のクライマックスは花婿であられるイエス・キリストの再臨です。

今度主が来られる時は、前のように赤ん坊の姿で来るのではありません。神の栄光をその身にまとわれて、太陽よりも光り輝いて来られるのです。悪人はその光に燃え尽き、地はその姿を変えて聖さを受けることになります。私達の肉体は変貌し、心は喜びに満たされて、主イエス・キリストを指差し、「見よ、これが我らの王だ！私達が待ち焦がれた方だ！」と叫ぶのです。

限られた時間と空間の中での生活は消え去り、そこには昼もなく、夜も無く、ただ、主の栄光が清く義しく生きた者のために永遠に輝き続けます。

天から降りてくる前のシオン、エノクの民と抱き合って喜びあい、自分たちの勝利を称え合います[86]。

光の中で神殿の業を続けて、死者を復活させ、神の儀式を執り行い、永遠の神権とともに天のお父様の御顔を再び見ることのできるその日を待ちわびて働き続けます。

一緒に頑張り続けた懐かしい人達と喜びを分かち合い、自分たちの末日まで義のバトンを渡し続けてきてくれた義人たちと会って、目に涙を浮かべて感謝を伝えるでしょう。

そこにはもう悲しみの涙はありません。主が私達の涙を拭い去ってくださるからです[87]。

その日を夢見て、「末日の聖徒」として、今日も一歩前へ進んで行きませんか？

終

[86] モーセ 7：63 参照

[87] イザヤ 25：8 および黙示録 21：4 参照

あとがき

この個人用の聖典研究資料は、私のインスティチュートを過去に受けてくださった生徒たちが、各レッスンごとにバラバラに学んだ福音の知識を、一つのテーマに沿ってつなげることができるように作成したものです。

テーマは聖典に共通するものであれば、何でも良かったのかもしれませんが、せっかく私達が今、「末日の聖徒」となっているのですから、そこに神様のご計画の意味を結びつけてもらえるように、それをテーマとして福音の教義と原則を書き連ねてみました。

これが全てではありません。神様のご計画はこんな文章に書ききれるものでは無いのです。ただ、入り口として、ただ、始めるためのきっかけとして使っていただければ良いと思います。

私もまだまだ道の途中で、ほんの始まりのところに立っているにすぎません。これからです。みなさんと一緒にイエス様をお迎えして喜びの涙を流せる日を心から待ち望んでいます。

義しい者たちに、義しくなろうと努力する者たちの上に、神様の祝福が豊かに注がれますように。

2022 年 11 月 14 日
黒木　俊宏